

---

# 花よりも華の様に舞う桜

鈴月鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花よりも華の様に舞う桜

### 【Nコード】

N2886R

### 【作者名】

鈴木鈴

### 【あらすじ】

かなり男勝りな主人公「月宮 桜華」が異世界トリップ。「何で私が！今更そんなこと夢見るガキじゃないし、もう高校も卒業したつてのに！」不満爆発。レフィノーラ国に落ちた桜華はアズと出会い、すぐに王妃に迎えられる。本編完結しました。ありがとうございました！ってことで、オウカの息子ことスイレン君の物語・番外編開幕……しちゃって良いの！？

## プロローグ

ちよつと待てよ。

私は冷静に物事を判断しながら、今の状況を整理する。

そう。私は高校生を晴れて卒業し、4月。めでたいことに結婚が行われるはずだった。

私が2歳だった時に親の企業は倒産し、借金まみれに。

救ったのが婚約者である良いところの坊ちゃん。

でも、4年前に借金も全て返し終えて、お父さんの会社は成長して生活に困らなくなつて。

私はお嬢様学校に入学させられた。

そして、約束だったのだろう。8つも離れた婚約者と結婚することになつていた。

私は親の言いつけのままに結婚して、言われたとおりの生活をして、言われたとおり子供を産んで、それから……って、今はそんな人生設計どうでも良いわ！

とにかく、そこそこ金持ちの家の娘になつた私の未来は決まっていた。

なのに、誰がこの未来を用意したのだろう。

目の前には綺麗な調度品が整えられた部屋。

ここへ来た時、真つ暗だったものの、すぐに明かりがついた。現れたのは金髪の……騎士のコスプレ？ をした男達。

いやいや。確かに、此処はヨーロッパみたいな造りですけど。

もしかして、ドラマの撮影？

もしくは某テレビのどつきり？

ちがう。短時間で出来る様なセットじゃない。

それに、彼等は日本語を話していた。

「貴様は、何者だ！」

長い金髪を一つくりにして、空の様な綺麗な蒼眼が私を睨み付ける。

二十歳前後の男は、声高に私にそう聞いた。

「えっと、あっと……」

私は何も言えず、言いたい言葉を飲み込む。

テレビや漫画でしか見たことのない本物の剣が私に向けられていた。

もしかして、異世界にトリップ？

今はやりの？

なんで私なのよ！

「レキ、止める」

太く、低い声が私に問い掛けた男・レキを止めさせた。

「ですが、陛下……」

「くどいぞ。女一人、俺に傷一つ負わすことも出来ない」

新たに現れたのは長い茶髪に藍色の瞳をもつ男だった。

その男は近づくと、私の顎を掴んで引き上げる。

「女、その髪は地毛か？」

「あ、当たり前でしょ！」

私は男の手をたたき落とす、素早く立ち上がって距離をとる。

私の身長は中学校から変わらず155?くらい。

現代の日本人では小さい方だ。

クラスでも、前から3番目くらいに彷徨いてたし。

私の行動に騎士(?)達は身構えたが、男が手だけで制した。

「名前は？」

「聞くのなら、そっちが先に名のりなよ。いや。それよりも、ここはどこ？」

私の直感。

此処が異世界なら、間違いなく殺される。

目の前にいる男はレキが言うには「陛下」。

おそらくは此処は王国で、男が王様と言ったところだろう。

なら、此処は王宮。不敬罪、もしくは不法侵入で殺される。

けれどもこちとら伊達に何年もお嬢様しつつ遊んでいた訳ではない。

護身術は出来る。負ける気はない。パニックになりすぎてさえる私の頭バンザイ。

男は愉快げに笑った。

「此処はレフィノーラ国。俺は国王のアズロウ・カッシエーラ・グラキシス・レフィノーラ。さあ、お前の名は？」

思った通り、王様だ。

現状をこれだけ冷静に受け止めている私にもビックリだが、まあ、勉強と言う名の【小説を先生にばれずに読む時間】が功を成して良かった。

それに、此処が異世界なのは間違いないようだ。

レフィノーラなんて聞いたことないし。

それに、男のみのこなしが貴族然としたところがある。

これは、私が良いところのお嬢ちゃんだったから言えることだけ  
ど。

「……月宮 桜華」

「オウカ？ 聞き慣れない名だな」

「当然よ。どうせ、異世界の名前だもの」

私は後ずさった。

逃げる道はないか。

窓を盗み見るが、どうやら一階ではない。

幾ら反射神経や運動神経が良い私でも、一階でなければ逃げ切る  
自信はない。

私の言葉に彼は笑いを堪える様に私を見てきた。

追い込まれたウサギの気分だ。

「その話は、本当か？」

「おあいにく様。本当よ。私はなんでこの世界に来たのか、何で此  
処にいるのか分からない。調べる必要があるわ。帰る方法を探さな  
くちゃいけない。だから、此处で死ねないの。じゃあね！」

ええい。

こうなったらやけくそだ。

早口にそう告げると、私は露台に駆け込んだ。

騎士達が慌てるのが見える。

アズロウとか名乗ってた男が瞠目する。

そのまま露台から飛び降りた。

思ったよりも高く、3階だった。

こりゃ失敗。死ぬかもな。

お父さん、お母さん、それから大切な弟の零。

駄目な私でごめんなさい。

「死んだら、元の世界に帰れるかな？  
死ぬ時は、痛くない方が良いなあ。」

私は少しでも衝撃を和らげる為に身を丸めた。

しかし、いつまでも思った様な感覚はない。

うつすらと目を開けると、彼が私を抱き上げていた。

驚きに目を見開く。

「嘘……」

「嘘なものか。まったく。死ねないと言った途端に飛び降りる馬鹿がいるか？」

彼は魔王の如く笑っていた。

今居るのは地面ではない。

露台から落ちた途中。空中に浮いていて。

ようやく地面について彼は私を降ろすと、私の手の甲に口づけた。

「歓迎するぞ。異界の姫」

お父さん、お母さん、それから大切な弟の零。

今日は私の厄日でしょうか？

## プロローグ（後書き）

楽しんで頂けたら幸いです。



## 1 物わかり良すぎるのもどうかと思う

私は案内されるままに執務室の様な場所へ連れて行かれた。行き交う人々の中に日本人特有の黒髪はいない。

だから、注目されてしまって、少し恥ずかしかった。

城で正解の様だ。

柱には見事な彫刻が施され、イメージ的にはヨーロッパの城かな。執務室にはいると、美人の侍女さん達が紅茶を出してくれた。

紅茶を出すと侍女さん達はすぐに部屋から出て行ってしまふ。

うーん。東京の浅草とかにはああいう人いるけど、こっちの方が自然体でしっくりくるなあ。

メイドカフェとは大違い。

それはともかく、私は彼に向き直った。

「アズロウ陛下。見逃してくれませんか？」

「誰を？」

「私を。外に出してって言うてるの」

彼は中央の椅子に座り、溜息を吐いた。

むう。もしてかして、最後敬語じゃないのが駄目だったかな。

始めはどうであれ、相手は一応王様なわけだし。

「俺のことはアズとでも呼べばいい。敬語も不要だ。それとオウカ。その願いは無理だ」

「何だよ」

私の考えていることを見透かした様な答えには驚いたが、そうと決まれば敬語を使う必要はない。

さすが私順応能力高くて良いわあ。

「この国には完璧な黒髪なんて居ない。この城。いや、この部屋から出ただけで注目されたらう」

「それは……」

「それに、街に出ればその容姿じゃあすぐにでも人攫いに遭うのがおちだ」

此処はどうやら中世ヨーロッパが舞台だと思って良いらしい。

この様子から行くと、町並みも石畳で、治安も日本よりは悪いだろう。

着ている服も、仕草も、全てが見事に仕込まれている。

どつきりではないと、今更納得。

だって、こんなに見事なら、生まれつきでもない限り無理だし。

「じゃあ、私はどうすれば良いのよ」

むくれた私に、アズは微笑んだ。

意地悪な笑みだ。腹黒そう。

「俺の妃になればいい。ちょうど後宮の蠅共を始末したかったところだ」

「アズ！」

抗議したのはレキだ。

アズの視線は私に注がれたまま。

私の反応を見ている様だった。

「妃、ね。いつでも捨てられる、呈の良い人形って所？」

的確についた私の言葉に、アズは感嘆の息をついた。

それに思わず鼻で笑ってしまう。

この世界の女なら、迷わず飛び付いただろう。

何も考えず、王妃というポジションに。

けれどいつか必ず、私は消える。

元の世界に還るのだ。

こんなにも冷静で居られる自分が不思議でならなかった。

アズの隣に立つレキが私に哀れみの視線を送ってくる。

「それでいいよ。その代わりに、この世界の知識を頂戴。元の世界に帰る方法を探す手助けもして欲しい」

「勇ましいな」

アズの言葉は素直に褒めている様だった。

哀れみなんていらぬ。

好きでもない場所に、望まれても居ない、望んでも居ない世界にいてやるのだ。

これぐらいの譲歩は必要だ。

「いいだろう。その代わりに、妃としての教養も身に付けてもらう」  
「わかった」

話がこんなに早く進むとは思わなかった。

アズは扉の方に立っていた騎士に視線を送る。

この国では金髪が普通なのだろう。

その騎士も金髪で、紫の瞳だった。

「ダルフィ。キャサラに蒼の間を整えさせろ」  
「分かりました」

ダルフィは一礼して部屋から出て行く。

そう言えば、私、何か忘れてないか？

首をひねっていると、一つの単語が浮かんだ。

王妃。

つてことは……？

「あと、アズ。えっと……その」

「なんだ」

「夜の相手は、遠慮したいんだけど」

私の言葉に、アズは口端をつり上げた。

「お前の様な子供を相手にするほど、女に困って……」

「私、18歳なんだけど」

私の宣言に、アズのみならず、レキも啞然としてしまった。

でした。異世界トリップ（日本人版）年齢低く見られる現象。

ただでさえ日本人はちっちゃいのに、私はその中でも小さいのだ。

「……本当か？」

「本当よ。嘘ついてどうすんの。何歳に見えた訳？」

「13、4くらいだと」

アズはレキを見上げると、レキも頷いた。

さいですか。レキもそう見えた訳ね。

「私の国はただでさえ小さいのに、私は特に小さい方だったからね。気にしないで良いよ」

まさか中学生から成長が止まったなんて言えない。

「それと、アズは何歳なの？」

「20歳だ」

「この国で成人は？」

「18歳だな」

ふうん。意外と若い王様なんだ。

成人して間もないのに王位を継いでいると言うことは、先王は亡くなったのか、それとも愚王だったのか。まあ、どうでもいい。

私は紅茶をすすった。

さてと、これからすることも決まった。

後は、この世界の事を知らない。

「ねえ、さっき空を飛んだのって魔法？」

「そうだ。とつさに使ったが、オウカは使えないのか？」

アズの質問に私は頷いた。

使ったことありませんよ。そんなの。

「私のいた世界では、魔法はおとぎ話なの。作り話の中には多く使われているけど」

私の言ったことがおかしかったのか、アズはレキを見た。

レキもアズと顔を見合わせる。

「だ、そうだ。こんなに魔力が高いのにな。もったいない」

「アズの言うとおり、確かに惜しいとは思っ」

「まあ、そっちは追々考えよう」

レキは何故か敬語が抜けてる。

初め会った時、アズのこと陛下って呼んでなかった？

「レキは、その、アズの騎士じゃないの？」

私が問うと、レキは笑った。

清々しいほどの笑み。

うん。美形だ。

「俺の名はレキ・アーノルド・クフェーラ。俺の母がアズの父の妹で、俺たちは従兄弟なんだ。だから、一目が気にしないところでは、敬語とかは止めている。オウカも、それで良いか？」

「うん。敬語ってなんだか堅苦しいし。自然体で良いよ」

すっかりと溶け込んでいる私。

素晴らしいではないか。

素直に笑っている私を、アズは急に真剣な眼差しで見してきた。なんだか不穏な空気を察して、私はアズを見る。

「オウカは、どうしてそんなに冷静でいられる？ 普通、もっと喚いて嘆いても良いと思うが」

アズに聞かれ、私は笑い続けた。

そこを考えはしても、言われなくなかった。

「喚いて、悲しんで、叫んで……それで何かなるの？ もしかしたら、元の世界にも帰れないかもしれない。アズが気まぐれを起こさなかったら、私は不敬罪とかで死んだ。なのに、そんなこととして、悲劇のヒロイン演じて、何かなるの？」

躰が震えてきた。

言い出したら止まらない。

だから、言いたくなかったのに。  
考えない様にしたのに。  
私はもう一度、微笑んだ。

「ならないよ。何も変わらない。変わんないだよ！ だから、自分を、抑えて……れいせい……」

涙が流れた。

止められない。

止まらない。

怖い。独りは、怖い。

涙を拭うが、手の隙間から絶え間なく涙がこぼれる。  
止まれ。止まれ。

「オウカ」

アズの大きな手が、私の視界を塞いだ。

ひんやりとした手の平と間に、心が落ちついてゆく。

「すまない事を聞いた。我慢しなくて良い。人間なら、当然の感情だ。ゆっくり呼吸しろ」

言われたとおりにゆっくり呼吸する。

すると、体の中がじんわり暖かくなってきた。

優しい気配。

その安堵で眠気が私を襲う。

また、魔法だろうか。

でも、まだ寝ては駄目だ。

この世界のこと、常識、何も知らない。

「眠れ。詳しいことは明日話そう」

優しい声は私にそう促してくる。

さっきの俺様はどうしたの？

優しい腕に支えられて、私は眠りについた。



1 物わかり良すぎるのもどっかと思っ(後書き)

世界観かけませんでした……

## 2 こいつは何者だ？（前書き）

レキ視点です

## 2 こいつは何者だ？

その日もアズは執務室で仕事をしていた。

前王の悪政を治すこと。

それはとても大変なことは分かっている。

前王は女好きで後宮には二十名ほどの美姫がいた。

しかし、それはただ民の生活を圧迫し、美姫の間でも前王の死後、アズに取り入ろうとする者が多かった。

「後宮を廃止したいのもやまやまだが、どうすればいいのか……」

「アズが王妃を迎えたらどうなんだ」

執務室にはアズと騎士団の俺とあと2人だけだったからか、俺は敬語を使わずに話していた。

俺の提案に、アズは頂垂れる。

「誰を、だよ」

かなりの難題だ。

俺に求められても困る。

そう言うことなら宰相のアグロに言って欲しい。

まあ、ふっかけたのは俺だけだ。

「カーネリア嬢は？ それとも、レティア姫？」

「喧嘩売ってるのか。お前は」

アズが半眼で睨んでくる。

カーネリアもレティースもアズにとって天敵以外の何者でもない。

俺は苦笑する。

アズは日に日に弱っている。  
それは微か。わずかに魔力が削られていつている。  
それが少し心配なのだが。

その時、ふと結界に違和感を感じた。

王城には外敵から守るためのバリアーが張つてある。

特に、油断しやすい王の私室や寝室には。

今まで数多くの美姫が忍び込んだが、誰一人として、取り入ることに成功した者はいない。

それどころか今のところほぼ半数に暇を出せた。　その王の私室に反応。

俺はアズと同時に立ち上がった。

「今日は誰かな？」

愉快地にアズは歩いて行く。

アズはこの王城強いてはこの国で一番魔力が強く、底が分からない。  
い。

魔力は寝ていれば回復するものだが、あまりに大きすぎるために、供給と支出が間に合わないこともたまにあり、アズは倒れることもある。

まあ、それは子ども頃の話だとして、今は制御がキチンとされているし、アズも馬鹿ではないから無茶はしないと思うが。

「陛下。俺が先に行きます」

俺は先頭切つて部屋の中に突入した。

中は薄暗かった。

しかし、何かが動いているのが分かる。

他の者に電気をつけさせて、俺はその不審人物に刃を突き立てた。

「貴様、何者だ！」

俺が質問を投げつけると、見たこともない娘は狼狽した。

「えっと、あつと……」

その髪は長くこの大陸ではまず見ない黒い髪の少女だった。

その瞳も同様に黒く、そしてあどけなさを残す面立ち。

年齢はざつと13、4歳くらいだろう。

一目見て、愛らしく美しかった。

後宮にいるどの美姫にもない真っ直ぐな信念を持つ瞳が。細く白い手足が。

けれども彼女は侵入者。容赦してはいけない。

それに奇妙な服を着ている。

女なのにズボンをはき、まるで小姓のようだ。

問いつめる俺を、アズは柔らかく制した。

その後彼女の話に驚かされる。

彼女が異世界からきたこと。

アズが王妃に迎えると言ったこと。

彼女が成人していたこと。

なにより、知らぬ土地に一人なのに気丈に振る舞い、己のするべき事を冷静に受け止めている。

それは並の神経には出来ないことだ。

強い。俺にとって彼女は王妃として賞賛するに十分な素質を持っていた。

「どつする」

俺は魔法によって眠った彼女がソファで寝入った後、アズに聞いた。

アズは彼女を見て、微笑んでいる。

「どうするも無い。これを、王妃にする」

アズの決断は絶対だった。

だから、俺は頷く。

正直、初めて彼女を見たときはぐらりと来た。

けれども何年もアズの側にいる俺だから分かる。

こいつは確実に俺よりも彼女に一目惚れした。

でなければ、彼女を王妃に等という戯言は言わなかっただろう。

本人は無自覚なようだ。

彼女の頬に流れ落ちた雫をそつとアズはぬぐってやる。

「魔力はどうする。お前は感じただろ」

彼女は異世界人。

そうでなければ魔力の高さも、その魔力を身に宿したまま平気でいられる精神力も説明がつかない。

彼女の魔力はアズに匹敵する。

手元に置いておくのが監視するにも丁度良い。

「レキ。すぐに魔力抑制装置を用意しろ。腕輪を3種類に首飾りを

一つ。それから銀のピアスを」

「了解」

その数は相当なものだ。

普通なら一つで事足りる。

重要犯罪者でも、最高3つまでだ。

その数は、アズと同じ。  
魔力制御装置は魔力を感知されない為にも付けるのだ。  
おそらく、他の者に知らせる気がないのだろう。

「オウカのこととは他言無用だ。ただ、王妃を迎え、後宮を廃止する旨を伝える。オウカの面会はアグロに通すように。オウカの事を探ろうとする者は始末しろ」

物騒だな。俺はあまり人を殺すのは好きじゃないぞ。  
俺は溜息を吐いた。

「そう言うのは、アグロに言ってくれ。今、呼んでくるから」  
「分かった」

俺はオウカとアズを残して立ち去った。  
出会ったばかりだ。アズは何も手を出さないだろう。  
……たぶん。

オウカという娘。  
異世界の娘。

普通なら、オウカの言うとおりに不敬罪で死んでも可笑しくはない。  
い。

オウカはアズの気まぐれと言ったが。  
これからどうなるかは分からない。  
オウカは帰ることを願っているが、かえって欲しくない。  
ようやくだ。ようやくアズに春が来そうなんだ。  
だから、少しの間とどまってくれ。

いや。俺の予感が告げている。  
オウカはおそらく、アズを幸せにするために呼ばれたのだと。  
神よ。居るなら俺はあんたに感謝したい。まだ、感謝には早い気

もする。

それでも、彼女の出現は、アズを何かしら変えるはずだから。



## 2 こいつは何者だ？（後書き）

少し短めです。15日までは毎日更新したいですね

### 3 こんな筈じゃなかった！

私は目が覚めて、起きあがる。

ここはどこだろう。

そう思いながら、辺りを見回す。

執務室ではない様だ。

広いベッドに天幕が張られている。

それに、いつの間にか着替えさせられていた。

まさかアズがやったのではないだろう。

うん。侍女さん達もいるはずだから、その点の心配はないか。

近くの気配を探るが、どうやら私以外居ない様でほっとする。

「異世界に来て、王子様にあつて、お后様にされて……なんて、王道よねえ。まあ、朝起きたらアズが隣にいる。なーんて事にならなくて良かったけど」

なんて、一人ごちてみる。

自慢ではないが、コレでも彼氏いない歴18年。

キス一つすらしたこと無い。

まあ、私の精神年齢が見た目とはかけ離れておばさんだったって事が原因だろうけど。

鞆の中が某狸ロボットのポケットのような状況だった。

お菓子、薬、包帯、絆創膏、裁縫道具などなど。

通称某ポケット。それほど用意してないと不安になる女だった。

それに、恋愛にかんしても、聞くだけのもので、別にしたいと思っただこともないし、くだらないと思っていた。これは、結婚式が決まっていたからだろうが。

「おはようございます。オウカ様」

天幕の外で鈴の様な声が聞こえた。  
むむう。この声は美人に違いない。

ってか、いつの間に入ってきたんだろう。

天幕が上げられ、朝の光がベッドに差し込んだ。

「えと、おはようございます」

挨拶を返すと、思った通りの美女が私に一礼した。

藍色の長髪を編み込んでおり、少し垂れた瞳は紫色。

おとなしい雰囲気的美女はスタイルが良く、欧米で見かける美女  
くらい胸が豊満だった。

うう。日本人としてはうらやましい限りです。

むしろ抱きつきたいです。

危険な思考を己で遮断しているなんて思っていないのだろう。  
侍女らしい彼女は微笑んだ。

「初めまして。オウカ様の身のお世話をさせて頂くことにな  
ります、キャサラ・ノイズと申します。何なりとお申し付けくださ  
い」

様付けされるのはなんだか恥ずかしい。

此処が日本でないのなら、頭を下げてお礼を言うのもおかしいし、  
様付けを止めさせるのもおかしい。

頭を下げられると下げたくなるのは日本人特有だが。

「よろしく願います。キャサラさん」

にこりと微笑み返してみる。

頭を下げては駄目なのだ。

驚かれる。まあ、異世界トリップの主人公によくあることだが。  
私は、そうしない！  
けど、キャサラに驚かれてしまった。

「そんな、畏れ多い！ 私のことはキャサラとお呼び下さい。オウ  
力様」

「はい。じゃあ、キャサラ。よろしくね」

ありや。ちよつとだけ、失敗しちゃったな。

日本人の癖は一部抜けなかった模様。

こうなるなら、もう少し小説漁っておくんだったなあ。

考えているうちに、キャサラが洗面器とフワフワのタオルを持っ  
てきた。

ああ、洗顔ね。

私は洗顔を終え、キャサラにドレスを着させられる。

そのドレスを見て、破顔してしまうのだが。

「えつと、コレを着るの？」

「お気に召しませんでしたか？」

目の前にあるのは……ああ、言うのも恥ずかしくなるフリルの付  
いた、中世ヨーロッパ貴族が着ていた様なドレスだ。

金と白がベースの生地はさわり心地がよく、袖の中には淡いピン  
クのふわふわ。うわ、高校生卒業すぐの私にはこれぐらいしか言い  
表されません。

とにかく、コルセットが必要な、えつと……そう。まるで、うみ  
この某女主人が着ていた様なドレスに今の様な色合いだ。うん。  
これが一番わかりやすい表現だ！

「これは、私にはちよつと……。もう少しシンプルなのはない？」

私が懇願すると、困り果てたキャサラは奥から白色と桜色がベースの至ってシンプルな、そしておとなしめのドレスを持ってきてくれた。

「これぐらいしかございません」

「そう！ 私、そう言うのが良い！！」

だって、こんな凹凸の激しいドレスは日本人には無理です！

いや、私だってそれなりにあるんだけどね（泣

着替え終わり、薄く化粧がされた後、朝食が準備出来たと告げられる。

「ねえ、此処って、私の部屋だよな？」

「はい。そうでございます」

「……廊下に面している扉は？」

見る限り隣部屋に続く扉、お風呂に続く扉。キャサラが服を持って入っていったので、衣装部屋に行く為の扉。それくらいしか、扉が無い様に見える。

廊下に面しているだろう方向には扉がなかった。

「隣の部屋から廊下へと出られますが、基本的にオウカ様がこの部屋から出られることは禁じられております。ご了承ください」

……何で？

何で、軟禁される必要があるの？

それは、元の世界に還る方法はこの部屋のみってことか。

「何で？」

「分かりませんか？ 此処は蒼の間。2代前の王が妃様を自分の目以外触れられぬ様に作られた部屋でございます。この度妃として迎えられるオウカ様を他の男から見えなくする為に、陛下が用意するようにと。なんて愛情深いことでしょう」

「おい。還ってきて下さい。」

「要は、アズは私をこの部屋から出す気がないと言うことだ。」

「元の世界に戻る救けをするんじゃないのか！」

「……アズは？」

「陛下なら、朝食後に来られるそうです」

「私は頂垂れて先に朝食をとることにした。」

「腹が減っては戦は出来ぬ。だね。本当に。」

「まさかこんな事になるなんて。」

「だれか未来を予知して下さい。」

「これ以上、厄介事にならない為に。」

朝食を済ませて、アズが部屋に入ってくると、素早くキャサラが朝食後の紅茶を出し、アズに言われるまま部屋から出て行った。

二人きりになって私はもちろんふてくされる。

「どういう事よ。アズ」

「何が？」

「私は立ち上がってアズに指さした。」

「小学校の先生。ごめんなさい。人に指ささないって約束を今、破

りました。

「私を元の世界に帰す気あるの？」

「ない」

「なあ……！」

呆れて物も言えない。

そんな私を見て、アズは面白そうに笑った。

「今のところはな。後宮のことも片づいてないし。安全上の為だ。

正面切って後宮の姫が押しかけてきたらどうする。お前は対処出来るのか」

「う……」

言い返せない。悔しい。

さすがにそこまでやれる自信はない。

あくまで、内気な日本人ですから。

「此処はそう言う面でも助かる。ああ、もちろん面会は宰相を通してからだから安心して良い。俺以外にはここに入れる人間も信頼してる人間だけだしな。騎士を付けたなら……」

「今のままで良いです……」

私は諦めて座り直した。

しょぼくれる私を見て、アズは愉快そうだ。

くそう。面白がりやがって。

「我慢してくれ。此処は俺の部屋の隣だから結界も多重に張られてあって安心だしな」

ん？俺の部屋？

「朝食は別だったが、此処は俺の寢室の隣だぞ」

「ええ〜！？」

私は顔を真っ赤にする。

それすら面白がる様に、アズは私の手を取った。

「キャサラは言わなかったか？　ここは2代前の王が寵妃を軟禁していた部屋だ」と

うわ。はつきり言ったよ。この男。

「お前じゃなかったら扉を付けるつもりだったが、ちょうど良かっただろう？」

なんて涼やかな顔で言うんだ。この男は。

背筋に寒気がしたぞ。

私は紅茶を飲みながら、溜息を吐いた。

もしかしたら私、とんでもない男の妃になったんじゃないか？

「綺麗な髪だな」

そう言ってアズは私の髪の毛の編み目に手を通した。

からんっと、飾りが落ちる。

今朝、丁寧に編んでくれた編み込みがほどけていった。

何するんだこの馬鹿！

って、いつもなら怒鳴ったんだけど、言えなかった。

光を浴びるアズが格好良く見えて。

熱を持った瞳から、目を離すことが出来なくて。



何も、言えなかった。

アズはそのまま私の髪を一房持って口づける。

「括るな。そのままにしている」

それは、命令か？つてか、あんたは何処の貴公子だ。否、王様だ  
ったね。

私は目をそらして慌てて飾りを拾う。

くそう。見惚れてしまった。なんて不覚。

まだ、早まった動悸は収まってくれない。

だって、男に免疫なんて無いんだもん！

「あとで贈り物をする。毎日身に付ける」

私が振り向いた時、アズは既に背を向けて歩き出していた。

アズの背中を目で追って、私は息を呑む。

アズが出ていった後も、暫くそのままだった。

アズが触った所の髪を、何度も触って……。

3 こんな筈じゃなかった！（後書き）

純蓄培養乙女。その名はオウカ。

#### 4 腹黒宰相

私は露台に出て外の景色を見ようとした。  
硝子張りの露台に続く扉には鍵がかかっていない。  
外に出ると、驚くべき絶景があった。

「うわぁ……。本当に、異世界に来たんだな」

王城はゲームでもよくある様に、城下町よりも高い位置にあった。  
これは城下町から王城まで歩くのは大変そうだ。

正門とは違う向きにこの部屋はあるらしく、高さ的には昨日落ちたところと一緒に。

3階だと思う。

けれど普通に考えて、3階にしては少し高い。  
それは一つ一つの階の天井がやたらと高いからだろう。

城下町は道が入り組んでいそうで、大きな道がいくつもあるものの、路地裏っぽいところもあった。

屋根は茶色で、思った通り石畳の町並みだ。

外国の写真集をよく買っていた私にとっては、まさに憧れそのものだ。

これが、アズが治める王都。

聞いたところによると、治安は悪いらしいが。

「もう、帰れない？」

実感と共に、寂しさが募る。

帰りたい。でも、こういう物語って、帰れる確率が低い。

二度と家族に会えないのかと思うと、熱いものがこみ上げる。

私は手すりを持つ手に力を込めた。

まずは、此処で生きなければ。

泣いても何もならないと言ったのは自分なのだから。

「おや、泣いておられるのですか」

後ろから声をかけられて、私は慌てて振り返った。

そこには、見たことのない男が立っていた。

此処は美形王国ですか。いや、王道なら有り得る話か。

そう思っくらしい男は美形だった。

年齢は二十歳前半。

紫色の髪に細く蒼い瞳。

手には何冊かの本を持っていて、にこやかな笑みを浮かべている。

その笑みが黒いと思ってしまうのは何故なのだろう。

「誰？」

不躰に問うと、男は腰を折って礼をした。

「申し遅れました。私は宰相を務めております、アグロ・ディカネ

ア・ルドルクと申します。以後、お見知りおきを」

「宰相……」

それは、とてつもなく偉い人なのではないだろうか。

名乗られたら名乗り返さなくてはいけない気がして、慌てて私も

一礼した。

これでも社交界には3年間だけ出ていたので、マナーだけは叩き込まれている。

「私は桜華と言います。アグロ様」

私が慌てて言うと、アグロはおかしい様に笑った。

「そんな堅くならないで下さい。アグロとお呼び下さい。陛下は呼び捨てで臣下に様はおかしいでしょう。気を楽しんで下さい」

ピクリと私の肩が揺れる。

ただならない気配。

それは、私を試しているかの様だ。

試されるのは好きではない。

けれど、相手が宰相なら、これからのつき合いも多いはずだ。

「さて、自己紹介も終わったところで、異世界人とは本当のようですね」

いきなり確信付いた物言いに、私は驚く。

もっと怪しまれると思っていた。

私の反応を見て、面白そうにアグロは笑った。

「貴女の魔力は陛下に匹敵するほどです。陛下が隠そうとするのも頷ける。それに、それだけ膨大な魔力があるのなら、今までこの国に隠れられる訳無いですし、貴女の気配を感じられたのは昨日。仮に貴女が凄腕の魔術師とすると、常に魔力を垂れ流すなんて馬鹿な真似はしないはずでしょうから」

なんか馬鹿発言された気がする。

とりあえず、私が異世界人つてのは認められた訳ね。

「なんで、魔力を垂れ流すのが馬鹿なんですか？」

「そういえば、貴女は魔法を使わない世界に住んでおられたのです」

ね

知らないのも当然だとアグロは頷いた。

「この世界のものは皆、魔力を感じる事が出来ます。そして、この国で一番魔力が強い者が陛下なのですよ」

「だから、王様やってんの？ 世襲制じゃないんだ」

「いいえ。王の子供は必ず強い魔力を持って生まれます。その子供の中で一番魔力の高い者が王になれるのですよ」

「じゃあ、王様よりも魔力の強い人が現れたらどうするの？」

「有り得ません。それほどの魔力を所持しているならすぐ分かりま  
すし、古来からの決まりです」

神様が決めてるって事？

まあ、それで国が維持出来るのなら文句は言わないでおこう。  
力で押さえつけている様で嫌だけど。

「勘違いされると困りますから言いますけど、王はこの国に張られる  
結界を作る者。その力と権力を振りかざして民を押さえつけたの  
は先王であり、陛下は間逆の政治で民からの信頼も厚いですよ」

あの、俺様が？

まあ、後宮を廃止しようとしていたりしている所は良いやつだと思っ  
けど。

「話は戻しますが、もし、貴女が言う様に王と同等の魔力を持つ者  
だったら、どうしますか」

「……私は殺されるの？」

殺すのが一番手っ取り早い方法だと分かっている。

そもそも得体の知れない女を王妃になんて言うのがおかしい。  
アグロは私の予想を反して首を横に振った。

「いいえ。貴女を王妃にすると、陛下はおっしゃったでしょう。それが仮に男なら殺したかも知れませんが……女なら陛下と子をなして頂いて更に魔力の高い子供を作って頂くことに……」

「子供!？」

私はビツクリして後ずさる。

夜の相手はしないって言ったじゃん!

「な、なな何でえ?」

「それが国の為……おや、その様子では、違いましたか。てっきり陛下はそのつもりだと」

本気で不思議そうにアグロは首を傾げた。

いやいやいや。無理です。本当に、無理です。

初めては好きな人としたいんです!

蒼白になった私をよそに、唯一抜け道である扉が勢いよく開かれた。

「アグロ様! 私がない間にオウカ様に近づかないで下さい!」

いくつかの箱を持ったキャサラが急いで箱を机の上に置くと、私の元に駆けつけ、私を抱き締めた。

弾力のある胸が私の顔に押し当てられる。

息が出来ません!

「お可哀想に。オウカ様の顔が真っ青じゃありませんか。余計なことを吹き込んでおられませんか?」

可哀想だと思つなら、離して欲しい。

心配してくれるのは良いが、自分と私の身長を考えて下さい。

「オウカ様は未来の王妃であらせられます。まだ幼い身ながら此処に閉じこめられて……」

「キャサラ。離さないと彼女が苦しそうだ」

アグロの言葉で私が苦しそうなのが分かった様で、慌ててキャサラは身を離れた。

「も、申し訳ありません。オウカ様」

私は急ぎ込みながら息を整える。

むう。まさかアグロに助けられるとは。

それにしても、キャサラの胸の弾力は凄かった。

私もそれぐらいになりたい。

「いいよ。気にしないで。それよりもキャサラ、私はこれでも18歳なんですけど」

「え？」

私の宣言にキャサラは驚いた様だ。

此処でもか。

「アズから聞いてなかったの？」

私が聞くと、キャサラは困った様に頬に手を当てた。

う。一つ一つの動作が綺麗です。



「はい。見た目通りの年齢だとおっしゃいましたので」

アズメ。後で覚悟しとけよ。

どうやら、また13、4くらいに見られていた様だ。

「それよりも、キャサラ。持ってきた箱を彼女に」

それよりも？ こいつ、人が真剣に困っていることをなんだと思  
ってやがる。

キャサラは言われたとおりに持ってきた中の一箱を開けて私に見  
せてきた。

それは銀の鎖で作られたネックレス。

中心には蒼い宝石が埋められ、細やかな細工には目を見張るもの  
があつたが、決して舞踏会に出る様なハデはものではなく、シンプ  
ルなデザイン。

それでふと、朝アズが言っていたことを思い出す。

「こんな高価なもの、いただけません」

毎日付けて欲しいと言われたその品は、この国でも高価に違いな  
い。

とつてい受け取る気にはなれない。

「付けて頂きます。それは魔力制御装置です。職人には、無理を言  
つて普通の装飾に見える様に作って頂きました」

これが制御する為のもの？

信じられないが、彼等が嘘を吐いている様には見えなかった。

「貴女の力は大きすぎる。この部屋は魔力を漏らさない術が施され

ているにもかかわらず、貴女の魔力は微かに漏れています。他のものに襲われる危険もありますので、付けて下さい」

恐る恐る手にとって付けてもらう。

すると躰にある程度負荷がかかった。

まるで何かを持つている様だ。

「あとブレスレットとイヤリングがございます。それを肌身離さず付けて下さい。それでようやく平民と同じくらいの魔力量でしょう」

本当にそうなのかは分からないが、言われるままに付けてゆく。

最後にイヤリングを付けた時には大変な負荷がかかったが、馴れると言われた。

本当に馴れるのかこれは。

散歩さえ出来ないくらい躰がだるいぞ。

腹黒宰相はそんな私を横目に手を振った。

「では、執務がありますので、私はこれで失礼します。ああ、勉強されるなら、キャサラから聞いて下さい。まずは字の読み書きからでしょう。彼女は王都学園の教鞭を執っていたこともあるので、ちよんどういいですし」

一体キャサラは何歳なのだろう。

見た目20歳代なんですけど。

キャサラは恥ずかしそうに微笑んだ。

「失礼します。王妃様」

嫌味かこの野郎。

負荷によって躰が動きづらい私にとって、睨むことしか出来なか

つ  
た。

#### 4 腹黒宰相（後書き）

ちなみに寝る時とお風呂はいる時はネックレスだけとります。  
ネックレスは銀だから錆びやすいんです。

## 5 ペンダントの行方

その日の夜、お風呂に入れてもらう時にようやくネックレスだけ外してもらった。

銀は錆びやすいもんね。

「ネックレスとって大丈夫なの？」

お風呂に入っている途中聞くと、キャサラはニツコリ微笑んだ。

「ネックレスをとれば伯爵と同等……簡単に言えば、普通の騎士と同じくらいの魔力量に感じます」

「……ねえ、ネックレス付けなくても良いんじゃないの？」

私の提案は一蹴される。

「アズ様に聞いて下さい」

幾らなんでも冷たい。

自分で体を洗おうとしたが、洗わせてもらえなかった。

まあ、姫様が自分で体を洗うってどうかと思うけど。

念入りに髪の毛を洗ってもらい、お風呂から出てオイルも塗ってもらった。

なんか、純日本人としては恥ずかしいけど。

昼間アズに言われたことを言うと、キャサラは私の髪を結つのを止めた。

夜着に着替え、夜も深くなってきた、私はベッドに入った。

キャサラは部屋の灯を少しだけ落としてくれて、そのまま部屋から出て行く。

私は一人、広い部屋の中で寝ようと努力した。  
気持ちが高まって眠れない。

「こんな部屋で寝られるほど、神経太くないよ……」

溜息を吐きながら、上半身を起こした。

そこにゆっくりと扉が開く。

「まだ、起きてたのか」

アズだ。

私はバツが悪そうに睨む。

キヤサラに年齢を教えなかったことを許してはいないのだ。

「眠れなくて。こんな広い部屋、初めてだし」

正直に言うと、アズは微笑みながら近づいてきた。

そのまま私の顎を掴んで上を向かせる。

「ふうん。一緒に寝てやるっか」

「夜の相手はしないって約束じゃないの？」

私はアズを一蹴する。

まあ、私の年齢を知る前の話だけど。

アズは面白そうに私の隣に腰を下ろし、強引に腕を引っ張られた。  
驚いて身を堅くするが、私の頭はアズの膝の上に乗せられる。

膝枕状態で、楽しそうにアズは私の髪を触り始めた。

「ちょっと……」

咎めようとは思うが、あまりに楽しそうなので言う気も失せた。飽きもせず何度か髪の毛を梳き、さらさら感を味わっている。まあ、私の唯一の長所は髪が真っ黒でストレートなところだけだ。

「……今日、ネックレスとかありがとう」

言い忘れていた言葉を口にする。

あれらは高かったに違いない。

きつと、民からの税で作ったのだ。

民には感謝しなければ。

もちろん、政略的なことがあっても、気遣ってくれたアズにも。

「欲しい物があつたら、何でも言ってくれ」

「ありがとう」

素直にお礼を言っておこう。

でも、贅沢を言つては駄目だ。

きつと民から徴収した税で作られるのだから。

アズのぬくもりに眠気が増してきて、意識を手放すのにその時間はかからなかった。

ああ。フワフワする。

安心感に包まれて、まるで綿の毛布にくるまっている様だった。

私は暖かい方へと身を寄せる。

すると、包み込んでくれるかの様に暖かくなった。

まるでお日様に包まれているみたいに。

そう言えば、小さい頃よく零にすり寄って一緒に寝たものだ。

「れい」。だいすきい」

弟を思い出して切なくなる。

でも、その暖かさが身に染みてゆく。

大丈夫だと言いたげに。

「零。私は絶対還るからね。忘れないで。忘れちゃいやだよ」

後半は決意と言うよりも願いだっただ。

ずっとそばにいた。

生まれてからずっと隣にいた。

どんな男女でもたどり着けないほど堅い血と言う絆があった。

「頑張るからね」

拳を握る。

頭を撫でられている様な、そんな気がして、ネコの様に頭をすり寄せる。

安心感が欲しかった。

寂しくて、心が冷えてゆくのが分かった。

誰でも良い。

この、暖かさをくれるのなら。

目が覚めると、早朝の様で、少し薄明かりが部屋に差し込んでいた。

天幕で遮られているせいか、ベッドの中はまだ暗い。

私はベッドの感触から、此処が自分の世界ではないことに実感する。



でも、暖かいと思った。

なんか温かいものが隣にあつて、思わず身を寄せる。暖かい何かは、私を抱き寄せた。

柔らかい感触が額に押し当てられ、ようやく意識が覚醒していく。

「朝から大胆だな。抱いて良いのか」

頭上からそんな声が聞こえて、一気に覚醒した。

顎を上げると、そこには美形の顔。

につこりと熱を持った眼で、私を見ていた。

アズ。アズがいる。

そう思った時、私は悲鳴を上げていた。

「うひゃあああああああ！！」

女らしくない変な悲鳴ですいません。

私はアズを突き飛ばして、ベッドの端にまで逃げた。

私の悲鳴を直に聞いたアズは頭をおさえて上半身を起こす。

小説でよくあるよね。王様は裸で寝るって。

例外なく、アズもそうだった。

上半身には鍛えられ、無駄がない胸筋があり、腕もたくましく男らしい。

おそらく相当な訓練を積んでいるに違いない。

恐くてシーツに隠れている下半身を想像したくもない。

何で裸？

私は服を着ている。昨日の寝間着のままだ。それでよし。

てか、誰だ。王様は裸で寝るなんて考えたの。

「凄い悲鳴だな。俺が結界を張っていなければ、外に待機している騎士達に聞こえているぞ」

そう言って、腰を上げようとする。  
慌てて私は手を横に振った。

「待って。まさか、ぜ……全裸じゃないでしょうね」

自分の言っていることが恥ずかしすぎる。  
私の言葉に、アズはにやりと笑った。

「見るか？」

「な、なにを言っておらひえますう？」

思わず変な言葉になったじゃんか！

真っ赤になつて私は手で目に蓋をする。

アズは面白がる様に笑いながら、私に近づいて私の腕を取った。  
……よかった。ちゃんとズボンは着ているのね。

「今日は可愛いな。オウカ」

「どういふ事よ、それ！」

まるでいつも可愛くない様な言い方ではないか。

もつとも、2日前に出会ったばかりなのだが。

むくれる私の顎を掴んで、耳元に顔を寄せてきた。

「言つのを忘れていた。俺の贈り物、似合ってる」

くすぐつたくて、何とも言えない感覚に、私は身を強ばらせる。

礼も言えない私を咎める訳でもなく、アズはベッドから降りた。

呆然と見上げる私の前で、アズはバスローブの様なものを羽織った。

ちょうどその時、部屋の扉がノックされ、キャサラが入ってきた。

「おはようございます。陛下。オウカ様」

見事な流れる様な挨拶の後、キャサラは手際よく天幕を四隅にある柱の留め具に直してゆく。

キャサラ以外に侍女は愚か、騎士さえも入ってこない。

普通はもっと侍女とかいるもんなんじゃないの？

私の不審な眼差しに考えていることを悟ったのか、キャサラが優しく教えてくれた。

「オウカ様の部屋には陛下と私、それからアグロ様しか入室を認められていません。もちろん、私以外の侍女も入室不可能です。それに、陛下は身の回りのことは全てご自分で成されますし」

それじゃあ、キャサラの負担が大きくなるだけでは？

そうは思ったものの、キャサラは私の心配をよそに素早くこなし  
てゆく。

キャサラの言ったとおり、アズは机の上に置かれた服を自分で着  
ていた。

自分のことは自分でしなければ。

アズの姿勢には感心した。

小説で見る様な王様の態度ではないけれど、その気配が。空気が。  
王様と分かるのに十分だった。

「オウカ様。お召し替えを」

キャサラの手には私の服とペンダントがあった。

うう。ペンダントはなあ……。

「アズ。ペンダント付けなくて良い？すっごく躰が重たくなるんだけど」

私が抗議の声を上げると、振り向いたアズは考える様に顎に手をかけた。

「そうか。今まで制御装置を付けたこと無いから、躰にかかる負担も大きいのかも知れないな。まあ、そのくらいなら問題ないだろう。キャサラ。しまっておけ」

「かしこまりました」

キャサラは言われたとおり、ペンダントの入った箱を衣装部屋に持っていった。

「ごめんなさい。国民の皆さん。」

私には大物過ぎました。

心の中で合掌して、私は謝る。

「ブレスレットとペンダントを交互に付ければいいだろう。オウカが気にしなくて良い」

余程困った顔でもしていたのだろうか。

アズがフォローしてくれた。

ほどなくしてキャサラが戻ってきて、私の着付けを手伝ってくれる。

さすがにドレスは一人で着られませんか。

アズはその間キャサラに追い出される様に退出して、化粧もうつすらとだけした後、私の部屋でアズと朝食を取った。

さすがに政務があるらしく、朝食が終わってすぐにアグロが呼びに来たけども。

その後に、キャサラを先生とする授業が始まったのだった。

## 5 ペンダントの行方（後書き）

前回のあとがきから考えついた話題。

気分屋なので一気に話が進んだり、進まなかったり（泣

一万アクセス突破です。

まさかこんな速く突破するとは思ってませんでした。

ご愛読ありがとうございます。

これからもよろしく願います！

## 6 外に出たかったんだもん！

あれから3日が経った。

私は頭を悩ませている。

そして、キャサラは困った顔をしていた。

キャサラの手にあるのは分厚い本。

私の前にあるのはノート。

こつちの世界にもノートなんてあるんだね。

まあ、本があるくらいだから、無かつたら世界中の小説家達が泣いてるね。きつと。

……現実逃避も此処までにしよう。

「うう。覚えるの苦手え」

泣き言を言うのは当たり前だ。

今までもろくに勉強なんてしていなかったのだから、いきなり出来るはずもなく。

文字の方は何とかいける。

英語と同じ、主語、動詞から成り立っており、文字もアルファベツトと同じ数で並び順も似た様なものだった。

英語はそこそこ出来ていたので、覚えるのは速かった。

でも、ある程度であって、応用となると難しい。

「根を詰めなくてもよろしいですよ。本当なら習得に何年もかかる言葉を、たった二日で此処まで出来たのですから。むしろ褒めて良いぐらいです」

キャサラがなだめてくれるが、そうそううまくはいかない。

3日前アズと朝一緒に朝食を取って以来、アズとも会っていない。

夜遅くまで政務をして、朝早く政務を始める。

躰の方は大丈夫なのだろうか。

私が頂垂れていると、これ以上は無理だと判断したのか、キャサラは本を閉じた。

「少し休憩しましょう。お菓子を用意致しますわ」

そう言ってキャサラは出ていく。

私は立ち上がって伸びをした。

まだ3日。でも、3日も経ったのだ。

なにも元の世界に帰れるヒントは見つからない。

私は、帰りたいのに。

私は露台に出て、外を眺めた。

私がいなくても、この世界はきっと変わらない。

なら、なんで私は此处にいるんだろう。

「大体、部屋の中にジツとしているのって、性に合わないんだけど」

走ったりするのが好きだからか、部屋の中で何日も過ごすのは好きではない。

むしろ堂々と剣を触ってみたい。

まあ、恐い半分興味半分って所。

でも、元は異世界から来たとはいえ、この世界のお嬢さんがそんなことをするとは思えない。

間違いなく、変人扱いだ。

だから、この三日間、大人しくしていたのだが。

「外で遊びたい……」

ぼそりと願望。

キヤサラが部屋にいない今、別に普通に言っても誰にも聞こえないのだが。

見下ろすと三階は結構高さがあった、私が降りられる様な高さではない。

落ちたら死ぬわ。絶対。

「おそとであそびたいの？」

ほら、何か幻聴が聞こえてきた。

私の頭はとうとうおかしくなった様だ。

幻聴が聞こえる様になるなんて、余程疲れているのだろうか。

キヤサラが言った様に、根を詰めすぎたのかも知れない。

私が溜息を吐くと、もう一度声が聞こえた。

「おそとであそびたい？」

「うん、遊びたいんだけど……って、へ？」

服が引つ張られている様な気がして下を向くと、小さい男の子が私の服を引つ張っていた。

だいたい6歳くらいだろうか。

アズよりも薄めの茶髪に、くりくりとした大きい藍色の瞳。

色合的にはアズを彷彿とさせるが、幼げでフワフワ感漂うその姿は幼児独特のものだ。

一体、何処の子ですか？

「どちら様？」

私が聞くと、男の子は私にぴよこんと頭を下げた。

か、可愛い。鼻血がでそうなくらい可愛い。

私に変態になるから、これ以上は考えないでおこう。



「のいる・ばにしえいら・ぐるのーる・れふいのーらです」

レフィノーラ？

ってことは、アズの弟ってことか。

凄い年子だな。

「ノイル君か。私は桜華。宜しくね」

につこりと微笑んでみると、まぶしいくらいの笑顔でノイル君は返してくれた。

私の手をしっかりと握り……ああ、このふわふわ。堪んない。

変態思考になりかけている私をよそに、ノイル君は私の手を引っ張った。

「あのね、いっしょにおそといこう」

ノイル君の提案は嬉しいが、不味いのでは？

私は眉を寄せて、ノイル君と同じ目線になる様にかがんだ。

「でも、アズの許可がないと……」

「だいじょうぶ。ぼくがいるもん」

ノイル君は手をばたつかせて催促してくる。

うう。逆らえません。

ノイル君はアズの弟。なら、王弟と言うことになる。

確かに、それならアズ無しでも怒られることは……大丈夫か？

「そつ言つなら……」

「やったあー！」

ノイル君は嬉しそうに笑顔を見せて、空中に円を描いた。すると、その円に魔法陣が出現する。魔法だあ。魔法使うところ、初めて見るなあ。そう思っただけで眺めていると、ふわりと躰が浮いた。

「え、ひゃあ！」

私とノイル君は空中を浮き、露台から離れてゆく。

ノイル君は楽しそうに手を操作している。

なるほど。この魔法は手動なのか。

手の振り方で進む方向が変わる訳ね。

私とノイル君はそのまま綺麗に一階の庭に着地した。

3階で何かが割れる音と悲鳴が聞こえたのは聞かなかったことにしよう。

キャサラ。ごめんなさい。

「オウカ。こつち！」

ノイル君は私の手を引っ張って、歩を進めていく。

明らか、こんな庭を歩いてたら分かるんじゃないか……。

ノイル君は私を連れて茂みの中に入ってゆく。

すると、どんどん木が多くなっていった。

私からしたら、何処歩いているのか分かんない。

森みたいに木が多くなると、さすがに兵士に見つかることはないと思っただけ。

少し歩くと、木々を抜け、美しい庭の様な所に付いた。

美しい花々が植えられ、広い空き地の様な地面は芝生。

植えられている木は腰辺りまでで、かくれんぼには最適だろう。

噴水も備え付けられ、ブランコや白く人が3、4人入れる様な小

さなガゼボがあつた。

一 際目を惹いたのは、庭の中央にある女神像。ベールを付け、少し俯いた女神は神様に祈る様に両手を君であり、その瞳は閉じられていた。

女神像の周りには多くの花が植えられている。思わず吸い寄せられる様に目の前まで歩いた。何かを祈る女神像。

確か、こういう庭にお墓を作るってこともあるらしいけど、間違はなくこれは、女神像だ。

「なんで、なっているの？」

ノイル君に言われて、私は泣いていることに気付いた。分からない。

なんで、こんなにも苦しいのかなんて。逢いたかった。ずっと、逢いたかった。まるで自分の半身と再会した様な感覚。

懐かしくて、愛おしい。私は手で顔を覆った。

この感情をなんて表現すればいいのだろう。言葉では言い尽くせない何とも言えない感情。私は、頭に浮かんだ名を口にしようとした。

「オウカ。ノイル。こんな所でなにをしている」

急に現れた気配に、何を言おうとしたのか忘れてしまった。顔を上げると、アズが私のすぐ近くに立っていたのだ。

「オウカ。何で泣いている？」

抱き寄せられ、その暖かさにほっとする。

私は何も言わず、アズの胸にしがみついて泣いた。

アズは困った様に私の頭を撫でて、私が落ち着くまで側にいられた。

一体どれぐらい泣いたのだろう。

ノイル君の姿がないことに気付く。

「ノイル君は？」

「乳母につれられて先に帰った。もう、大丈夫か」

残った涙を、アズはそっと拭ってくれた。

何で泣いたのかも分からない手前、がっしりとアズの胸にしがみついていたことを思い出す。

私は慌てて離れようとしたが、アズは私の腕を掴んで、抱き締め直した。

ふわりと良い匂いが鼻腔をくすぐる。

「離れてくれるな」と、小さく聞こえたので、私は大人しくアズの腕の中に収まった。

「この女神像は、アマリリスと呼ばれる魔力マキカの源を司る女神だ。同時に、この世界に生きるもの全ての魔力を支配する女神でもある」

やっぱり女神像だった。

私はもう一度女神像を見るが、先程の様な感情は生まれない。

「どうして此処に？」

「この庭は、アマリリスが住む狭間の世界を想像して作られた庭だからだ。だから、アマリリスを此処に奉っている。まあ、皆忙しくてあまり近づかないがな」

アズは苦笑し、更に私を抱き寄せた。  
優しい手には安堵感が生まれ、私は瞼を閉じる。  
アズの手は私の髪を撫でた。

「中に入ろう。話はそれからだ」  
「……勝手に出てきて、ごめん」

私が謝ると、アズは私の手の甲に口づけた。

「次からは俺と一緒になら文句はない。此処は紹介しようと思っていたしな。ノイルに先を越されたのは、悔しいが」

まるで子供の様な言い分に、私は笑ったのだった。

## 6 外に出たかったんだもん！（後書き）

ちよこつとシリアス続きます。

速くコメディ書きたいのに、主要人物の登場をアズが邪魔する！

## 7 さよならだよ。アズ。

あれからよくノイル君がたずねてきてくれる様になった。

アズが嫌そうにするが、何度追いついても露台から侵入することも多いので、あまり効果はない。

構って欲しいからからも知れない。

周りは大人だらけで、きつと勉強ばかりを強要されているのだから。

何も知らない私に、庭に咲いていた花を持ってきてくれる。好かれている自信はある。

あまりに可愛い為、私が邪険に扱わないことも知っている。かといって、私の勉強を邪魔しようとはしない。

よく周りを見る、頭の聡い子だ。

けれど、ノイル君と出会って4日目。

異世界に来て一週間くらい。

相変わらずアズと逢えない日々が続いていた矢先。

ノイル君が、爆弾発言をした。

「オウカ。ぼくのおよめさんになってください！」

ノイルの言葉に、私は思わずもらった花を落としてしまった。

今、この子なんて言った？

嫁、嫁ですか。なんじゃそれ。

第一、私は既に人妻(?)ですよ。

無理に決まっているじゃないですか。

「オウカは、にいさまのこと、すきじゃないんでしょ？ なら、ぼくとけっこんしよう」

マセガキ。そんな言葉が脳裏に浮かぶ。  
しかし、それを口に出すほど、私はパニックになっている訳ではない。

私は困った様に頬に手をついて屈んだ。

「ノイル君。まだ成人してないでしょう。無理なんじゃないかな」

そう言う訳でもないけど。

諦めさせるにはぴったりの言葉だ。

確かに、アズのことには好きではない。

それは、出会って日が浅いこともある。

ドキドキしたり好きになる要素はあっても、それが本当に好きなのかも分からないし、唯一よく会ったのがアズと言うだけだ。

ノイル君は頬を膨らませて手をばたつかせる。

「だから、ぼくがせいじんするまで、まって。にいさまのものにならないで」

ノイル君が成人する迄って、12年後？

うわあ。私、30歳になってますよ。

かなりのおばさんだ。

私は想像したくなくて頭を振った。

そんな私の背後に誰かが立った様に、私に影が差す。

「ノイル。何口説いてる」

アズの声だ。

心なしか、怒っている様に感じる。

今は政務の時間じゃないのだからか。

不思議になって顔を上げると、腰を攫われた。



抱き上げられて、目の前の景色が一変する。

連れて行かれたのは、前にも来たことのあるアマリリス像のある庭だった。

アズはガゼボにある椅子に私を降ろすと、自分も気怠げに近くの椅子に腰を下ろした。

「まったく。俺が側にいないのを良いことに口説きやがって」

余裕のないアズを見ていて面白くて、思わず笑ってしまった。笑ってしまうと止められなくて、アズは顔を顰めた。

「笑いすぎだ」

「だって、ヤキモチ妬きすぎなんだもの」

小さな弟にヤキモチを妬くアズは見ていて面白かった。子供の可愛い言葉なのに。

私が、ノイルに本気になるなど有り得ない。

でも、ノイルと知り合って、少しずつ周りが見える様になってきた。

「私、色んな所に行って、色んな人に出会って。色んな話をしたいな」

そうでなければ、何も前には進めないと思うし。

私の提案に、アズは眉を顰めた。

「確かに、後宮もあらかた整理は付いた。でもな、お前は王妃以外にも利用価値があるし、まだ諦めの付かない妃候補がいるんだ。此処でも安全とは言えない」

アズが言いたいのは、魔力のことだろう。  
魔力の根付く世界。

それが何を意味するのかまだ分からないけれど。  
今の私には、自由は存在しない。

「お前の存在は周囲に隠している。表に立てば、元の世界に帰るところか、闇に引き込まれるぞ」

「闇？」

アズの言葉は揶揄だった。

けれども、私には何を言っているのか分からない。

一国の王が、何を恐れる。

「後宮の闇だ。人の闇ほど、欲深く、穢れているものなど無い。此処はよく滲み出る」

王であるが故に、引き込まれる。

王であるが故に、矢面に立たなくてはならない。

寂しくて冷たい王宮。

美しい姫君達が集い、王に求婚し、行われるドロドロの女の戦い。  
小説は面白くて楽しくて、何度も読んだけれど。

小説の中は面白そうに書かれていても、現実はきつと厳しいのだ。  
私は立ち上がり、アズの手を握った。

「無責任なことを言っただけ。心配してくれて、ありがとう」

「心配なんて……」

「ううん。アズが王様で良かった。前の王様は悪いことばかりしていたって、教えてもらったけど、アズのおかげで国の内情が改善されてるって知ったよ。毎日政務に追われて、夜も頑張ってた。だから、この国は良くなるの。アズのしたことが、皆喜ぶ結果になって

る」

「そんなの、王として当たり前だ」

「でも、その当たり前が出来なかった王様もいる。アズは優しいんだよ。目の前の不審人物を助けるくらいに」

「オウカ」

アズは咎める様に眉を顰めた。

私の言いたいことを理解したのだろう。

18歳の小娘が生きてられるのは、アズが優しいから。

この一週間でよく分かった。

私は真っ直ぐにアズを見つめた。

私からそらしはしない。

目の前にいる人は、こんなにも立派なのだから。

「私は、本当は異世界人じゃないのかも知れない。そんな私を王妃にして、本当に良いの？ 殺さなくて、良いの？」

「オウカ！」

アズは怒鳴って立ち上がる。

私よりも身長の高いアズは恐怖を与えるに十分な力を持っていた。

私は怯まない。

小説の中でもよくある。

元の世界には帰れない。私もそうなのかも知れない。

でも、このまま此処にいたら、その手がかりも一生つかめない。

王妃になるとしたら、本当に帰れないと分かってからだ。

アズの腕の中に甘え続けていたら、きつと離れられなくなる。

元の世界に帰れるとしても、帰りたくなくなってしまふ。

これはこの一週間過ごしていて、思ったことだ。

これ以上情の移る前に、アズの側から離れなければいけない。

優しいアズとノイルの側から。

世話をしてくれるキャサラの前から。

「私を、解放して。文字も日常生活には支障ないくらい上達したってキャサラも言ってた。歴史も、文化も寝る間を惜しんで勉強したわ。アズは十分に約束を果たしてくれた。そして、私もアズの言うとおり、後宮を片づける材料になった。一時的だったけど、王妃として此処にいた。契約は十分果たしたわ。王様って、本当は政略結婚をしなければならいんでしょう。なら、私は邪魔になるだけじゃない。いない方が、これから楽になるはずだよ」

早口にそう言った。

段々恐くなって俯いてしまう。

勝手な女だと思ってくれた方が、離れやすい。

自己中で、そんな女には見えなかったと言われればいい。

そうしたら、此処から素直に出て行ける。

私の肩に、アズの手が乗せられた。

思わず肩が震える。

「お前の言う通りだな」

そんな声が聞こえて、心が痛んだ。

離れようとした私を、その手が引き止める。

「オウカ。俺を見る」

出来ない。

そう言いたかった。

けれども震えて言うことも出来ない。

私は堅く目をつぶった。

「オウカ」

アズの催促を私は無視して俯いた。

速く離して。

速く解放して。

これから一人で生きていくのだから。

この一週間、そのために頑張ったのだから。

「俺を、見る」

顎を掴んで上を向かせられる。

以前なら、優しい顔がそこにはあった。

優しく笑ってる顔があった。

「離れてくれるな。此処にいてくれ」

優しく、俺様で。

与えるものは、しっかりと与えてくれた。

契約を、守ってくれて。

初めてあった時は嫌な奴だと心の何処かで思っていたけど。

始めから、此処から去ることを決めていたのに。

アズも、勘付いていると思っていた。

そんな顔をして欲しくなかった。

「止めて。始めから決めていたの。引き止めないで」

悲しい顔。

私が、彼にこんな顔をさせてしまった。

私は顔を歪ませる。

速く逃げないと。

速く離れないと、離れなくなる。

捕まる前に、逃げないといけない。

なのに、躰は動いてくれない。

「後宮内なら、自由に歩き回って良い。だから、俺の側にいてくれ。オウカ」

アズはそう言って、私の首筋に顔を埋めた。

私よりも大きな人なのに、その肩は震えていて。

まるで、小さな子供みたいに。

私は、アズを抱き寄せることしかできなかった。

7 さよならだよ。アズ。(後書き)

シリアス風味。

そしてまんまと王宮内を歩くことをGET出来た桜華。

次回からコメディ書きたい。

書きたくてウズウズしてます。

## 8 案外ちよろいわ(前書き)

ちよつと短いです



## 8 案外ちよるいわ

あんな弱りきったアズをなだめた次の日。

授業も終わってから、私は王宮内を歩くことにした。

目立たないようにしたくて、淡い色のベールをつけて黒髪を隠し、後ろにキャサラを連れている。

絶対条件として、キャサラを伴うこと。

元々キャサラは王妃付きになる予定だったらしく、腕が立つそう  
だ。

あんな綺麗なのに、秀才で強いなんて反則じゃないの？

今日、ノイル君は宿題を多く出されて、こっちに来られない様だ。  
久々にキャサラと二人きりなので、気楽と言えば、気楽なのだが。

「オウカ様。どちらに行かれますか？」

「とりあえず、アマリリスの庭に行きたいな」

キャサラは私の要望通りに歩き出す。

一階まで降りたところで、私は改めて庭を見て驚く。

本当にテレビや雑誌で見る様なヨーロッパ風の庭があった。

アマリリスの庭はひっそりと作られた優しげな雰囲気だったけれど、こちらの庭は見ていて清々しいほど精練されていた。

「庭の手入れ、大変じゃないの？」

「それが彼等の仕事です。一日中土をいじっているのが好きな人ばかりなのですから」

好きななら別にいいけれど、此処までの庭を作り上げる庭師は凄  
いと思う。

私の部屋がある階は王の私室がある為にあまり人通りは無かった

が、一階は違った。

思ったよりも多くの人間が行き交っていた。

見回りで歩いている兵士やすれ違う侍女達。

中には、大きな荷物を持って歩いている者もいた。

私の姿をみると、私の身分からか軽く頭を下げてくる。

それに頭を下げ返してはならないと何度も心の中で呟きながら、

笑みを返した。

私の髪を隠していると言っても、おしゃれの範囲内で、黒い髪はごまかせない。

キヤサラがいなければ、間違はなく不審人物に思われるに違いない。

すれ違う人々。背中に刺さる興味視線。

それから、見たこともない異質の人間を見る様な恐怖の視線。

私を見る周りの視線が痛いほどよく分かった。

「あら、貴女誰？」

前方から数人の侍女を連れた美女がこちらに歩いてきた。

豊満な胸に化粧のきつい顔。香水の匂いが嫌にでも鼻につく。

確かに、ボンキュッボンって感じだけど。

年齢は二十歳前半だが、実際は後半だとみた！

もしかして、これが後宮に残っている姫君かな。

「アズロウ陛下の王妃、オウカ様であらせられます」

キヤサラが私の変わりに挨拶してくれると、姫様は私を見て鼻で笑った。

「ああ、あの堅物陛下をまんまと手に入れた浅ましい女ね」

「レティア様！」

あ、レティアっていうのね。  
いかにも小説で出てくる意地悪なお姫さまって感じ。レティアを目の前にした私はもつと酷い罵倒文句が来ると思っていたので、案内小説のままみたいな言葉に拍子抜けしてしまう。  
私は右手で裾をつまみ、一礼した。

「初めまして。レティア様。桜華と申します」

私の気にもした風でもない姿勢に、レティアは啞然としていた。どうせ、私のことを気弱な市井の娘だとも思っていたのだろう。黒い髪と瞳。それから私の幼げな印象がそう見えるのは仕方のないことだ。

まあ、日本人なら普通だけれど。

レティアの背後に控える侍女達が、鋭い目付きをしてくる。しつめのなっていない侍女だな。

小説のお姫さま達の侍女の方が、分かりにくい様にねちねち仕掛けてたぞ。

「そのベールを取りなさい。相手に失礼でしょう」

「レティア様、貴女は……」

「お黙り」

止めようとしたキャサラに一喝。

本場の姫様は迫力が違うな。

「一介の侍女が何のつもり？ 私を誰だと思っているの」  
「失礼を承知で申し上げますが、オウカ様は王妃となられる身。いづ如何なる事であろうと、レティア様がオウカ様にご命令される様なことがあってはなりません」

レティアも強いけど、キャサラも強い。

てか、見てるこっちは冷や冷やものだよお！

笑顔を保つのが精一杯だもん。

頼むから、穏便に済ましてくれないかな。

いや、もし私がキャサラの立場だったら、一方的に畳みかけて完膚無きまでにぶちのめしてるだろう。

絶対そうだ。

けど、もうそろそろ止めないと、ヤバイと思う。

主に、黙っている私が。

レティアは羞恥に顔を真っ赤に染めた。

「こちらが下手に出ていれば付け上がりおつて、お前など……」

「レティア様、私の侍女が失礼を申しました」

レティアの言葉を遮って、私は一步前に出た。

私はベールに手をかける。

「……これでよろしいでしょうか」

私は真っ直ぐレティアを見つめた。

ベールは取られ、結うなど言われて束ねてもいない黒髪は風になびいて揺れる。

咎める様なキャサラの視線を、私は気配だけで制した。

だって、ずるいではないか。

キャサラだけが闘うなんて。

こんな、面白い話。

たかがこの程度の頭しか持っていないのなら、私だけでもどうにか出来る。

思ったよりもちよろいな。

レティアは私を見たまま固まった。

その後ろにいる侍女までも。

そんなにこの髪と目の色がおかしいのだろうか。

たしかに、黒と言えば闇とか悪役っぽいイメージがあるが、何秒も動かなるなるくらい怖い？

この国にいる間、染めた方が良いのかも知れない。

私が考えていると、レティアの顔は更に赤くなり、口をぱくぱくと魚の様にしていた。

とうとう壊れたか？

「それでは、失礼します」

さつさと退出しようとして、背を向けると、ようやく我に返ったのか、私を呼び止める。

さつさと帰らせてくれ。

「あ、明日お茶会を開くわ。来なさい。絶対よ！」

頬赤らめて言う彼女。

一体どうしたのだろう？

「ええ。分かりました。病気になる限りは」

それだけを言って立ち去ることにした。

アマリリスの庭に行く気も失せたので、自室に戻ることにする。レティアが見えなくなっただとところで、私はベールを被った。少し驚き気味にキャサラが後を付いてくる。

「まさか、あのようなことになるとは思いませんでした」

「そつだね。お茶会なんて……」  
「いえ、そちらではありません」

キャサラの言っていることが分からなくて、私は首を傾げる。

「とにかく、今日のことは陛下に報告させて頂きます」

「いいよ。あれぐらいなら、対処出来そう」

「レティア様はオウカ様にとって驚異にならないと分かりましたが、陛下にとって彼女は驚異ですから」

「なんで?」

私の問いに、キャサラは溜息を吐いた。

「ろくな事ではないらしい。」

「まさか、言い寄っているとか?」

「それなら、ありえそうだけど。」

「それとも、もしかしてレティアがとんでもない趣味を持っているとか?」

「小説ならおいしいんだけど。」

「レティア様と陛下は昔からライバルの様で。陛下の好きになったものはレティア様が好きになったり、レティア様が好きになったものを陛下が好きになったり……」

「要は、似たもの同士って訳か」

「そうです」

「おそらくキャサラはその側にいたのだろう。」

「もう一度、キャサラは項垂れて溜息を吐いたのだった。」

「おつかれ。キャサラ。」



## 9 お茶会を始めましょう

「ねえ、ねえ。どれが良い？」

私はご機嫌だった。

三種類の服を選び、並べて楽しく見比べる。

後宮の闇がどうのこうの。

そんなシリアスな話を二日前にしたとは思えない振る舞い。

だって、仕方ないでしょうが。

結構面倒だとか、対処出来なかったらどうしようとか、そう思っていたのに。

相手がレティスだと思つと、あまり警戒心が無くなってしまつ。

つてか、一度で良いから、小説に出てくる様な悪役の姫様とお茶をしたいって思つてたんだよね。

怖いもの見たさつて言うか。

レティス相手なら、後で何とでも繕えそうだし。

「……本当に、行かれるのですか」

「もちろん。あ、レティス様の今日の服つて何色だと思つ？」

「おそらくは青色だと思いますわ。あの方は寒色系を好まれますから」

「うーん。なら、暖色系にしよう。なら、これかな」

手に取つたのは前に着たことのある桜色のドレスだった。

私はあまり贅沢を望まない為、必要最低限の服以外は売つてそのお金を孤児院に回す様に頼んだ。

宝石も身につけること無いから、同じようにした。

だから私の服と言えば、シンプルな感じが10着あるかないかだ。それ以上増えたら、着こなせない自信がある。



もつとも、それがステータスだと言われることもあるが。  
気にしない事にしよう。うん。  
言っつて、仮の王妃だしね。

「……オウカ様がそうおっしゃるのなら、仕方ありませんね」

キャサラは溜息を吐きながら、私の支度を手伝ってくれた。  
ん。どもども。

ドレスを着て、今日は髪を結い上げる。

魔力抑制のついた銀のペンダントを付け、すぐさまブレスレット  
を取った。

これで少しは華やかに見えるだろう。

私はキャサラに薄く化粧を施してもらってから、等身大の鏡で確  
認した。

「アマリスの庭でお茶会だったよね」

「はい。そうです」

「私以外には来る予定の人はいる？」

何でもこう細かくキャサラに聞くのかというと、お茶会などは招待  
されていなければ同席することは失礼に当たる。

また、主催者と服の色がかぶっても駄目。

これは……まあ、私のいた世界では、同じ服を着ているのと同じ  
事になる。

侍女はこれらを事前に把握しなければならなくて、以前聞いた  
から。

そのために情報交換をするらしい。

キャサラがお菓子の種類まで把握していたのはビックリだが。

「ブルムンク伯爵の次女、カーネリア様が同席されます。服の色は

黄色ですね。現在、この後宮に残っておられるのはこのお二人だけなので、他にはいません」

「うん。そつか。アズに今日のことは伝えてるの？」

「……口止めたのはオウカ様だと思いますが」

ジロリと睨まれる。

申し訳ない。忘れてた。

私は苦笑しながら、時計を見る。

「ちょうど良い時間だね。行こう」

「はい」

アマリリスの庭は、やっぱり物静かで綺麗なところだった。

先に待っていたレティアは私の顔を見て顔を綻ばせ、立ち上がる。

うわあ。美人が笑うと絵になるなあ。

うん。嫌われてはない様だ。

ってか、この表情は、昨日と真逆な感じがするけど。

私は数歩間を開けて一礼した。

「お招きありがとうございます。レティア様」

「来てくれて嬉しいわ。私のことはどうぞレティアと呼んで。その代わり、オウカと呼んでもよろしい？ もちろん、敬語なんて使わないで」

「では、そうさせてもらいます。……時間はあつてたかな？」  
「もちろんよ。座ってカーネリアを待ちましょう」

レティアの顔が赤い。

熱があるのだろうか。

もし風邪だと恐いな。

そう思つてじつと見てみると、レティアは更に顔を赤くし、頬に手を添えた。

「そんなに見られると、照れるわ」

何処ぞの乙女じゃ。あんたは。

心の中でツッコミながら座る。

とにかく始めは敵意があつたが、今日に至つてはむしろ歓迎されてる。

もしかして、お菓子に毒を入れているとか？

此処で毒殺？

うわ。そのこと考えてなかつた。

殺られる前に殺つてしまった方が良いのだろうか。

キヤサラが不審がつてもいないので、大丈夫だとは思つが。

そんなことを考えていると、一人の娘があわただしく走ってきた。

「あわわ、ごめんなさい。レティア」

「いいのよ。カーネリア。いつものことじゃない」

カーネリアと呼ばれた女の子は、私と同じくらいの年齢だった。

栗毛の長髪を三つ編みにして、丸い眼鏡をかけている。

瞳は綺麗な緑色。

手には分厚い本が何冊もあり、まるで、図書委員みたい。

おとなしめの女の子だったんだね。

もつと女王様を思い浮かべていた私は、半分がっかりして半分ほつとした。

カーネリアは私を見ると、慌てて頭を下げた。

「オウカ様。カーネリア・コステイ・ブルムンクと申します。カーネリアとお呼び下さい」

カーネリアの挨拶に、私も席を立つ。

「オウカです。よろしく願います」

「オウカ。カーネリアに敬語は不要よ。カーネリアの喋り方は元からこうだから、気にしないであげて。自己紹介も終わったところで、お茶会を始めましょう」

三人は席に座り、話を始めた。

このメンバーでは、小説みたいなドロドロした話はなさそうだな。でも、普通はいがみ合うもんじゃないの？

私の疑問に応えたのは、レティアだった。

「私は隣国・カストロの第2王女ですけど、私が此処にいるのは婚禮目的ではないわ。打倒・陛下の為に此処にいるのよ！」

拳を振るって力説するレティア。

それを見ながら、カーネリアは微笑んだ。

「陛下とレティアは幼なじみなんです。国同士では婚禮目的でしたが、本人達は仲が悪くて。何でも、幼い時の決着を付けたいとか」「そうよ。舞踏会に出た日に、アズが私のことを『ブス』だと言ったことは今でも忘れないわ」

「そりゃあ、お気の毒に」

幼少の頃に付いた傷はなかなか癒えない物だ。  
王女なのなら、プライドがズタズタにされたのだろう。  
自分のみに置き換えれば、気の毒にしかない。

「私は生まれてこの方、研究が大好きで。父からの婚約話に嫌々していたら、こんな事に。陛下は私に興味がないようですし、帰っても違う貴族に嫁がされるだけですから、此処で自分の好きにさせて頂いています」

カーネリアの言い分には納得するものはある。  
雰囲気そんな感じた。

でもね。二人とも、花の乙女の言葉ではありません。  
結婚願望すらないんじゃない？

己の道に行く二人に、私は内心溜息を吐いた。  
これじゃあ、ドロドロした話にはならないわ。  
気落ちしているところへ、レティアはにこにここと声をかけてきた。

「私、始めオウカを見た時、嫌な言葉を言ったでしょう。ごめんなさいね」

「うっん。正しい反応だと思ったんだけど」

レティアは目を細め、私をじっくり観察した。

なんか、居心地が一瞬悪くなったが、レティアの笑顔で忘れてしまっ

「これでも幼なじみだから、嫌な女が王妃に付くなら追い払おうと思っていたの。でも、侍女を守る姿勢や潔さには嫌味のつけようがないもの。それに、雰囲気からして、大丈夫だと思っただわ」

なにやら試されていた様だ。

幼なじみ思いだと思う。

良い友達になれそうね。と、カーネリアが付け加えた。  
私の世界には友達なんていなかった。

皆、私のことを知ると遠ざかっていった。

だから、ほんの少し嬉しくて、思わず笑みを零す。

「それで、陛下とは何処まで進んだの？」

「へ？」

私は思いがけない言葉に、変な返事をしてしまう。  
それにレティアがもう一度聞いてきた。

「だから、陛下とは何処まで？ まさか、同じベッドで寝ていない  
なんて言うんじゃないでしょうね」

「私も聞きたいです」

カーネリアも喜々として聞いてくる。  
ちよつと待て。

何処にも進んでませんよ。

むしろ此処から出ていこうとさえ思っていますよ？

「キスはしたでしょう？」

「どうですか」

聞くな！

キャサラも笑ってないで助けてよ。

まさか何処にも進んでないし、一緒に寝てもないなんていえない。  
私は二人からの質問にうるたえることしか出来なかったのだった。



## 9 お茶会を始めましょう(後書き)

一万アクセスありがとうございます！



10 皆幸せにならなきゃ！

疲れた。

お茶会が終わってぐったりとしながら、私は部屋へ帰ろうとしていた。

歩きたびにすれ違う人が振り返るのには馴れてきている。

ふっ。人の順応能力って凄いな。

「女の子って、凄いねえ」

「オウカ様も女性であると思われませんが」

キャサラの鋭いツッコミ。

何か、色々根に持たれ始めている気がする。

王妃らしさを求められないのは嬉しいが、何かキャサラはさっぱり気がするんだよね。

一応気を付けよう。

「オウカ様。こんな所でどうされましたか」

現れたのはアグロだ。

なんか、久し振りなきもするけど。

その隣にはレキがいる。

あれ、今日はアズと一緒にいないんだ。

何か二人仲良いから、ワンセットなイメージが。

はっ！もしかして、毎晩来ないのも、レキと二人で？

いやいや。仮にも夫（？）なのだから、信頼してあげないと！

それならそれで、面白い展開ではあるけど。

いつまでも返事をしない私に、アグロは首を傾げた。

「どうされましたか」

「ううん。ちょっと考え事。それよりも、アズは？」

私が聞くと、アグロは穏やかな笑みを漏らした。

「陛下なら、執務室です。もうすぐ後宮の改築が行われるので、準備に忙しいのですよ」

「改築？」

そんな話、聞いてないが。

アグロは微笑んだまま、説明してくれた。

「オウカ様のおかげで、後宮は一部を除いて片付きました。後宮を改装して、兵士や騎士。それから下働きの者が住める様にするのです。来月にはオウカ様には住まいを王宮に移って頂きますので、そのおつもりで」

「後宮を無くすって事？」

「そう言うことです」

「レティアやカーネリアはどうなるの？」

後宮が無くなるのなら、二人の居場所はなくなる。

とくにレティアは王女だという。

国に戻ったとしても、居場所があるとは思えない。

それに、無理矢理嫁がされるカーネリアも可哀想だ。

「それぞれ、あるべき場所に帰って頂きます」

「……それって、実家に返すって事？」

「おや、お二人にお会いになりましたか」

意外とでも言いたげに、アグロは片眉を上げた。

否定の言葉がないので、その通りなのだろう。

私には何も出来ない。

でも、考えることなら出来る。

「その事、私に考えさせてくれない？」

アグロの糸目が少しだけ開かれ、レキは驚きの声を上げる。

相変わらず、人を見透かす様な視線は気にくわない。

「オウカ。一体どうするんだ」

レキの質問に、私は口許をつり上げた。

「まずはこの国の法が分かんないから、二日でマスターしてやるわ。レティアはともかく、カーネリアは何かの研究をしている様だし、その研究がこの国の利益になるなら、取り入れられる。無理矢理帰らされて結婚しなくても良くなる。レティアは本人と相談しないと分からないけど」

「もし、利用されたらどうしますか」

人の心は分からない。

でも、私を認めてくれたレティアのことをよく思い出した。

同馴染みを倒したくて、見返したくてこの国に来たレティア。

王女なら、王女なりの戦い方がある。

それに、私は何処まででも甘いのだ。

それは諸刃の剣だけれど、他人を信じられる長所となる。

「されないわ。絶対に」

溜息を吐く訳でもなく、アグロは感嘆の息を漏らした。

そこまで信じられる要素はない。  
でも、彼女たちと過ごした今日という時間は、確実に信頼するに値した。

「彼女たちはこの国にとって有意義な事ですか」  
「そうなるかも、知れないわ」

私はアグロを睨んだ。

ただのハツタリになるかも知れない。

でもね。経済や政治の事なんて分からなくても、突破口なんて幾らでもあるの。

私は、本だけの中なら、沢山見てきた。

不敵に笑って見せる。

「一週間。私に時間を頂戴。その間に解決してみせるわ」

レキが「つええ」と、呟いていたのは、聞かなかったことにする。

その夜。

私は月明かりの下で本を読んでいた。

星と月が明るく、本を読むのに支障がない。

露台に椅子を持っていつて、一人で本を読んでいた。

「何を読んでいる？」

後ろから聞こえた声に、私は身を竦ませて顔を上げる。

そこには、アズがいた。

「……この国の条例」

完結に応える。

あまりに乙女らしくないもののだが、アズは突っ込まない。

アズは瞳を細めて、私の頬に触れた。

アズを見てしまえば、前に見た弱り切った顔を思い出す。

私は本を閉じて、立ち上がった。

今日はこれ以上無理だと判断した。

あまりやりすぎるのも体に良くないし。

「仕事は大丈夫？」

「今日は早く終わった。それに、面白いことも聞いたしな」

面白いとは、アグロとの約束のことだろう。

たしかに、アズの耳に入れなければいけないことではある。

知っただけでもおかしくはない。

私は眉を八の字にして、アズを見上げた。

「やっぱり、大人しくしていた方がいい？」

「言っても聞かないだろう。魔法を知らない分、下手なことをして  
くれないで済むからいい」

なんか、頑固者だと言われた様で、少し腹が立つ。

でも、前科があるので何も言えない。  
勉強の中に魔法が含まれていないのは、私が逃げたり攻撃したりするのを防ぐ為だというのは、薄々気付いていた。  
魔力が強い（らしい）ので、もし使えたら、アズ以外は止められなくなるだろう。

「私、頑張るよ」

私がそう言うと、アズは微笑みながら、私の額にキスをしてきた。慌てて身を引こうとすると、腰に手が回され、逃げられない様になる。

耳元に口を近づけられて、一層躰を強ばらせた。

「期待している」

そう言うと、私を抱き上げてベッドまで連れて行った。

ちよ、ちよっと待て！

まだ、そう言うのは早いって……やらない約束だろ！  
約束を破る気か。

私の訴えは声にすることが出来ない。

アズは不敵に笑い、私の額に手を乗せた。

ひんやりとした手の平。

心地良いと感じてしまうのは、私の顔が熱いからだ。

「顔、真っ赤だな」

意地悪な顔。

うわ。こっこの顔の方が、好きかも shouldn't.

って、そんなことを考えてる場合じゃない！

こいつ、完全にからかってやがる。

「うつさい。どけて」

「何故？ 俺とお前は夫婦なのに」

低い、色気たつぷりの声。

やばい。声だけで気絶出来る。

私に変態になる前に止めなければ。

変態にはなりたくない。

「仮の、でしょうが」

私が一言ばつさりと切り捨てると、アズは少しだけ眉を顰めた。不機嫌、と顔に書いてある。

でも、此処で甘やかしてはいけない。

空気に流されたら、とんでもないことになる。

アズは私を強く抱き締めた。

羞恥に顔が沸騰する。

どけるって言っただろうが！

ぐいぐい腕で突っぱねるが、鍛えられた体はびくともしない。

疲れ果ててぐったりとした私に、アズはなだめる様に髪の毛を梳いてきた。

うわ、それ止めて欲しい。

気持ちよすぎてすぐに眠くなるから。

だって、まるで小さい時みたいに、お母さんに撫でてもらってるみたい。

「眠れ。元気なら、俺は何も言わない」

躰の疲労は思ったよりもたまっていたらしく、思ったよりも早く眠ってしまっ。

暖かいぬくもりを感じながら。

その翌日、また悲鳴を上げた私。

何もされてはなかったけれど、女の子としてはどうも。  
勘弁して下さい。



10 皆幸せにならなきゃ！（後書き）

コメディの為に始めた小説。

なのに、人物は勝手に動き出す。

……頑張りましょう。

## 11 そして迫るは黒い影？

何とか国の条約を頭に叩き込んだのは3日後だった。大見得を切ったが、2日は難しかった様だ。

少し疲れている様な気がする。

でも、後4日間しかないんだもん。

休んでる暇無い！

私はキャサラを連れてカーネリアの部屋に足を運んでいた。

朝食時に、カーネリアへ先触れを出しておいた。

先に了承を取らないと、相手の部屋には行けないのだ。

基本は。だけど。

心を許している相手になら、別に先触れを出さなくても良い。

でも、相手は女の子だし、一応ね。

って、私も女の子ですよ。ちゃんとした！

私はカーネリアの部屋前でノックした。

すると慌てる様な声と何かが崩れる音が扉の向こう側でした。

これは、積み上げてた本が崩れたな。

入る前から、何となく部屋の中が想像出来てしまった。

「いらっしやいませ。オウカ様」

侍女が扉を開けると、そこには本に埋もれたカーネリアがいた。

私はゆっくりと近づき、彼女を引き上げる。

「いつもこういうなの？」

「お恥ずかしながら。いつもこうです」

ドジッ子に決定。

部屋の中は思った通り、本の山だった。  
私も本は好きだけど、こんなに大量の本は……  
高く積まれ、専属の侍女達も諦めの表情を浮かべている。  
まあ、片づけが苦手なんだろうね。

「カーネリアは何の研究をしているの？」

私が聞くと、侍女は素早くお茶を出してくれた。  
カーネリアは少し考えながら、外を見る。

「植物の研究……かな」

その言葉にピンと来る。

植物は植物でも、色々ある。

「例えば、毒草……とか？」

「え、なんで分かったんですか！」

カーネリアはわかりやすいくらい飛び退いた。  
ダメじゃん。  
そんなわかりやすくしたら。  
でも、毒草は使える。

「まあ、色々ね。所で、傷薬とかも作れる？」

私が聞くと、案の定カーネリアは頷いた。

「はい。もしかして、オウ力様は知識がおありで……？」  
「ないない。ただ、薬は元々毒草から作られることも多々あるって聞いたことがあるだけ。毒には毒を持って制すって、私の国言葉に

あるくらいだし」

「それは、凄い国ですね」

ボンヤリと頬に手を当ててカーネリアは感心した。

第一関門は突破出来そうだ。

あとは、どれくらいの知識と実力を持っているか。

「例えば、どんな薬が作れる？」

私が問うと、カーネリアは困った様に眉を顰めた。

「薬と言っても、色々ございます。例えば一般的な風邪薬でも、アレルギー体質の方がおられることもあるので作り方も変わってきます。傷などは魔法で治ることも可能ですが、発熱や嘔吐、解毒などは細かい細菌によるものなので、その方の症状を見なければ、正しい処方も出来ません」

正しい言い分だ。

私の求めていた答え。

私は嬉しくて微笑んだ。

カーネリアは専門知識はある。

ちらりと露台を見やると、植物がプランターに植えてあるので、薬草も作れそうだ。

「でも、何故そんなことを？」

私は後宮が無くなることと、カーネリア達の身柄を一任したことを話した。

最終的には手を組んで拜まれてしまう。

「私、実家に帰りたくありません。お願いします」  
「うん。ところで、何でカーネリアはこんな事を始めたの？」

カーネリアは少しくらい表情になり、溜息を吐いた。  
軽く瞼を閉じ、決心した様に私を見てきた。

「私の母様は、不治の病でなくなりました。カフェルと言う病で、  
一人に一人なる確率の低い病気でした。全身に吹き出物が出来、  
体の水分が減り、最終的には全身に血を送る機能が無くなるのです。  
私は何も出来なかった。魔法でも無理だと知って、私は薬学を学び  
ました。もう少し。もう少しで薬が完成するんです。そうしたら、  
母様の様な人を救うことが出来ます」

一つの新しい薬を作ろうと思ったら、様々な実験と研究費、それ  
から膨大な時間と知識が必要。

それぐらい私にでも分かる。

私はカーネリアが嘘を吐いていないことは瞳を見れば分かった。

嘘は吐いてない。

人を見る目だけはある。

彼女には強い意志と決意があった。

「分かった。私も協力するから、頑張ろう」

「ありがとうございます！」

「オウカ様、何をお考えですか」

部屋を出た後に、キャサラに聞かれた。

まあ、此処まで聞いたら分かりそうなもんだけどね。

「薬農園つて、王宮にある？」

「ありません」

「薬は？」

「医師が……」

「医者が薬になる訳無い。必要なのは正しい知識を持った薬剤師だよ」

「薬剤師ですか」

キャサラが不思議そうにする。

そうか。魔法があるから、大抵はそれで治しちゃうんだね。

傷もすぐに塞ぐから、ばい菌が入る事も少なくて済む。

王族には専門医がいるから、何も心配してないんだ。

「王宮で薬草を作れば、疫病がはやった時、対処の仕様も速い。医者でも限度がある。薬を専門に扱う薬剤師がいれば、安全度はかなり向上するはずだよ」

「ですが、予算はどうされるおつもりですか」

「そう。問題はそこだ。」

多分国自体はいいっぱいだと思う。

将来的な利益はあっても、本当にそうなる時が来るとは限らない。もつとも、薬剤師がいれば、解毒はすぐに出来そうだけど。」

「それはまた考える。うーん。経済学にも手を出すべきかなあ」

勉強嫌いな私が、良く此処まで頭の回転が速くなるものだ。きつと、眠っていた能力なんだな。

うん。絶対そうだ。

歩いていると、チカリと光るものがあった。

光のした方を見ると、森に誰かがいる？

「オウカ様！」

私はキヤサラの制止も聞かずに近づいた。

近づくにつれ、剣を振る様な音が聞こえる。

道ではないところを歩き、ドレスが汚れない様に気を付ける。

その先には、剣を振るうレティアがいた。

白いシャツにスカーフを巻き、ズボンをはいて髪をポニーテールにしていた。

まるで男装だが、おそらくは剣の稽古なのだろう。

「かつこいい〜」

思わず声に出していた。

私に気付いたレティアも頬を染め、剣を振るのを止めた。

「恥ずかしいところを見られたわ」

「そんなこと無い！ 格好いいよ」

私は褒め称える。

確かに男の騎士も格好いいけど、女の子が騎士でも格好いいだらうな。

ん？ 騎士？？

「オウカはどうして此処に？」

「カーネリアのそこ行っただ後、光ってるのが見えてね」  
「剣が太陽に反射したでしょうね」

レティアは剣を収めて私に近づいた。

「いつから剣を持つてるの？」

「物心付いた時からです。カストロは武術に富んだ国ですから、普通の騎士よりも強い自信があるわ」

そう言うの、尊敬するなあ。

剣を試しに持たせてもらうと、少し重かった。

これを扱うレティアって凄い。

もしかしたら何かに使えるかも。

部屋に帰って考えようつと。

私が振り向くと、キャサラの姿が消えていた。

「あれ、キャサラ？」

「どうかしまして？」

私の様子に、レティアは首を傾げる。

いつもなら後ろにべったりひっついてるのに。

レティアを心配させない為に、私は首を振った。

「何でもない。キャサラが待ってると思うから、行くね」

「ええ。お気を付けて」

私は元来た道に戻った。

けど、キャサラの姿が無くて。

どこに……？



何かに躓いて、私は転ぶ。

しりもちをついて、躓いたものを見ると、血の気が引いた。

「キャサラ！」

足下にキャサラが白い顔で倒れていたのだ。

幸い怪我らしいものはしていない。

でも、なにか毒だったら……。

カーネリアを呼ぼうと立ち上がったなら、背後から何者かに襲われた。

「むが……!!」

布の様なもので口を押さえられる。

慌てて悲鳴を上げようとするが、躰の力が抜けてゆく。

最後の力を振り絞って、意思をレティアのいる方向へ投げることしか出来ない。

そのまま意識は闇に落ちていった。

11 そして迫るは黒い影。(後書き)

いつも「愛読頂き、ありがとうございます！」

## 12 敵は誰だ？

執務室で俺はアズの警護をしていた。

俺はアズの専属騎士の為、何か頼まれた時以外は側にいることが義務づけられる。

俺としても、離れる気はないが。

執務室の机に溜まった仕事を片づけていたアズがピクリと不自然に揺れた。

「オウカ……？」

何で、そこに王妃の名が出てくる。

とつとう頭でも吹っ飛んだか。

アズは何かを確かめる様に視線を宙にさまよわせ、何かに確信した様に慌てて立ち上がった。

「どうした」

「オウカの魔力が消えた」

アズの言葉に俺は驚く。

魔力は早々消えるものではない。

むしろ、魔力が完全に消えると言うことは気配を消しているのか、死んだのか。

魔力について微塵も学んでいないオウカにしたら、後者に当てはまる。

俺も探ってみるが、確かにオウカの魔力が感じられない。

そもそも、アズに感じられない物が、俺に感じられる訳がないのだが。

その時、執務室のドアがノックも無しに勢いよく開かれた。

そこには髪を振り乱したカストロの王女、レティアがいた。

「アズ。オウカが消えましたわ！」

その話し方は昔に戻っている。

人前では取り乱したりしないレティアが珍しい。

おそらくは知ってきたのだろう。

魔法という手段も考えられない程混乱している。

その服装は剣の稽古でもしていたのだろう。男装していた。

いつもは姫君らしくないと言って、ひっそりと稽古をしているのに。

「分かってる」

アズは低い声音でそう呟いた。

澄ました顔をしているアズに近づき、胸ぐらを掴み上げる。

強い。オウカも強いと思ったが、なんで此処の女は強いんだ。

「私が稽古をしている時、あの子が来たわ。キャサラを探すと言ってすぐに帰った。その帰ってすぐに魔力が消えて、途中で倒れているキャサラを見つけた。速く、あの子を見つけないと！」

珍しい。

陛下に近づく女はいつも一掃していたはずの彼女が、こんなにも取り乱すなんて。

それよりも、みるみるうちにアズの気配が怒りに変わったのが分かった。

表情は変わらない。

その気配が一変した。

「レキ、城門を閉鎖しろ。何人たりとも外に出すな」

低い命令に俺は一礼して一瞬で向かった。

城門には結界があり、これを飛び越えて移動魔法を使うことは出来ない。

必ず城門を通らなければならないのだ。

兵士に命令し、すぐに城門を閉めさせようとする。

その瞬間に、城門を抜ける一台の馬車があった。

窓から見えたのは黒髪の少女。

間違いないオウカであることが分かり、馬車には魔力遮断魔法が付けられていた。

「その馬車を止める！」

命令を下すが、誰一人として止めることが出来ない。

魔法を放つが、強固な結界に阻まれる。

馬車はまんまと城門破りを果たして、走り去っていった。

俺は大地を触り、少し血を垂らして魔法を唱える。

すると、四つの翼をもつ精霊が現れた。

召喚魔法。

俺の召喚魔法は地属性。

大地がある場所なら、追跡可能だ。

「追ってくれ」

俺の命令に素直に聞いて、精霊は飛び立った。

兵士達は呆然と馬車が見えなくなるまで見送る。

俺はこれでも魔法系統に関しては騎士団でもトップクラスだ。

その俺の魔法をはね返した結界。

相手は相当な使い手に違いない。

俺はアズに報告する為に踵を返した。

俺、死なねえと良いなあ……

俺が執務室に戻ると、奇妙な光景があった。

あのアズが、レティアに羽交い締めにされていた。

何があつたんだ。これは。

俺の姿を見ると、アズはレティアを魔力で振り払った。

吹っ飛んだレティアは己の魔力で見事に着地する。

冷静にはなっている様だが、カオスだな。

「オウカは!？」

「連れて行かれた。俺の魔力が通じなかった。相手は強力な魔法使いを雇ってる可能性が高い」

俺の報告に、アズとレティアの顔が蒼白になる。

もっとも、レティアは分からないだろうが、オウカは王妃以外にも利用価値がある。

魔力量が知れたら、何に使われるか分かったものではない。

洗脳されてアズを殺しに来た日には、俺は躊躇しないが。

アズはおそらく、攻撃出来ないだろうからな。

とりあえず、今は殺されずには済みそうだ。

「アズ。私が行きますわ。許可を」

レティアはアズの指示を仰ぐ。

部下でもないのに、その言葉にはアズへの信頼が込められていた。アズは首を振った。

「駄目だ。追跡はしたのだろう。精霊が帰ってくるまで待つ」

「そんな悠長な！ 今でもあの子は危険にさらされているのに」  
「レティア」

アズはなだめる様にレティアの名を呼んだ。

しかし、レティアはアズに歩み寄ると、その頬を叩いた。  
小気味いい音が部屋に木霊する。

「あの子は、まだ子供ですよ！」

「あれは、成人している」

「関係ありません。貴方はあの子の魔力を封じている。それが分からない私ではありませんわ」

俺とアズは驚いた。

まさか気付かれているなどとは思っていなかったのだ。

「……なんで分かった？」

「お茶会の時に付けていたペンダント。あの中心にはめ込まれていた宝石は、あまり市場には出回らない魔力抑制の付いた魔法石です。知るものは少ないですが、一度目にしたことがありますの」

まさかそんなことではれるとは思っていなかったのだろう。

アズは肩を竦める。

興奮しているのか、レティアは拳を握り、アズに詰め寄った。

「どういう経緯が知りませんが、あの子魔力に対して何の知識もない。そしてあの子は女。使い道など、幾らでもあります」

女。その言葉にアズはレティアを睨んだ。

ああ、そうか。

レティアも分かったんだ。

アズが気付かずにオウカを好きになったことを。まだ自覚もしていない。抱いてもいないことを。

「私を、使いなさい。すぐに終わらせて見せますわ」

「……レキ、精霊は」

アズの声に、俺は魔力を集中した。

逃げた馬車は一直線にある場所へ向かっている。

どうやら精霊は傷付いているらしく、おそらく相手の攻撃だろう。俺は精霊に戻る様に命令した。

「ディカル伯爵の家に向かっている」

俺の質問に、アズは眉を顰めた。

当然だろう。ディカル伯爵はこの辺り登城していない。

一年前に妻を亡くし、一人娘と共に慎ましやかに暮らしていたはずだ。

「何故だ。あの男は……」

「それを考えるのが貴方の役目ですわ」

アズは暫く考える。



実際、ディカル伯爵の家に突入するなら、人数はいらない。アズとレティアと俺がいれば十分だ。

むしろ、このメンバーで倒せない奴なんてレティアの父親ぐらいだ。

あの親父は怪物だからな。

「レキ。アグロを呼べ。レティアは出撃の準備を」  
「分かったわ」

レティアは魔法で移動し、俺は一礼してアグロの所へ向かった。

敵を泳がすよりも、まずはオウカの安全を選んだ。

俺の報告にアグロは眉を顰め、頷く。

敵はディカル伯爵ではないと呟きながら。

12 敵は誰だ？（後書き）

こんな話がして欲しいという希望があればリクエストして頂けると  
光栄です

ご愛読、ありがとうございます！

13 此処は何処？私は誰？（前書き）

ちよつとだけ残酷表現があります。

### 13 此処は何処？私は誰？

暗い闇。

目を覚まして第一印象はそうだった。

下が柔らかいと言うことは、ベッドの上の様だ。

頭が重い。

自由に体が動かない。

連れ去られる前に嗅がせられたやつのせい？

少し甘い匂いがした。

やばいものだといやなので、あとでカーネリアに聞こう。

もう一度瞼を睨り、意識が覚醒するのを待つ。

暫くしてようやく頭が回る様になり、躰を起こした。

どうやら手足は縛られていないらしい。

私は無意識にピアスとブレスレットを着けているか確認していた。大丈夫。つけている。

暗闇に慣れた目は、周りを見回す。

どうやら、私の知らない、でもそれなりに身分のある様な部屋だった。

後宮ほどではないけれど、天井も高いし、それなりに部屋も広い。

部屋の中に並ぶものは少ないけれど、月明かりに見て見れば、最近家具を移動した様な跡がある。

何処かの貴族に攫われた様だ。

何で連れ攫われた？

王道物語の真骨頂と言われればそうだけど。

まず、私を連れ去っても何の意味もない。

元々捨て駒として仮の王妃に付いた。

私が死のうがどうしようが、アズに決定的なダメージを与えられるとは思えない。

私が敵なら、私を人質にとって何かを要求するか？  
でも、さつき言ったとおり、それなら私は殺される。  
私には利用価値なんて無い。  
いつでも捨てられる仮の王妃なのだから。  
それを知らない奴の犯行か？

私はふらつく頭をおさえて壁をつたう。  
露台に出て、現在位置を確認しようと思った。  
頑張つて露台に出てみるが、周りには灯一つもない。  
此処は王宮でも、城下町でもないらしい。

「捕まっちゃったねえ」

闇の中から聞こえた声に驚いて私は飛び退いた。  
露台の手すりに一人の少年が立っていた。  
いや、本当に少年なのか分からない。  
黒いローブを着て、顔上半分を仮面で隠している。  
身長とまだ声変わりのしていない声質から少年だと思ったただけだ。

「誰？」

私が問うと、少年がおかしげに笑った。  
「つてか、不審者。」

絵に描いた様な不審者がいますよー！  
私が心の中で叫んでいると、少年は手すりから飛び降りて、ニッ  
コリと笑った。

「僕は【永遠の記憶】を司る、ヘリクリサム。気軽にリクって呼んでね」

「花の名前……」

そうだ。

アマリリスの時には気付かなかったが、そうだ。

ヘリクリサムって、紫菫菊の別称だ。

私は弟の零が植物が好きだったから、良く一緒に植物図鑑を開いた。

花言葉って面白い。そんなことを話ながら。

「そう。此処の世界に存在するか神様って、花の名前なんだ。この世界に存在しない、貴方の世界の花の名前」

「って、貴方神様!？」

私の驚きに、リクは笑った。

腹を抱えて手すりを叩きながら。

この笑い方、馬鹿にしてない？

「ちょっと!」

「ご、ごめん。あんまり……ぶっ」

リクの笑いは止まらない。

そう言えば、零も一度笑い出すと止まらなかったよなあ。

って、思い出に浸っている場合じゃなくて。

ひとしきり笑い終わると、リクはようやく顔を上げた。

「さて、笑わしてくれたお礼に、一個プレゼントしようと思って」

「プレゼントは良いから、此処から助けてよ」

「いやあ。それは無理」

笑いながら言うことか、それは。

ぱっさりと切り捨てた割に、リクは私に触ろうとした。

頬に触れようとして、それが出来ないことが分かった。

「透けてる……」

「そう。僕はもう、この世界に直接干渉出来ないんだ。だから、助けられない。ごめんね？」

顔を傾げて甘える様に言う。

ちょうど良いボーイソプラノ。

この仮面外したい。

絶対可愛い！

鼻血がでそうになり、私は手で押さえる。

やばい。変態度が増してる。

「その代わりに、一つ良いことをしてあげる。もうすぐお迎えも来るしね」

リクはそう言いながら、私の額に手を近づけた。

淡い蒼い光が生まれる。

途端に頭痛がした。

頭が痛い。

私は立っていられなくなり、その場にしゃがみ込む。

ハンマーで殴られている様に痛んだ。

「何を……」

「貴女は大切だから、せめてこの世界で生きて欲しい。幸せに。だから、僕は此処に貴女を連れてきた。ああ、僕が誰かなんて分かんなくて良いよ。元の世界に戻す気なんて無いし」

「いやよ。戻して。私を……」

「なんで？ あの場所は貴女にとって辛い場所でしょ。もう、あの男をお父さんとか呼ばなくて済むし。あの女の言いなりになって結

婚しなくて良いんだよ？」

「私がないと、零が！」

リクは知っている。

私がどうい生活をしてきたのか。

私の存在する意味。

私があ場所に生きていた意味。

全てを分かり切った様に、リクは笑った。

「貴女の心残りは弟か。なんなら、今すぐ殺してこようか」  
「止めて！」

私を中心に露台にヒビが入る。

ガラスが一気に割れる音がした。

腕に破片が飛び散った様で、鋭い痛みが右腕に走った。

真っ暗だった屋敷に明かりがともされる。

「ああ、危なかった。ちょっと力を解放するだけでこれか。びっくり。まあ、またいつかね」

「待て、糞野郎。零に何かしたら、ぶっ殺してやる！」

私はそう叫ぶ。

それを見て、満足げに笑いながらリクは消えていった。

頭の痛みは変わらなくて、私は呻く。

気絶している場合じゃない。

行かなきゃ。行かなきゃいけない。

私は自分を奮い立たせる。

こんな所で、立ち止まって堪るか。

必死に立ち上がるうとする私の髪を、誰かが掴み上げた。

その痛みに苦悶の表情を浮かべる。



「逃げられると困りますな。王妃様」

舌なめずりする様な声。

辛うじて視線だけ向けると、そこには黒い服装の男がいた。

上下黒。その髪は黒に近い深緑。その瞳は蒼く、醜く歪んでいた。

「貴女には巨大な魔力が秘められている。ただ利用するには勿体ない。私の研究に役立って頂きますよ」

研究者なのか。

そんなことはどうでも良い。

「……さい。…………せ」

私は声にならなくても、言葉を口にした。

五月蠅い。

こっちは頭が痛い。

それに気付かず、笑う男。

ああ、もう、どうでも良い。

私にはあの子がいればそれで良いの。

あの子が笑ってたらそれで良かった。

全てが狂ったのは、私がこの世界に来てから。

あの子は泣いてるかな。

また、私の名前を呼んでるかな。

速く行かなきゃいけないの。

邪魔を、しないで。

「ぐはあっ!?!?」

男の呻き声がした。

私は髪の毛を掴んでいた手が無くなり、気力を振り絞って立ち上がる。

視界がぼやけていた。

でも、五月蠅い害虫はすぐ分かる。

「そんな魔力、何処から……」

私の腕で何かが壊れる音がした。

体が軽くなる。

何でも出来そうな気がした。

私は手をかざす。

空に浮かぶ月は、私を祝福するかの様に満月だった。

「やってられん！」

「五月蠅い」

私は一睨みする。

響き渡る何かがひしゃげた鈍い音。

呻き声。

五月蠅い。

「あれ、私何しようとしていたんだっけ？」

私は目を細めた。

両耳で何かが潰れる音。

もっと躰が軽くなる。

まあ、何でも良いか。

躰が昂揚する。

体の芯が熱くなって、もっと力を振るえと叫んでいた。  
私はその気になれば、この世界さえも壊すことが出来ると。

「ば、化け物おおお！」

男の叫び。

誰が化け物だって？

私は口端をつり上げた。

「消えて」

その男に手の平をかざす。

私を邪魔する奴は、消えればいい。

14 大切だから、側にいてくれ(前書き)

残酷表現あり。ソフトにはしてるつもりです。

## 14 大切だから、側にいてくれ

俺はレキとレティアを連れて城を出た。

もちろん、アグロに後を任して。

魔法によつて一瞬で飛んでいけたら楽だが、三人一遍に運ぶのは魔力と体力の消耗が激しい。

馬をすぐに用意させた。

レティアはそこらにいる女共とは違って馬術に長けている。

昔からそう言うことが好きで、暇さえあれば親の制止など聞かずに剣の稽古をする様な娘だ。

根は凶太い。

幾ら武術の国とは言えど、彼女の才能は飛び抜けていた。

本当に姫なのかと疑うほど強い。

剣の腕だけなら、レキと同等なのではないだろうか。

レキも剣術と魔術の才能は必ずば抜けているが、本人が不器用な為、魔術に至っては精霊を喚び出すだけで精一杯だ。

それでも強いことには変わりない。

この二人がいれば、俺の身どころか、一国さえ制圧出来そうな気がしてくる。

レティアがいるのも、婚約目的ではなく、あちらの王は俺の意見と同じ事を考えていた様だ。

まあ、これなら思惑通りに事が進だろうし、オウカの心配も消えるだろう。

馬で小一時間ほど走ったところで俺達は城下町を抜ける。

そこから更に半時間。

馬を休めることなく走らせ続ける。

空は大分薄暗くなり、星が光っている。

時間がかかりすぎた。

オウカが連れ去られてから、すでに7時間は経過している。くそ。こんな事ならなりふり構わず城を出れば良かった。オウカが無事だと良いが。

「アレですわ！」

レティアが声を上げる。  
目的の伯爵邸はすぐ側だ。

しかし、道に飛び出してきた小さな影に、俺は驚いて馬を止めた。それに習う様に二人も馬を止める。

目前に現れたのは、少年だった。  
黒いローブを着て、顔半分を仮面で隠している。

奇妙な少年を俺は睨んだが、少年は意に介する風もなく、丁寧に礼した。

「麗しゅう、アズロウ陛下」

「麗しくないがな。そこを退ける」

俺が命令すると、少年はにやりと笑った。

「やれやれ。こんな奴に桜華を渡したくないんだけどな」

オウカ。

その言葉に、俺は肌が泡だった。

瞬間に少年から莫大な魔力を感じる。

そしてもう一つ。屋敷の方から。

魔力の質を把握する前に、目の前の少年の魔力が大きすぎて胸を圧迫される。

レティアとレキは馬から崩れ落ちていた。

俺も馬から下り、魔力を放出して立つ。

しかし、立っているのがやつとだ。  
こいつは何者だ？

化け物級の魔力を感じながら、俺は少年を睨み付けた。

「オウカに、何をした」

「何もしてないよ。少しだけ、解放させただけ。本人は頭が痛いくらいにしか分かんないだろうけど」

解放させたのは魔力だろう。

そうでなければ、こんなにも無秩序な魔力放出が起こる訳がない。

「桜華はね、僕の大切な人なんだ。僕に光をくれた。だから、僕はあるべき世界に連れ帰っただけ」

「あるべき世界、だと……？」

「うん。あつちの世界は、桜華に苦痛と枷しか与えなかった。受け入れるだけ受け入れさせて、僕の側から永遠に引き離そうとした。だから、桜華を失う前に、僕はこつちの世界に連れてきた。まあ、魔力が元に戻っちゃうのはビックリしたけど。おかげで強いし、自分自身を守る様になるし。結果オーライかなって感じ」

何を言っているのか理解出来ない。

すると、少年は分からなくて良いと言った。

「桜華がずっと幸せでいられる様にするのは、僕の役目だから」

にっこりと笑うと、少年は俺に近づいた。

思わず剣を手に取る。

少年は苦笑しながら、剣先に触れる。

否。その指は剣を通り抜けたのだ。

「これは実体じゃ無いからね。精神体って所かな。だから、直接桜華を助けられないんだ。今は君に預けるよ。でも、桜華を苦しめたら、その時はこの国が地図から消えるよ？」

毒を吐いて少年は消えた。

同時にかけられていた圧力もなくなる。

一気に嘔き出した汗。

何者なのかは分からない。

だが、ただの子供　ただの人間では無いことは明らかだ。

あの少年が、オウ力をこの世界へ連れてきたと言っことだろう。今はそんなことを考えている暇はない。

「いくぞ」

俺は馬に飛び乗って屋敷へと向かう。

すぐさまレティアが立て直して追ってきた。

その後にレキが続く。

屋敷について馬から飛び降り、剣を抜いて屋敷の中へ突入した。

屋敷の中に入ってすぐにしたのは血臭。

壁には血痕がこびりつき、廊下には執事らしき人間が死んでいた。鋭利なもので刺され、焼かれた様な残忍な殺され方をした男を横目に駆け上がる。

「伯爵！」

レキが声を上げる。

そこにはこの主であるディカル伯爵が倒れていた。

床に広がる血だまり。

レキが治癒魔法をかけるが、助かるかどうかは分からない。

虫の息のディカル伯爵は、俺を見て目尻に涙を浮かべた。



「へ……か……。申し……訳……。ありま、せん」

「無理をして喋るな。お前を切った相手はこの奥か？」

俺の質問にディカル伯爵は頷く。

俺はレキにその場を任し、レティアを連れて奥へと進んだ。

屋敷の中はやけに静かだ。

なのに、この魔力量。そして、圧迫感。

俺の魔力を遙かに上回る。

ぐらりとレティアが傾いた。

「無理をするな」

「平気、です。行きましょう。しなければならぬことがあります」

この魔力の源がオウカであることは容易に知れた。

気を抜けばこの国一番の魔力量をもつ俺でも、膝をついてしまう。

立ち止まる訳にはいかなかった。

「ば、化け物おおお！」

男の悲鳴に、俺はかけだした。

一番奥の部屋の扉を開ける。

右腕に傷を負い、虚ろな視線をさまよわせるオウカが、露台近くに立っていた。

月明かりに照らされ、髪の毛がきらめく。

その色は黒ではなく、空に浮かぶ月の様な銀色の髪。

その瞳も黒ではなく俺と同じ藍色。

しかし、焦点は合っていない。

「消えて」

オウカは手の平を男の方へ向ける。  
男の右頬が何かを大量に詰めたかの様に腫れていた。  
それどころではなく、右腕はあらゆる方向へ向き、肩は外れている  
様に感じる。

その眼は恐怖に歪んでいた。  
それなりの魔力を持っている。  
だが、オウカに比べたら、子供にも等しい。  
やばい。

俺は男の前へ立ちふさがった。

「……どけて。それ、五月蠅いの。頭に響く。早く、潰さない」と  
「止める。お前はそんなことをするな」

俺は一步步オウカに近づく。  
オウカは俺だと分かっていないらしく、首を傾げ、魔力を放出し  
た。

制御されていない魔力は固まりとなって俺を襲う。  
俺はそれを自分の魔力ではね返す。  
思ったよりも分厚く、力を緩めれば俺が吹き飛ばされる。

「オウカ。俺だ。分からないのか？」

問い掛けるが答えがない。  
呆然と視線をさまよわせて、俺を見ようとしなない。  
違う。この女は違う。  
俺の望んだオウカではない。

「オウカ。オウカ……」

元に戻ってくれ。

俺はオウカを抱き締める。

いつもの様に優しく髪を撫でて梳く。

俺を見てくれ。

その瞳に、俺を映してくれ。

彼女は元の世界に戻りたがった。

その方法を見つからない様に始めは軟禁した。

すると今度は外に出ると言い出した。

だが、俺は許さなかった。

俺の手から逃げる事なんて許さない。

どこか遠いところへ行くなんて許さない。

俺の隣にいてくれ。

俺の側にいてくれ。

会ったのも数回。

初めてあったのも一週間半前。

なのに、初めて会った時も今も、ずっと前からオウカを知ってい

る様な気がした。

逢いたかった。

ずっと、ずっと。

懐かしく、愛おしい。

まるで、己の半身にあったかのように。

「……ア、ズ？」

俺は腕の力を緩めると、オウカが俺を見上げていた。

その瞳はしっかりと俺を映している。

髪も瞳も元の色に戻り、魔力量も幾らか抑えられていた。

「オウカ」

俺はもう一度オウ力を優しく抱き締めた。  
手放しはしない。  
ずっと、側にいてくれ。

14 大切だから、側にいてくれ（後書き）

ご愛読ありがとうございます！

初めてのアズ視点でした

桜華大好きって感じを出すの好きです。

アズは扱いやすい！

今日はホワイトデーです。

チヨコをあげてないので、お返してくれる人はいません。  
悲しいです。

15 ありがとう(前書き)

短いです

## 15 ありがとう

見上げると、アズの顔がある。

頭の痛みも、気分の悪さも取れて、気持ちが軽かった。  
何をしてたんだっけ？

露台に出て、リクと会って。

そこから良く覚えていない。

不思議で首を傾げる私に、アズは優しく抱き締めた。

「苦しくはないか。痛みはないか」

「アズ……？」

右腕をあげようとすると、腕に痛みが走る。

見れば、何か鋭いもので切った様な傷がある。

何できったんだらう？

まだ頭がボンヤリとする。

朝起きたてみたいな感覚だ。

薬のせいかな。

深く考えられない。

「陛下。それは異形の化け物です。すぐに殺して下さい！」

男の声がした。

声のした方へ視線を向けると、男は怯えた様に両手を引きずりながら後ずさった。

化け物？

誰のこと？

アズは険しい表情で、私を抱き締めた。

「黙れ。レティア、そいつを」

「銀髪藍眼は悪魔の象徴です！ その娘は呪われている」

娘？

レティアが男の隣にいることに初めて気付く。  
違う。

男はレティアのことを言っているんじゃない。

他に娘って、私しかない。

私のこと？

「桁外れの魔力。一瞬でも表した本性。今、その娘を殺さないと…

…」

「殺せ。レティア」

アズは低く命令した。

レティアは腰に付けていた剣を抜く。

アズの瞳は怒りに満ちていて。

レティアは本気だった。

男は女のように悲鳴を上げる。

レティア。

止めて。そんなこと、止めて。

私は止めようと身じろいだだが、アズは離してくれない。

何も見ない様に私を胸に押しつける。

「駄目。離して！」

「こいつはお前を連れ去った。そして、愚弄した。死んで当然の人間だ」

駄目だ。



アズは説得出来ないくらい本気だ。  
私はアズの胸を叩いた。

「レティア。止めて。殺さないで！」

「オウカ。陛下の命令は絶対。そして、私は貴方を連れ去り、どんな理由があろうと貴方を陥れようとしたこの男を、許す気はありませんわ」

彼女の本気、初めて聞いた。

つて、感想を言ってる場合じゃない。

格好いい台詞だけど、使いどころが違う！

誰でも良いから、止めてよ。

その時だった。

天の声が聞こえたのは。

「レティア、止める。アズ。お前もムキになるな。その男には色々取り調べることがある。此処で殺したら駄目だ」

辛うじて見ると、手袋が血だらけのレキが立っていた。

鶴の一声。天の助け！

あんたにすっごい感謝します。

私の中で株が上がったのは間違いない。

アズのおマケじゃなかったのね。

「どうせ死刑だ。此処で殺しても問題ない」

「いや、この男に娘が連れ攫われて、ディカル伯爵は協力していたらしい。処罰は娘の方を助けてからだ。此処で殺せば、アグロが確実にキレルぞ」

話が見えてこない。

うーんと、要はこの男が主犯ってこと？  
んで、なんちゃら伯爵が脅されて協力していた？  
アズはしばらく考えた後に好きにしろと呟いた。

「アグロが迎えをよこしてる。あと半時間で来ると思うが」  
「……それを縛り上げておけ。この部屋から出すな」

アズは私を抱き上げた。

一瞬で景色が変わり、見知らぬ部屋に変わった。  
移動魔法だろうか

アズは近くにあったソファに私を横たえた。

「隣の部屋だ。苦しくはないか」

横になると大分落ち着く。

大丈夫だと微笑んだ。

アズの大きな手が私の右腕に触れる。

淡い光と共に、傷は癒えていった。

「魔法って、凄いな」

「オウカも使おうと思えば使える。教えなかったのは、俺のワガママだ」

アズの手が頬を撫でる。

暖かくて優しい。

この手に包まれると、とても安心出来た。

「教えたら、また出ていくなんて言い出すと思った」  
いつかは帰る。

そう言いたかったが、またアズに悲しい顔をさせてしまうと思うと、言えなかった。

きつとアズが悲しい顔をするのは、私がいなくなれば貴族の人が言い寄ってくるから。

また振り出しに戻るかも知れないから。

仕事の関係上、私がすぐに消えるのは都合が悪いのだ。

帰りたいのは事実。

帰る為にはアズから離れて方法を探しに行かなきゃいけない。

「……今はまだ、此処にいるよ」

それぐらいしか言えなかった。

いつかは消える。

これほど都合のいい女はいないだろう。

アズはほっとした顔で、私を見下ろす。

「ヘリクリサムって知ってる？」

私は不意にリクのことを思い出す。

アズは不思議そうな顔をしたが、応えてくれた。

「神話に出てくる神の名前だ。【永遠の記憶】を司り、アマリリスの友人だったが……それが、どうした」

「……なんでもない」

その神様と会ったなんて言っても信じてくれないだろう。

神話に出てくるなら、書庫にでも本があるだろう。

後宮に帰ったら、調べよう。

私は暫くアズと話をした。

さっきまで攫われていたなんて感じじゃなくて。

助けに来てくれたことが嬉しくて。

「アズ。助けに来てくれて、ありがとう」

私がそう言うと、アズは微笑んで私の手を握った。

「当たり前だ。お前が大切だから」

そう言うの、反則じゃない。

期待もたせる様なことは言わないで。

間違つて好きになつたら引き返せなくなる。

元の世界に帰るまでの仮初めの王妃。

そんなに優しくしないで。

好きになりそうだから。

15 ありがとう(後書き)

いつもありがとうございます。

また一つ、よろしくお願いします！

## 16 最後は大打撃？

あの日から3日ばかりが過ぎた。

帰ってきてすぐに私は高熱にうなされ、カーネリアが薬を処方してくれて翌日には熱が下がったものの、魔力が安定しないのどうのこうので、3日ばかりベッドから出さしてもらえなかった。

アズはうつるといけないから立ち入り禁止にしたら、アグロが凄く喜んでいた。

理由は分かんないけど。

他の皆も人事異動やら引越やら忙しいみたいで、廊下の方は随分あわただしく感じた。

もちろん大人しくしていましたよ。

間違つてもベッドから抜け出して……とか、考えたけど、してないから。

早朝。

私は臍を伸ばして、異常がないか確かめる。

斬り傷とかは魔法で治せても、筋肉痛とか、肩こりまでは治せない。

簡単に言えば、傷口があるものに対しては治せるって事かな？

倦怠感があるのは仕方がないが、軽く体を動かしてみる。

うん。体力は落ちてるとは思うけど、大丈夫かな。

「おはようございます。オウカ様」

部屋に入ってきたキャサラの隣にはアズがいた。

もう大丈夫だから、立ち入り禁止も解禁か？

アズは私を抱き締めた。

スキンシップが激しいと思う。

うーん？

欧米の人ってハグが好きだったけ。

そんな感じ？

いや。日本人でもハグ好きな人はいるな。うん。

「…………おはよう。アズ」

「おはよう。オウカ」

顔を上げた私の頭をアズは撫でた。

光に反射しているかのように、私はアズを見る目を細めた。

だって、格好いいんだもん。

おかしくない？

こんな美形が私に微笑んでる。

夢なら覚めて欲しくない。

いや、現実なんだけど。

「オウカ。そろそろ着替えた方が良いと思うわ」

そんな声が聞こえて、扉の方を見ると、そこには……

「レティア…………どうしたの、それ!？」

白を基調としており、赤のラインが刻まれた騎士服を身につけたレティアがいた。

レティアは不敵に笑い、アズから私を引き離して抱き締める。

「今日から私の主はオウカですの。低俗な獣からは守って差し上げますわ」

「低俗な獣って、俺のことか…………？」

視線が、視線が痛いです！

レティアは対抗してアズを睨み付ける。

あのアズに怯まないなんて、さすが好敵手……いやいや。幼なじみ。

「貴方以外、誰がいるというの？ 貴方よりも先に私が見つけたら、とつとつとオウカを連れて自国に帰りましたのに」

誘拐？

いや、GLかこいつは！

身の危険を感じてアズに目だけで助けつつ言おうと思ったけど、こいつにも何されるか分かったものではない。

残るは……

「キャサラあ！ 助けて〜」

のほほんで見守っていたキャサラに救いの手を求める。

頬に手を当て、私が今日着るらしい服を手に持ちながら、困った顔をしていた。

もつとも、困っている様で、楽しそうなのだが。

見せ物じゃないんだから、助けてよ。

「あらあら。うふふ」

そ、そこで笑いますか。

黒い。笑い方が黒い。

キャサラってそんなキャラだったの？

ああ。私の、私の癒しがア……。

いや、そう思ったことはないけどね。

目の保養とは思ってたけど。



って、いやいや。話それすぎだろ。私の思考回路！

「何やってるんですか。あなた方は」

呆れた様な溜息をした方向を向くと、アグロが部屋の中に入ってくるどころだった。

黒い大魔王が現れた。

ヒットポイントなんてゼロに等しいのに、こんな状態で攻撃を受けたら精神的に死ぬよ！

うわああああ。

私の思考回路がパニック状態。

「レティア様。オウカ様をお離し下さい。説明が先でしょう」

アグロがそう言って助けてくれる。

渋々レティアも私を離れた。

この時ばかりはありがとう。大魔王様！

「オウカの脳内が落ち着くまで、暫くお待ち下さい」

私はいつの間にか無くなっていたイヤリングの代わりに新しいのをもらった。

あの日何があったのか良く覚えていない。

連れ去られてからの記憶はない。

そう説明しておいた。

言える訳がない。

神様と会ったなんて、どうみても頭がおかしくなったようにしか感じない。

そればかりか、気分の高揚、破壊衝動を何となく覚えてる。何をしたのかは覚えて無くて。

「オウカ様。レティア様は希望により、妃の位から騎士へと変わります。しかし、それでは身分が釣り合わない為、オウカ様の姫騎士にさせて頂きます」

「姫騎士？」

私が首を傾げると、アグロに睨まれた。

「貴女という方は……」

「え、法律に入って……ああ！ 第9条 姫騎士の称号を持つ者は王族に意見する権利を持つ っ、あれか」

「その通りです」

騎士の称号にはランクがあつて、王様から（この国の場合はアズね）送られる藍色の宝石が埋め込まれた指輪を所有することを許された者は、騎士の中でも最高位の称号・姫騎士を名乗ることが出来る。

「姫騎士の由来は、かつて戦乱だったこの世界を治めたアマリリスから取られています」

「え、アマリリスって神様じゃないの？」

「神とは人が神聖化した者のことをこの世界では指します。始まりと終わりの神は別ですが……彼女の場合、多大なる魔力をその身に秘め、闘うのは人を守る時のみだと伝えられています。当時の彼女は王を守る騎士でしたから」

「なるほど。ロマンチックだねえ」

女の子の好きそうな話だ。

もっとも、女の身でありながら、戦場に向かうというのは死ぬだけの恐怖以外の恐怖を持たなければいけないと思う。

死ぬ以上に酷いことをされてしまうかも知れない。

そんな中、闘ったというのなら、彼女は凄い人だったんだろうん？

なんか、忘れてる様な……？

ま、いつか。

私の手をレティアは取った。

あまりに自然な流れで、格好いい動作で身動きの取れない私の指先にリップ音がした。

「宜しくですね。オウカ様」

「え、え、ええ〜」

私はレティアの豹変振りに顔を真っ赤にする。

横からかつさらうかの様にアズが私を抱き締めた。

「オウカは俺の物だ！」

「ふふ。これでアズに敬意を払う必要もなくなったわ。感謝するわよ。オウカ」

不敵に笑うレティアに、私は熱くなる頬に手を当てる。

格好いい。

格好良すぎ。

女の人なのに。

私とそうも年なんて変わらないのに。

ああ、駄目。

いけない道に走りそう。

「オウカ！」

「陛下。ヤキモチを妬かないで下さい。オウカ様にはこれから魔力制御の訓練もして頂くのですから、政務に戻りますよ」

「魔力制御なら、俺が教える」

「貴方には政務があるでしょう」

アグロは溜息を吐く。

しかし、何処か楽しげだ。

「……じゃあ、夜になったらアズが教えてよ。それで良いでしょ？」

アズを見上げて首を傾げてお願い。

こうすれば大抵の男は落ちるって、友達に教えてもらったことがある。

もっとも、可愛くない私に効果なんてあるのか分かんないけど。

てか、これが使うの初めてだ。

アズは私を凝視してくる。

「駄目？」

なんか駄目だと言われそうで、念押し。

アズはとうとう顔を背けて右手で顔を押さえた。

どうしたんだろう。

「行きますよ。陛下」

既に私へ背を向けていたアグロが歩き出す。

心なしか、肩が揺れてないか？

レティアとキャサラも顔を赤くして私から視線をそらしてる。

「……いつてくる」  
「いつてらっじゃい」

だって、いつてくるって言われたら、それしか言っしかないじゃ  
ん。

アズは私の頭を軽く撫でて出ていった。

残されたのは私を顔が赤い女子2名。

私が視線を向けると、二人とも咳払いした。

本当に、どうしたんだろう。

## 17 酔うな、馬鹿！

「まずはこの球体に魔力を込める練習よ」

私はそう言われて、レティアから差し出された球体を持った。

透明なガラス玉。

光にかざせば、光の屈折で中に水が入っている様にも見える。

今いるのは私の部屋。

魔法の訓練をレティアが教えてくれることになって、さっそく朝食後から始めることになった。

「オウカには本当に感謝してるわ。オウカのおかげで私もカーネリアも此処にいられるのだから」

「え？」

私はガラス玉からレティアに視線を戻した。

何の話？

「オウカが連れ去られた時、私も助けに行つたのよ。その後、オウカが倒れた時、一番早く薬を用意したのはカーネリア。その功績をたたえられて、後宮の4分の1を元から壊す予定だけど、その空き地に農薬園を建設し、カーネリアはその薬剤師長に。私は希望通り騎士になることが出来たの。元々、結婚もする気がなくて、自国に帰ったら国を捨てて騎士になろうと思っていたから、アズがそれならと。農薬園についてはオウカの考えだと侍女から聞きいたし、私もオウカがいなければどうなっていたか分からない。オウカには、本当に感謝してるの」

まぶしい笑顔をたたえる彼女。

言えない。

まさか、今の今まで忘れてたなんてでも、上手くいつてるから、いいか。

「私、何にもしてないもん。全部皆の力だよ」

「私は連れ去られただけ。

きっかけを作ったのは私かも知れないけれど、開花させたのは彼女たち自身。

私は本当に何も出来なかった。

「さて、続けますか」

「ええ」

お風呂に入って夜着に着替えた後、アズがやってきた。

疲れた様子で前髪を掻き上げ、荒く私のベッドに腰掛ける。

アズが入ってくると同時に、キャサラは退室していった。

二人つきりになり、私は机の上にあったコップに水を注いでアズに差し出す。

「お疲れさま。お風呂はどうするの？」

アズは水を手に取り、一気飲みする。  
何をそんなに焦っていたのだろう。

私はコップを机の上に置いた。

アズは私の質問など応えずに、背後から私を抱き締める。  
心拍数が上がるのは仕方がない。

「ど、どうしたの？」

「俺は、お前を王妃にする」

アズから告げられたのは、前もって知っていたことだった。  
言葉の意味。

その真意が分からなくて、私は心の中で首を傾げた。  
何かあったのだ。

誰かに何かを言われたのだろうか。

「私は仮でも、王妃じゃないの？」

「仮なんかじゃない！」

怒鳴る様に、アズはそう言った。

耳元で怒鳴るから、驚いて身を竦める。

「仮なんかじゃないんだ……」

その言葉を聞いて、それ以上は言わしては駄目だと本能で分かる。

私はアズから離れて、首を振った。

「仮よ。いつかは帰るもの。此処は私の世界じゃない。私の世界に、  
帰らなきゃ」

告げたのははっきりとした拒絶。



「王妃というのは役職だ。」

私はアズのことを好きなのか？

そう問われると分からない。

そもそも、好きになる要素なんてないのだ。

ただ、すがったのがアズだった。

ただ、側にいたのがアズだった。

それだけ。

それ以上でも、以下でもない。

「させない」

アズの目が本気だった。

私は身を翻して扉の方へと向かった。

アズの目がとてつもなく怖い。

有無を言わせない威圧感。

伝わってくる緊張。

扉へ行こうとした私の腕を、アズは引いて押し倒した。

転んだ先は床ではない。

ベッドだ。

「アズ。冗談はやめて」

「冗談じゃない」

熱っぽい吐息が首筋にかかる。

逃げようともがいたが、アズは私の両手首を片手でまとめて頭上に押しつけた。

「逃げるなら、この部屋からは出さない。まだ逃げるのなら足の健を切る。それでも駄目なら」

「止めて！」

私は恐怖に震えた。

今朝会った時は優しかった。

暖かった。

なのに、なんで？

空いた方の手で私の腰に手を回す。

背筋を何かが走った。

「行くな。行かないでくれ。ずっと側に……」

そこまで言っつて、アズは倒れ込んできた。

慌てて拘束の緩くなった私は、アズを抱き留める。

一体、なにがおきたのだろうか。

そう思っていると、目の前のなんともないところから、リクが現れた。

「まったく。あれくらいで凹むなんて、弱いなあ……」

リクは溜息を吐きながら床に降り立った。

私に近づくと、私の頭を撫でてくる。

もちろん、実際は撫でていないのだけれど。

「何かしたの？」

私が聞くと、リクはニッコリと笑った。

「ちよつとね。強いお酒と一緒にオウカは僕が連れて帰るって。見事に騙されるとは思ってなかったけど。さすがにオウカの所に一直線に行った時は驚いたねえ。貞操の危機は免れたでしょ」

「リク！」

私が咎める様に言うと、リクはアズに手をかざす。  
アズはふわりと浮き上がり、私の背中に寝かされた。

「そいつはね、ここ3日は丸々寝てないんだよ。もう少しで倒れる  
一歩手前かな。それまでも大分寝てなかったみたいだけど。僕の像  
の前に丁寧にお願ひしに来る奴がいるんだよねえ。オウカを預けて  
いるんだから、自己管理はしてもらわないと」  
「貴方、何者？」

神様だと名乗った少年。  
けれども、本当にそうなのかは分からない。  
いや、神様ではない。

元は人だったのかも知れない。  
リクは微笑んで、私の隣に座った。

「おかしいね。僕はオウカのことを覚えてるのに、オウカは僕のこ  
とを忘れてる。ずっと側にいるって約束してくれたのに。生まれ変  
わっちゃうと、忘れるものなのかな？」  
「生まれ、変わる？」

鼓動が早くなった気がした。  
知ってる。

私は、リクを知っている。  
でも、記憶の何処にも彼に会った記憶なんて無い。

「オウカ。どうか、この世界で幸せになってね」  
そう言った矢先にリクは消えてゆく。

「この世界って、元の世界に返してよ！」

リクは笑ってスルーしやがった。

リクの消えた部屋は静まりかえる。

アズの寝息がむかついた。

何酔わされてるんだか。

いい年こいた大人が。

いや、そんなに年は変わらないか。

「アズ……？」

呼びかけても応える気配はない。  
仕方なく、私は寝ることにした。

## 17 酔うな、馬鹿！（後書き）

感想など、お待ちしております。

活動報告にこれからの予定を書いていますので、見て頂ければと思います。

18 神話は嘘らしい？

翌日。アズは何も覚えてなかった。

私が隣に寝てた事を驚いて、何故か聞かれる。

答えるのも面倒になって、私はふて寝した。

なんで覚えてないかな？

いや、覚えていても困るか。

「オウカ、なんで俺は此処で寝ているんだ」

知るか。

自分に聞け。自分に。

私はため息をついて、アズを見上げた。

「一緒に、駄目？」

涙目で言ってみる。

別に悲しくもないけど。

単に面倒なだけだ。

「い、いや。駄目じゃあないし。むしろ大歓迎なんだけどな！？」

慌てるアズが面白い。

私は笑いを噛み殺しながら、バレたくなって俯いた。それを

泣いていると勘違いしたのか、アズはしどろもどろに私を抱き締め、背中を擦ってくる。

「ふふっ」

あ、笑っちゃった。

見上げると、アズは怪訝そうに眉をよせた。

「オウカ、笑わなかったか」

「笑う訳……くふっ」

駄目だ。

私は役者には向かない。

アズは私の顎を掴んで持ち上げる。

「……笑ってるじゃないか」

「しょうがないじゃん。面白いんだから」

あ、アズが睨んできた。

「趣味悪いぞ」

だからどうした。

騙される方が悪い。

私は一応謝りながら、ベッドからでた。

「なあ、本当に俺……」

「寝ぼけて入って来ただけだよ」

私がそう言うと、どこかほっとした様だった。

もしかして、覚えているのかな。

まあ、どっちでもいいか。

「昨日の続きを始めるわよ」

今日も魔力の訓練。

また硝子玉を渡された。

「玉の中に小さな炎を思い浮かべてみて」  
「はい」

私は硝子玉を持ち上げてイメージする。  
体の血液を通って掌に集中させる感じ。  
優しく、包み込む様に。

小さく、膨大な炎を圧縮させていく。  
考えるのは温かく、優しい光とぬくもり。  
掌が温かくなるのが分かる。  
瞼を開けると、硝子玉の中に虹色の炎があった。

「成功ね。これが魔力を込める時の基礎よ」

出来た。

少し感動した。  
綺麗な炎だと、私はまじまじ見つめた。

「今出来た基礎は、物に魔力を閉じ込めたり、凝縮することに必要なことよ。オウカの溢れてる魔力はこの応用で、押さえることが出来るの」



魔法は簡単に言えば、イメージを魔力で形にする事なんだって。呪文はただの補助に過ぎない。

イメージが細かければ細かいほど、魔法は成功し、魔力量によって大きな魔法が使える。

「次は魔力を見る練習よ。これはすぐに出来ると思うわ」

そう言って、レティアは私の手を握った。

「この手を見続けて。さっき手にイメージした様に、今度は目にイメージしてみてください」

言われた通りにする。

さほど時間をかけずして、手から光の様なものが現れた。レティアの手から赤色の光が出てきて、その光はレティアを包む。そのままキャサラを見た。

キャサラの光はオレンジ色だけど、レティアよりも強い光。

「この、光のこと？」

「そうよ。オウカは筋が良いわね。光の強さは魔力量だと思えばいいわ」

「光の色は？」

「光の色？」

オウカの質問に、レティアもキャサラも眉を顰めた。

疲れてきたから視る事を止める。

私にキャサラが紅茶を入れてくれた。

一旦休憩らしい。

「オウカ。光に色が付いているの？」

「うん。レティアは赤色でキャサラはオレンジ色……普通は見えないのかな」

「オウカ様が異界人であらせられますから、特別見えるのかも知れませんがね」

さりげないキャサラのフォローが普通は見えないのだと告げていた。

確かに、私は異界人だけど、普通は見えない。

そのことに不安感が募る。

普通じゃない。

魔力量も、存在自体さえ、この世界ではありえない。

「気にすることはないわよ。そうね。他の人はどんな色なのか見て見たらいいわ。訓練にもなるし。もしかしたら、性格を表しているのかも」

「そうかも知れませんがね。私はともかく、レティア様は情熱的な赤がお似合いですし」

気に病むな。

レティアの言いたいことも、その優しさも分かって、私は微笑んだ。

「うん。そうだね」

「今日はこれまでにして、お茶会を開きましょう。明日はもう少し基礎をするわね」

それからカーネリアを呼んで、本当にお茶会になった。

おいしいお菓子が出てきて、単純だけど、気落ちなんてしなかった。

お茶会が終わると、カーネリアとレティアは帰り、暫くして夕食

になる。

私は本を読みながら時間を潰していた。

後宮には図書室みたいな所があって、何段も積み重ねられた本棚は圧巻。

二階まであったから、暫くは暇になることはないだろう。

今読んでいるのは昔あった大きな戦争をモデルに作った話。

色々脚色しまくっているとは思うけど、アマリリスの話だ。

この本を鵜呑みにする訳ではない。

何冊も同じような本を借りたので、読み比べていこうと思ったのだ。

一冊目を読んでいるうちにお風呂の時間になって、一旦中止。

お風呂はゆっくり一人で入ることにした。

誰かに手伝ってもらうのは、さすがに恥ずかしいじゃん。

お風呂から出て髪の毛を乾かしてから、ベッドに寝ころんでもう一度本を開いた。

キャサラは微笑んで部屋の灯を少し暗くして出ていく。

私はランプを付けて読むことにした。

「アマリリスは巫女で、辺境の神殿にいたけど、王様に恋して騎士になることに決めた……かあ。なんだかありきたりな小説みたい」

って、私の状況も王道だとは思っただけだね。

「そこ、間違ってる。正確にはその時の王が彼女を王妃にする為に神殿から連れ出して、抵抗した彼女は騎士になることを選んだんだ」

「へえ。始めは無理矢理かあ」

「今まで神殿の中で生きていた彼女は戦争する世界のことを知って、王に忠誠を誓うことで闘うことを選んだ。此処にある本は本当の事なんて書いてないよ」

「ふむふむ。なるほど……って、リク！」

驚いて横を見ると、リクが私の隣で寝ころびながら本を見ていた。家では良く零とこうしていたからか、違和感全然なかった。悔しい。

「ん。昨日振り」

「今日は何しに来たの？」

半眼で睨み付ける。

余り気にしない様子で、やんわりリクは微笑んだ。

「そんな邪険にしないでよ。遊びに来ただけだから」

「遊びにつて。神様つて暇なの？」

「僕は元を正せば人間だよ。気まぐれだつて起こすさ」

そう言えばそうだった。

なんか胡散臭いんだよね。

何も無い所から現れるし。

そもそも、神様だから真面目つて訳でもない。

ギリシヤ神話の神様はなんか人間臭いし。

「つて、私を元の世界に返してよ！」

「嫌」

即答か。

私はリクに詰め寄つた。

実体があるなら、胸ぐらを掴んでいるところだ。

実体じゃないのがムカつく。

「なんで？ 連れて来たなら、元の世界に帰せるでしょ」

「嫌だから」  
「リク！」

私が怒鳴ると、リクは私に覆い被さった。  
肩を押さえつけられて痛い。  
ちよつと待って。  
実体化してる？

「前は精神体って、言ってたでしょ。ちゃんとそれなりに用意したら、日に一回くらいは実体化できるよ」

リクの顔が、首筋に埋まる。  
鋭い痛みがした。

「オウカ。愛してる。ずっと」

それだけ言うと、リクは消えてゆく。

「なんなのよ……」

私は首筋を押さえて、ただ呆然とした。

## 18 神話は嘘らしい？（後書き）

携帯から書くのが増えるので、更新が遅れます。  
家にいる時はパソコンですので、速い時は速いです）；、（

## 19 帰りたい 此処にいたい

私はドレッサーの鏡を見て、悲鳴を上げそうになった。

「まだ痕ついてるし」

ため息しか出てこない。

首にはキスマークがくつきりとなっていたのだ。

あれから丸一日がたったが、痕は残っている。

これをキャサラに知られるわけにはいかない。

チョーカーで隠したりして、ごまかしている。

虫に刺されたといつても、わかるに違いない。

首を隠す服を着たほうがいいが、着替えているときに見られるだろう。

だから仕方なく、おきてキャサラが来る前にチョーカーをつけ、服を用意している。

太めだから、すっぽりと隠れてくれた。

ほかにもキャサラに見られないようにいろいろ工夫している。

ほかの人からしてみれば、誰のものかわからない。

普通はアズによるものだと思うだろうが、アズが知ったら……。考えたくもない。

「それは何だ」

声にはじかれて、私は思わずキスマークを隠した。

もう見られているのだから、意味のないことなのだが。

扉のすぐそばに、アズが立っていた。

眉を寄せ、威圧感が出て怖い。

私はその気配に身を竦ませた。

「それは、何だ」

後ろ手で扉を閉め、アズは私に近寄ってくる。

私は露台のほうへ逃げようとしたが、アズに腕をつかまれた。それでも、私は首を押さえつけた手は離さない。

「別に、何も無いよ」

「何もなかったら、そんなものはできないだろ！」

怒鳴られて思わず身を竦ませる。

その拍子にアズは私の手首を掴んだ。

首から手はずされ、キスマークがあらわになる。

私は羞恥に顔を赤くした。

「離して！」

私は離れようともがくが、アズの手はなおも頑丈に私を押さえつける。

アズは顔をゆがめて、私をベッドまで引きずった。

この間のことが思い出され、私は抵抗するが、アズにかなうわけがない。

あっけなくベッドに押し倒された。

「誰につけられた」

「虫よ。虫。私にはずっとキャサラがいるし。そうだ。キャサラに聞けばいいじゃん。そしたら」

「オウカ！」

アズの叱責に、私は口をつぐむ。



やっぱり、虫だとは思ってもらえなかったようだ。だって、キスマークは一種の痣だから。虫特有のそれではない。

「もう一度聞く。誰につけられた」

リクのことには知っているのだろうか。

前に現れたとき、話した事もあったみたいだし。

「……リク」

私は遠慮がちに答えると、アズの顔がゆがんだ。

「それは、誰だ。兵士か、貴族か。果ては」

「リクを、知らないの？」

「そのようなものは知らない。一体、誰なんだ」

ちょっと待て。

もしかして、私はだまされた？

でも、そうじゃなきゃ、アズの行動に納得がいかないし。

胡散臭いから、会ってないってことも考えられる。

焚きつけたのが、リクではなく、ほかの人間でもありえそうだ。

知らないといわれた以上、神様です。

なんて、言えるわけがない。

「そ、それは」

どうしても言えない。

アズは私を見下ろして険しい表情をした。

そして、首筋にアズの顔が埋まる。

「つやあ……」

痛みとともに、自分のものではないような声が出た。

私はあわてて口を押さえつける。

アズはそのまま痛むその箇所を舌で舐めた。

変態か。

私は自分を心の中で叱咤しながら、アズの肩を押した。

それぐらいではびくともしないのは分かっているが、せめてもの反抗だった。

「お前は、俺のものだ」

この世界の女だったら、素直にこの言葉を喜んだらろう。

私だつてときめきはする。

アズは言葉の中にいつもいろんなことを含ませていることも、頭の隅では分かっていた。

けれども理解してはいけない。

喜んではいけない。

私は手を振り上げる。

ゴッ

鈍い音。

ああ、あくまでパーで叩いたんじゃないから。

グーに決まってるじゃん。

「私は、アズのものじゃない」

そう言い放つと、アズは酷く傷ついた表情で拘束を緩めた。

私はアズから素早く離れ、ベッドの端に移動する。

「大っ嫌い。アズなんて、大っ嫌い！」

涙があふれた。

私は、誰の物にもならない。

この世界で誰かを好きになつてはならない。

帰りたい。元の世界に。

返して。家族のところへ。

私はアズに放つた言葉で自分自身が傷ついていることに気がついた。

アズは私に手を伸ばそうとして、止める。

そのまま立ち上がると、無言で部屋を出て行った。

傷つけた。

アズの顔を見て、はっきりと分かる。

元々悪いのは許可も取らずに押し倒そうとしたアズだ。

私は何も悪いことなんてしてない。

なのに、なんでこんなに胸が苦しいの？

「ごめんなさい」

口から出るのは謝罪。

嫌われたらどうしよう。

もう、呆れられたか。

いらないと明日になったら言われるか。

出て行けといわれるかな。

そう思うと胸が苦しくなった。

冷たくあしらわれるとつらい。

そこまで思ってから、おかしいと思って微かに笑った。

可笑しいの。

だって、元の世界に戻るって今さっきまで思ってた。  
俺のものだといわれて、それを受け入れてもこの世界に帰りたくな  
くなるのが怖い。  
なのに、アズにあんな顔をされて、傷ついているなんて。

「滑稽、だよな」

何をやっているのだろう。

私は身勝手に感情を突きつけてる。

助けてくれている人を傷つけて、私も傷ついて。  
まるで道化だ。

私は自分の体を撫でた。

一人で生きると決めた。

守らなければならぬ存在が、元の世界にはある。

この体に刻み込まれたものが、何よりもの証拠。

この感情が消えればいい。

そうすれば、こんなに苦しい気持ちになることはなくなるのに。

私は真つ赤に腫れた重い瞼を開けた。  
体を起こすのがだるい。

泣きつかれて眠ったからか、体が軋む。

日はずいぶん高いようだ。

正午くらいかな。

はつきりもしない頭でそう感じる。

おかしい。

いつもなら、とつくにキヤサラが起こしに来る時間だ。

私は体を起こそうとするが、体に力が入らないことに気づいた。

右手が誰かに握られている。

そう感じてゆっくり見ると、アズが私の右手を握って眠っていた。

隈のできた顔。

昨日、私と同じように眠れなかったのだろうか。

「一週間、眠り続けていたんだよ」

優しい声がしたと思うと、リクが私の真上に浮かんでいた。

どうやら今回は精神体らしい。

「いつしゅう……かん？」

かすれた声で問うと、リクは頷いた。

私の隣に胡坐をかいて座ると、私の頬を触ろうとする。

けれども、触れられるわけがない。

「貴女はまだ不安定な状況だ。元の世界では魔力がなかったから、魂が馴染んでも、体はまだ魔力に馴染んでないんだ」

とにかく、魔力が不安定だっけ言いたいのね。

私は一週間で眠っていたのは信じられなかったが、喉の痛みが何よりの証拠だった。

あまり喋らない方が良く、リクは言った。

「感情のブレが魔力のブレにつながった。簡単に言うと、感情が高ぶると魔力が不安定になっちゃうんだよね。それに体が耐え切れなくて、一週間も眠っていたって訳」

私が見上げていると、不意に右手を握っている手に力が入った。

「オウ……カ……」

アズがおきる。

やばい。

リクは見られても大丈夫か。

リクを見ると、彼は大丈夫だとも言いた気に微笑んだ。

「あ、ず」

私が呼ぶと、アズは目を見開いて、私の顔を覗き込んだ。

「オウカ！」

その顔はうれしそうで。

少しやつれていた。

「うん。よかった。じゃあ、僕は帰るから。王様も養生しなよ」

そう言いながら、リクは消えていった。

一体、あいつはなんなのだろう。

アズに養生しろっていったことは、アズも体調を崩しているということか。

しかも、また誰かに頼まれたみたいな感じだ。

どうやら、リクとアズは知り合いらしく、リクのことを咎めはしない。

「俺が悪かった。リクは、さっきの奴のことだったんだな。名前を聞いてなかったから、分からなくてな。つらい思いをさせて、すまない」

私は微笑んで、アズの手を握った。

「私もごめんなさい。大嫌いなんて言うって」

とりあえずは、これで解決かな。

だんだん帰るのが怖くなってきている。

心の中で芽生えた感情を押し隠して、私は笑った。

20 愛してる。誰よりも。

「馬鹿じゃん」

オウカに拒絶されてから、俺は自室で酒を呷った。

不意に現れたのはこの間現れた少年だ。

名乗り出さないが、害は無いらしい。

人では無いらしいし、雰囲気がおウカとどこことなく似ている。

俺が追い出そうとしないからか、俺だけの時はよく現れる。

酒を飲まされて、オウカの部屋で目覚めた時は驚いたが。

「醜い嫉妬だねえ」

「……………うるさい」

俺が睨み付けると、少年は肩を竦めた。

「君にはオウカを留めておく為の部品として、期待しているんだからさあ。嫌われる様な行動は止めるよ。本当に」

「留めておく為の部品……………?」

俺が首を傾げると、少年は頷いた。

本当に精神体なのか分からなくなるくらい、はっきりとした歩行で歩き回る。

顎に手をあて、考える素振りをした。

「そつだよ。はっきり言えば、力の使い方さえ分かればオウカは自力で帰れる。でも、こつちの世界から離れられない存在を作ってしまったえば、元の世界に帰ろうなんて思わないでしょ。その中でも、君は有力候補って訳」



無邪気な顔して何言いやがる。

俺がこいつをなにより敵視しないのは、こいつはオウカをこの世界に留めておこうとするからだ。

それを抜きにしたら、全く信用していない。

「嫌われたみたいだがな」

「頑張ってくれよ」

少年は俺の背を叩いた。

実際には、風が吹いたくらいなのだが。

人の気も知らずに。

恨めしげに少年をみると、少年は目を細めて、テラスに向かっていた。

窓越しに、空を見上げてる。

「桜華はこの世界で、幸せになって欲しい。苦しみも忘れて」

「苦しみ？」

俺は首をかしげた。

オウカがどんな生活してきたなど、聞いたこともない。

いや、元の世界の話すらしたことがないな。

だが、オウカを取り巻く世界はなんとなく分かった。

この世界のように戦争がなく、上級階級の教育を受けてきたであろう仕草。

ふと見せる暗い影。

「彼女はね、両親から虐待されていたんだよ」

少年の言った言葉に、俺は目を見開く。

少年の瞳は嘘をついていない。  
幸せに暮らしてきたかのように微笑むオウカが。  
大切に育てられたのだらうと思っていた。

「父親と母親。そして弟の四人でそれは仲のいい家族だったさ。  
弟が死ぬまではね」

少年は悲しげに微笑んだ。  
オウカの口から聞くのは憚れる内容。  
少年は目を伏せた。

「弟の死因は両親の虐待。まあ、揉み消されたけどね。そして、オウカにまで虐待は始まり、ついにオウカは心が壊れた。弟が生きているなんて言う妄想を抱くほどに。そうしなければ、心を保つなんて無理だった」

気丈なオウカからは想像もできない過去。  
本当にそうなのか判断しかねる。

「弟の名前は零。彼女が元の世界に帰りたがっているのは、いるはずもない弟に会いたいからさ」

本当なら。  
本当なら、オウカを元の世界に返す等、できるわけがない。  
真実を受け止められなかったら。  
絶望のふちに立たされていたら。

れい。だいすきい。

いつか、彼女が寝言でそう言っていたのを思い出す。

寝汗をかき、うなされていた。  
抱き寄せると、そう呟き『零』に対して必ず帰ると決心していた。  
彼女の中では、零はまだ生きている。

まだ、オウカは子供である。

そんなことを、レティアが言っていた。

弟が生きていたときのまま、心がとまっているのなら、オウカは子供だ。

強制されれば逃げたくなる。

子供特有の感情。

俺の考えを見透かしたように、少年は目を細めた。

「桜華は弟が死んだ五年前から、感情さえ止まってしまっている。

それが、此処に来てから、ようやく動き出そうとしているんだ。元の世界に戻れば、人形に逆戻り。桜華の人格さえ壊れてしまう。だから、君が必要なんだよ。この世界に引き止めるにも、保護をするにも、君以上安心して任せられるところはない。時々しか実体化できない僕とは違う」

「お前は、何者なんだ？」

少年がそこまでオウカに肩入れする理由が見つからない。

それほどの魔力を持ちながら、やろうとも思えば俺など何時でも殺せるはずなのに。

少年は丁寧な礼をとる。

貴族がする様な礼は、恭しく、しかし傲慢なところがない。

「僕の名はヘリクリサム。彼女にはリクって呼ばせてる。もっとも、向こうの世界じゃあ、零って呼ばれていたけど」

リク。

その名に聞き覚えがある。

そもそも、オウカとの喧嘩の発端は「リク」だったはずだ。

こいつがリクだったのか。

ヘリクリサム。

そういえば、以前にオウカが俺に知っているかどうか聞いてきたことがあった。

なるほど。こいつに会った後だったからか。

「神が、オウカの弟に転生していたのか」

「僕は神なんて言われているけど、元を正せばただの人間さ。『零』であった時は記憶はなかったけどね。死ぬ直前で覚醒して、魂を肉体から引き離れた。正確に言えば、未練によって世界にとどまったのさ。ああ、オウカに恋愛感情はないから安心して。あのキスマークも警告だし。まあ……」

小さく何かを呟いていたが、俺には聞こえなかった。

信じ切れなくて、俺は目を細める。

「証拠は？」

「うーん、オウカの好きな小説のタイトル全部言えるし、オウカの好きだった場所も知ってる。食べ物好みもちろん、後は僕の誕生日には毎年ぬいぐるみを渡してたってこととか」

「もう、いい」

俺はうんざりする。

仮にも男にぬいぐるみってどうだ。

このまま放置していたら、余計なことまで聞きそうになるから、話題を変えた。

「何故、名乗り出ない」

俺が問いかけると、リクは首を振った。  
無理だと言いたげに、苦しげに。

「彼女の中では『零』は生きている。僕の存在を認められると思う？」

オウカの中ではすでにリクはリクとして確立されている。  
姿を変えて会うことはたやすいが、それは同時に『零』の死を認めさせることになる。

今度こそ、壊れる可能性がある。

リクの言動は一環としていて、「オウカを元の世界に戻らせないこと」だ。

信用するにも足りるくらいの理由で、嘘をついている様子もない。

「……一先ずは、お前を信用しよう」

「物分りの良い王様で助かるよ」

俺は不意にオウカの部屋へ視線を移す。

まだ泣いているのだろうか。

俺は目を細め 瞠目した。

オウカの魔力に激しいブレが生じていた。

リクも気づいたようで、オウカの部屋へと続く扉を勢い良く開ける。  
る。

ベッドに倒れていたオウカは玉のような汗をかき、身をよじっていた。  
いた。

「オウカ！」

俺はオウカを抱き起こして呼びかけるが、返事がない。

意識が朦朧としているようだ。  
医者と呼ばうとした俺よりも早く、リクはオウカの額に手を当てた。

「感情のブレが魔力に影響している。このままじゃあ、体が保たない」

「どうすればいい」

俺はリクを見る。

リクは俺を試すように見てきた。

「桜華の波長にあわせて魔力を送れ。目覚めるまでは必要だね」

俺は言われたとおり、魔力を送り続けた。

微量で良いらしく、あまり多いと波長が乱れる。

昼間は安定していたから、レティアに任せた。

夜は眠らず、魔力を送り続けた。

そんな状態が一週間、続いた。

俺はふと疲れで眠りについていた。

その間にオウカは目覚めたらしい。

「あ、」  
「ず」

かすれた声。

しかし、俺を心配しているのは分かった。

手放したくない。

守りたい。

心を俺のものにして、離れないようにしたい。

心が俺で満たされるように。

何度も心の中でささやいた。

彼女の頬を撫で、優しくいたわる。

この気持ちを、受け止めてほしい。

帰れなくなるくらい、俺がその心を占領できるように。

愛してる。誰よりも。

20 愛してる。誰よりも。(後書き)

いつも「愛読、ありがとう」です。



## 21 もうほぼ後宮掌握しています

私はアマリスの庭で頭を抱えていた。

基礎は大体できた。

でも、問題が発生。

ただの魔力放出ならできる。

なのに、肝心の魔法が使えない。

基礎を見ればできるとは思っただが、誰に教わっても、うまくなる気配はない。

「イメージはあるんだけどなあ」

私の魔力量なら、呪文は要らない。

試しに唱えてもみたが、できなかった。

「何がいけないんだろう」

アマリスの像を見上げる。

ガゼボではキャサラとレティアがお茶の用意をしている。

ノイル君は最近勉強で忙しいんだって。

子供なのにかわいそう。

リクともしばらく会ってないし、アズも夜遅くに帰ってくる。

正直、つまんない。「そういえば、唄みたいな呪文を唱えてる小説なかったっけ」

オラトリオ  
聖唱歌みたいなの。

こっちで使われている呪文は文章みたいなのだし。

でも、唄うのは恥ずかしく感じた。

自分で考えているみたいで恥ずかしいじゃん。

「オウカあー。準備ができたわよあ！」

レティアの声に振り向く。

「はいはい」

今日のお菓子はアップルパイもどき。

こつちの世界のお菓子は元の世界のお菓子とよく似ている。いや、味覚が日本人と似ているのだ。い

だから、私は好き嫌いなく、美味しく食べられる。

これ程感謝するべきことはないだろう。紅茶を飲みながら、私はパイを美味しく頬張った。私

「そう言えば、オウカの世界の教育体制はどうだったの？」

「へ？」

いきなりの質問に目を瞬かせる。

明らかにレティアらしくない質問だ。

レティアは慌てて笑う。

「ふ、深い意味は無いわ」

「アグロ様が呟いた？」

レティアが破顔する。

「凶星か。」

アグロとレティアの接点が見つからなくて、私は首を捻った。

アグロは宰相だ。

貴族でもない私に教養があるから、私の世界の教育体制が気になるのも分かる。

でも、何故レティアとアグロなのか。  
全く分らない。

すると、隣でキャサラが笑った。

「レティア様とアグロ様、それに陛下やレキ様は幼少の頃より大層仲がよろしくて」

「キャサラ！」

レティアが顔を真っ赤にしながら、立ち上がった。

キャサラは笑みを崩さずに笑う。

キャサラの言い方では、その様子を見ていたのだろう。

「ふうん。どんな遊びしてたの？」

ただ遊んでいた訳じゃないのは明白だ。

だって男の中にレティア。

どう見ても、一緒に駆け回るイメージしかない。

「木登りは日常茶飯事でした。それに城から脱走や侍女に対する嫌がらせとか」

思い出したのかキャサラは頬に手を当て、溜め息をつく。

「って、あんた本当に何歳なのよ。」

聞くのも怖くて、私は身震いする。

「キャサラも混ぜたってたじゃない」

「あれは混ぜたってたとは言いません。見ていたと言つのです」

黒い。笑みが黒すぎる。

私は紅茶を飲んで、気を紛らわした。

そこへ、誰かが近寄って来た。

「オウカ様。ちょうど良いところに」  
「ダルフィ？」

結構ご無沙汰していた、アズの騎士でレキの相方が近寄って来る。確か、最初の方に一瞬だけ会っていたはずだ。

私の記憶力すげえ。

ダルフィは丁寧に一礼した。

「たった一度しかお会いしていないのに、覚えていただいで光栄です」

「私に何か用？」

私が声をかけると、ダルフィは顔を上げた。

「はい。オウカ様を御披露目する為、3日後夜会が開かれます」  
「………は？」

キヤサラ達の黄色い声とは反対に、私の目は点になった。

いやいや。待て待て。

夜会が良い。

私の御披露目ってなんだ。

「え、どうして」

「オウカ様を王妃として紹介するなら、夜会が一番手っ取り早いでしょう」

「いや、そっじゃなくて！」

私は頭を抱える。

なんか取り返しのつかない道に進んでいる気が………。

「私は………！」

偽りの王妃なのに。

言いかけた言葉を飲み込んだ。

キヤサラはともかく、レティアの前では言えない。

実は偽りの王妃だったなんて、信じてくれているレティアの前で  
言える訳がない。

「私は？」

ダルフィは首を傾げた。

こんにやろう。

分かって言ってやがる。

アズが直接言いに来ないのも、私の怒りを予想したからか。

「………私のドレスはどうするの？」

「まあ！ 今からご用意致しましょう。失礼致します」

キヤサラは頭を下げ、足早に去って行く。

間に合うの？

間に合わないことを祈ってます。

それはもう、是非にでも。

「アズはどこ？」

笑みを崩さずに言ったつもりだったが、レティアが後退った。  
対するダルフィも平然と返してくる。

「只今会議でして」

「いつ終わる？」

「それまでは………」

覚えてろよアズ。

私は復讐を誓いながら、溜め息を吐いた。

アズの悲鳴はその日深夜に上がったと言う。

もっとも、王妃よりアズに知られない様、皆には伝えられていたから、誰もが聞かないふりをしたらしい。

最近の私のネットワークなめんなよ。

## 21 もうほぼ後宮掌握しています（後書き）

携帯からなので、短くなります。

パソコンより四倍以上時間がかかるので……………。

携帯早打ち出来る人すげえ

## 22 掌握完了

「オウカ様、赤はいかがでしょうか」

「それとも、紫なんて」

「薄いピンクもありますしい」

「うーん。白と水色も捨てがたいですね」

私の近くに集まるドレス、ドレス、ドレス。  
うざってえ。

なんでこんなことになっているのか？

アズだ。アズのせいだ。それ以外にない。

奴をどうしようか。

縛り上げるなんて定番しねえ。

地獄を見せてやるよ。地獄を。

えー、ただいま夜会のドレス選び中。

ーから作るのはさすがに無理らしい。

むしろ、無理で良かったんだけど。

あるものをアレンジすることになった。

キャサラと侍女達が嬉々としてドレス選びに夢中だ。

「オウカ様！」

「ん〜。任せるから」

つてか、普段仲の悪い侍女達が、こういつ時息ピッタリになるのはある意味恐怖だ。

なんか色々諦めた。

アズは現れないし。

責任者出てこいやあああああああ！



うふふ。アズめ。今度現れた時、覚悟しろよ。

「オウカ様、人生に一度のイベントですよ。真剣にしてくださいまし」

窘められて、私は溜め息を吐いた。

いや、だってさあ。人生に一度って事は、アズにしたら帰らせる気ゼロだし。

大体の侍女さん達は知らないにしても……。

うん。最大の敵はやっぱりアズだな。

「少し休憩にしましょう」

キャサラの指示に侍女達はドレスを持って部屋を移動して行く。

キャサラは私に微笑みかけながら、一礼した。

「一刻後に再開致しますので、ゆっくりしてください」

「……しばらく一人にさせてくれる？」

私の意志を尊重して、キャサラは出て行く。

それを見送った後、私は溜め息を吐いて、露台に出てみた。

日はすでに傾き始めている。

一日って早いもんだなあ。

なんて、感慨にふけっていると、一陣の風が吹く。

この風も、空も、元の世界と変わらない。

思い出すのは弟の顔。

「れ、い……」

弟の名前を呼ぶ。

答えが帰ってくるはずがないと思う。  
そこで生まれる既視観。  
あれ、なんで答えが返ってこないんだっけ。  
あ、違う世界にいるもんね。当たり前か。  
そこで再度生まれる既視観。

「違う……」

私は口元に手を当てる。  
何かを忘れている。  
大切な何か。  
ないていた。とても、大切な何か。

姉さん、ごめんね

思い出すのはボロボロの、悲しげな表情を浮かべた彼。  
何で彼はないたのか。  
いつも私に助けを求めていた弟は、そのときばかりは違っていた。  
大人びていて、すべてを見透かしたような目で。

私は、何かを忘れている。

「オウカ」

私はハツとして後ろを振り向いた。  
そこにはアズがいて。  
私を後ろから抱きしめる。

「どうした。疲れたか」

私の頬を撫でる手が暖かい。  
泣きそうになるくらい心が温かくなる。  
私は笑うことでそれを隠した。

「うっん。 強いて言えば、どこかの誰かさんが余計なことをしようとして、私が被害を被っているってことかしら」

「お前！ 最後は承諾してくれただろう」

「そうだったかな。アズの泣きっ面は見た気はするけど」  
「この、悪魔め！」

アズは半泣きで部屋に戻っていく。  
私は笑いながらその後を追った。

まもなくしてドレス選びが再開されるが、アズが一瞬で決めてしまい、お開きとなった。

侍女たちのアズに対する視線が冷ややかで。  
そうですよね。もっと私で遊びたかったですよね。  
侍女たちが去った後、心なしかアズはぐったりとしていた。

「何なんだ。あいつ等は……」  
「アズって不憫な役回り多いねえ」

思わず同情してしまう。  
アズはさらに肩を落とした。  
男の威厳形無しである。

長いすに二人並んで座り、私の髪をアズは撫でた。  
優しく撫でてくるアズに、思わず胸が高鳴る。  
アズは熱いまなざしで私を見てきて、私の頬に手を滑らせた。  
頭の中で警鐘がなる。  
早く逃げないと。

この腕から逃げられなくなる前に。  
此処にいたいと思ってしまう前に。

「オウカ」

「オウカ！ 大丈夫ですかっ」

あ、アズが脱力した。

私も思わぬ乱入者に苦笑した。

乱入者、もといレティアはアズを跳ね除けて私に近づく。

アズは放置だ。放置で良い。

「獣に襲われていないか、私心配で心配で」

美人が度迫力で迫ってくると、一種の恐怖だよな。

私は大丈夫だと笑って見せる。

「レティア。邪魔を……」

「うるさい。黙りなさい」

仮にもアズって王様だよな。

いいの？ そんな事言っつて。

いや、レティアだから大丈夫なんだろうなあ。

「それより、頼んでいたものはできた？」

「もちろんです！」

私の問いかけに、レティアはこぶしを握る。

その手にはブラックボックス。

もちろん。侍女たちが作ったものだ。

それを理解していないアズ。

かわいいそうに。

「アズに仕返し第一弾」

私とレティアのハモリに、アズは頬を引くつかせる。  
逃がすわけないよ。

ええ。そりゃあもう。

根回しは完璧。

侍女たちがすっかり外側からロツク

兵士たちも気づかないふりをしてくれる。

「くつ。貴様ら、誰が主君だ！」

後宮では、王妃が天下なのはご存知でしょうか。

私とレティアは黒い笑みを漏らす。

その後、後宮に悲鳴が上がったのは言うまでもない。  
とりあえず、後宮は掌握完了かな？

## 22 掌握完了(後書き)

箱の中身は……？

読者様のご想像にお任せします。

### 23 夜会の始まり始まり

うん。疲れた。

何でふんだんに化粧して、コルセットをぎゅぎゅぎゅ内臓出るくらいに締められなきゃならん。

小説のお姫様ってすごい人たちばかりだったんだな。なんて、いまさら思っても時はすでに遅し。

隊長。私はもう駄目かも知れません。

「オウカ様。視線を合わせて下さい」

キャサラの言葉がきついです。はい。

私は姿勢を伸ばして視線を合わせる。

鏡の前に移る私。

夜会用の衣装に着替え、髪の毛もフワフワさせ、装飾も施されていた。

装飾の一つ一つには微力ながら魔力を抑えるものが含まれており、躰にある程度負荷がかかっている。

鏡の前に立つと、自分かどうか怪しくなる様な姿だ。

侍女達はやり遂げた様な顔をして立っていた。

「十分素敵です」

「花の精の様です」

「それを言うなら、水の精みたいです」

侍女達のむず痒い賞賛を受け、キャサラが私の前で一礼した。

「既にあとは貴女だけでございます」

「ねえ、やっぱり裏口からこそつとはいるのは駄目？」

私は冷や汗ものながら、ほほえみかけて頼む。  
この頼み方は何度もしているのだ。

目立ちたくない。

ひっそりと暮らしたい。

つてか、お披露目なんていらないでしょ。

仮の王妃なんだし。

だが、それはどうやら許されないらしい。

「……仕方ありません。良いでしょう」

侍女達から非難の声が上がる。

それを視線だけで抑え、私を案内してくれた。

内部構造をまだ把握しきれしていないから、キャサラが案内してくれなければ迷ってしまうところだ。

「ねえ。これって本当に裏口？」

「左様でございます」

案内されたのは美しい彫刻が成された扉。

白い扉にはまるでヨーロッパの彫刻の様だ。

中から音楽も聞こえてくる。

「では、いつてらっしゃいませ」

キャサラは付いてこない。

そりゃあ、専属とはいえ侍女と一緒にだとおかしいよね。

私は溜息を吐きながら扉を潜る。

そこはホールよりも一階ほど上だった。



ちよつと待て。

ホール中にいた人の視線が私に集まる。

「きゃ、キャサラさん？」

既に閉められたはずの扉を振り向く。

は、嵌められたああああ！

「オウカ様。頑張つて下さいね」

うわあ。

扉を隔ててもキャサラの黒い笑みが見えるようです。

これは、覚悟を決めるしかないのか。

私は顎を引いて、背筋を伸ばした。

出来るだけ臉を伏せがちに、かといっては下を向かない。

姿勢を正して、こけない様に馴れないヒールで歩きながら手すりをもつ。

イメージはある小説の少女。

田舎から貴族と恋に落ちた少女の話だったな。

けれど、その小説の描写は私に納得させるぐらい、少女の気高さ  
とけなげさ。

何より少女の度胸が気に入っていて、何度も呼んだ。

礼儀作法は習っているから、その通りに歩き始める。

向けられるのは黒髪黒目という私に対する好奇と侮蔑、そして畏  
怖。

階段を下り、開けられた中央のスペースに立つ。

視線をあげれば、真っ正面の少し高い弾の所にアズが座っていた。

その隣の席は空いている。

私は頭を下げ、左手を胸に、右手で服をつまんで一礼した。

これは「貴方に忠誠を」という意味のこの世界独特の一礼で、貴

族女子の一般的な一礼らしい。

アズが片手をあげると音楽は再開され、私は顔を上げた。  
アズも、私を見ていた。

どうやら、私のお披露目だとは知られておらず、貴族は皆、ただの夜会だと想っている様だ。

アズも下に降りてきて、貴族達と言葉をかわしている。

その周りに群がっているのは、女、女、女。

いや、別に嫉妬している訳ではない。

断じて違う。

むかつきはするが、断じて違う。

私は壁の華を決め込み、その様子を見ていた。

「陛下の所に行かないのですか」

グラスが渡され、見て見るとアグロがいた。

私はアグロを睨み、グラスを受け取る。

「別に。って、この夜会は私のお披露目と全然関係ないじゃないですか」

嘘でまかせを言われた挙げ句に引つ張り出されるとは想っても見

なかった。

アグロはそれに肩を竦める。

「私は貴女に地位を確立して欲しいのですが、陛下がまだだと。しかし、そう言わなければ貴女は出席されませんでしたでしょうか？」

確かにその通りだ。

そんな面倒なこと、誰がするものか。

すでに私が王妃だと公表した後なら、とっとと病に伏せているなんて嘘で欠席したのに。

アズはお見通しだった様だ。

糞。へたれ陛下のくせに。

アグロは微笑みながら、レティアの存在を見つけた様で、同時にレティアも私に近づいてきた。

「オウカ！ 見違えたわね。綺麗よ」

いえいえいえいえ！

そう言う貴女の方が綺麗ですから。

レティアに相応しい赤色のドレス。

豊満な胸に、私よりもくびれた躰のライン。

コサージュがちりばめられ、剣を持っているイメージが強い為、本来あるべき彼女の姿に見とれる。

「レティア、綺麗……」

駄目だ。

本当にいけない道に進みそう。

私の周りに美男美女がいるからいけないのだ。

きつとそうだ！

「オウカ。貴女気付いてますの？」

「へ、なにが？」

レティアの質問に私は首を傾げる。

それを見て、レティアとアグロは顔を見合わせ、溜息を吐いた。

「これは、アズが苦勞するわね」

なんでアズが苦勞するんだらう。

私の頭の中は疑問符だらけだ。

「それよりも、二人とも踊って来なよ。私は此処にいるから」

曲調は既に変わっており、中央で男女が踊り始めている。

もちろん、アズも。

二人はもう一度顔を見合わせ、肩を竦めた。

「わかりました。踊って頂けますか。レティア様」

「ええ。もちろん」

うわー。

二人並んでいると凄い絵になる。

綺麗って言うか、別世界。

レティアは一度だけ振り向いて、私に言い聞かせた。

「良いこと？ アズが来るまでは誰とも踊らないことね。それから、あんまりしつこい男が言い寄ってきたら、レキが壇上近くに控えているから、救いを求めなさい」

「うん。ありがとう」

たぶん、私に言い寄ってくる男なんていないだろうけど。本当に分かってしているのか、なんて言いたげな顔をしてきて分かってるって。

分かってますー。

レティアは溜息を吐いて、アグロと踊りに行った。

私は壁にもたれて、空になったグラスと近くのテーブルに置く。私だけ置いてけぼりにされた様な感じ。

でも、私にはこの世界はあまりにも身分が違いすぎる。見ているだけで十分だった。

「憂いた顔も、美しいですね」

そこに、一人の男が話しかけてきた。

23 夜会の始まり始まり (後書き)

「愛読、ありがとうございます。」

## 24 誰が惚れるか

「私はブルグ・デイ・アスフィリトと申します」

「は、初めまして。オウカと申します」

私に声をかけてきた人は茶色がかった赤色の髪をしていた。

瞳はアクアマリンみたいな色で、年齢は30歳前後か。

す、すごいダンディーな人だよ！

私は微笑みながらも内心パニック状態だ。

「噂の姫君とはかねがね。噂よりも美しい」

その言葉は嫌味たらしくなく、素直に褒めている様だった。

あんまり褒められていない私は、頬を染め（だって生粋の日本人ですもん！）微笑む。

「どのような噂かは存じ上げませんが、お会いできて嬉しゅうございます。アスフィリト伯爵」

ミドルネームに『デイ』がつくものは正当な伯爵家の当主ということだ。

ちなみに次期当主だと『リュ』になる。

うん。雑学だね。

でも、そう言う雑学いっぱいキャサラから教えてもらったよ！

「異界の姫君という噂は本当のようですね。何でも、陛下が一目惚れで了承するまで軟禁したとか。確かに、そうしてしまうほど、貴女には不思議な雰囲気がある」

うわ。そんなのが流れてんの。

あながち嘘ではないケド、ちょっとそれは……。

「この世界には黒髪はいらっしゃらないのですか？」

「そうですね。北の方にはそれらしき方もおられるそうですが、貴女のように白い肌はしていません」

「でも、私が混血だとしたら？」

私の仮定に、アスフィリト伯爵は首を振った。

遺伝的なものや気候、生活環境だって変われば、私みたいな者がいてもおかしくはないはずだけど。

「確かに、彼等と婚姻を結ぶ者もいますが、血は反発し合う様でして……必ず黒い髪を持つ者は黒い肌を持ちます」

「それ以外にはありえない。と？」

「そういうことですね」

私は顔を顰めた。

遣伝子が受け継がれない理由があるのだろうが、此処は魔法の存在する世界。

元いた世界とは基礎が違いすぎる。

「難しい話は止めましょう。貴女は実に聡明な方だ。また、いずれお会いしたいものです」

そう言っただけは去って行った。

意味深な事を言うものだ。

私は目を細める。

まあ、誰だって良いか。



面白いことを聞いた。

私は元の世界では現国と生物が好きだった。

特に、人間の遺伝子については。

調べるなら、問題はないだろうが、考えた通りの本を探し出せるかは微妙だ。

私は口元を歪め、退屈しないですみそうだと、笑う。

「笑顔が恐ろしいことになっているぞ」

「……いひゃい」

いつの間にか近づいていたアズが私の頬をつねった。

もちろん叩き落としたかったけど、止めた。

お嬢様方の視線が痛々しいほど強烈すぎて。

「アスファイリト伯爵と何を話していた？」

「この世界の遺伝子情報についてかな」

「はあ？」

どうやらアズには分からなかった様だ。

いや、此処でこんな話をしているのもおかしいのか。

「ほら、あつちで踊って欲しくてウズウズしてるお嬢様方がいらっしやるよ」

「たわけ。俺はお前以外とは踊らない」

「残念。私がダンス出来ると思う？」

アズの言葉はスルーだ。

本気に捕らえるものではない。

しかし、私は踊れない訳ではない。

見たところ元いた世界と同じ感じだし、ワルツっぽい。

踊れと言われたなら踊れたらう。  
踊れない。

言外にそう含ませておいた方が、面倒事にならなくて済みそうだ。  
「聞いたかったんだけど、現在の私の立ち位置ってどうなってるの？」

「有力な王妃候補、とはなってる。お前が頷いてくれたらすぐに王妃にさせてやれるがな」

私は肩を竦めた。

地位はいらない。

元の世界に帰ればいいのだから、王妃にならなくて良い。

契約はどうなるかと言えば、アズは帰らせない様になっているのだから、おあいこだろう。

最近リクと二人で離しているのを見る。

口話術で読み取っても断片しか聞き取れないが、アズは私を帰らせない様にリクと手を組んだ様だ。

それを打破する術は今のところはないが、この国の文字を覚えて早いこと見つけないと。

え、法律の本はどうやって読んだかって？

キャサラに読んでもらってひたすら日本語で違う本に書き写しましたよ。

おかげで時間かかりましたし。

記憶能力はあったから、そこからは問題ないし。

日本の憲法と似ているところいっぱいあったし。

日本の憲法は高校でならったしね。

おっと、話はずれすぎた。

「この夜会の意義は？」

「親睦会だな。名目上は。本当はこの夜会でお前を王妃として紹介

するはずだったんだ」

現在王妃候補で留まってくれているのは、アズの心配りからか。かといってアズを好きになる訳ではないけれど。

そう言えば、アグロも同じようなことを言っていたっけ。

「あんた王様でしょ。早く貴族のお嬢様方の相手をしてきなよ」

「お前と一緒に付いてきてくれるなら、良いが？」

ちよつと。性格変わってない？

私はアズを睨み付けた。

MがSに切り替えんなよ。

「勝手にほざいてろ」

「お前、言葉遣い悪くなったよな」

「あら、本当はもっと汚いよ。元の世界じゃあ、男に間違われるくらいだし」

レディース（古い）張れるんじゃないかって、同級生にはよく言われた。

手も喧嘩も速かったし、合気道やら柔道とかのおかげで向かうところ敵無しだった。

守られるよりも守るがわ。

元の世界の私の立ち位置だった。

ちなみに全て小声です。

アズにしか聞こえないよ？

だって、こんな言葉遣いを聞かれる訳にはいかないし。

「まあ、上手いものでも食べて、楽しめばいい。そのうち惚れさせる」

そう言って私の頭を一撫でして元の所に戻っていく。  
くそう。微笑みかけやがって。  
美形だから思わず胸がきゅんってなるのは仕方ない。  
私は頬に手を当てて、顔が熱くないか確かめる。

「……………誰が惚れるか」

そう呟いてしまうのは、せめてもの抵抗だった。

## 24 誰が惚れるか（後書き）

だんだん口調がきつくなる主人公……（、へ、；）  
ここから女らしさが消えていくかも知れませんが、生暖かい目で見てやって下さい>（「——）<

25 お嬢様VS私(前書き)

短いです

## 25 お嬢様vs私

料理を楽しんでいる私に、貴族のお嬢様方が近づいてきた。食べ方はちゃんとしているはず。

立食だけど、床には零してないし、チヨットずつ食べてるし。

これはさんざんキャサラから注意されたことだ。

大食らいじゃないし、コルセットだからそんなに食べられないからいいけど。

「少しよろしいかしら」

なんか、レティアの初対面を思い出させる様な嫌味っぷりだな。

なんだ。負けないぞ。

背に腹は代えられない。

ここで負ければ明日からの生活も困るというものだ。

……いや、そんなことにはならないと思うが、アグロらへんが嫌味を言つてきそつだ。

「貴女、王妃候補筆頭って本当かしら」

「そつみたいですね」

「あのレティア王女を騎士につけたとか」

「レティア様が志願されましたので」

「陛下と夜を過ごしているとか」

「うん。最近の仕事で帰ってきてませんけどね」

最後のは肯定とも取れる言葉だったが、実際に同じベッドで寝起きしているのだから間違つてはいないだろう。うん。

そつという関係にはなつてないけど。

お嬢様方は途端に顔を赤くされた。

「嫁入り前だというのに破廉恥な」

「そうですね。先程も親しそうに陛下から……」

「平民に違いないのに私達よりも……」

小鳥のさえずりにしか聞こえないね。

うん。可愛いもんだ。

私は食器を置き、一人のお嬢様の前に立つ。

ある劇場の紳士役を好きな子がいて、よく真似をさせられたものだ。

今がドレスで申し訳ないが、これでも使い道はある。

小首を傾げ、笑いかける。

自慢ではないが、平凡な顔立ちの自信はある。

だからこそ、心同士のぶつかり合いが可能なのだ。

私の笑顔を見て、そのお嬢様はたじろいだ。

「要は、私にこの城を去れと？」

「そ、そうよ。貴女なんて、陛下の隣に相応しいとは思えないわ」

「平民は平民らしくですか……ふふ。寝言は寝て言え」

私の言葉にお嬢様は顔を真っ赤に染めながら後ずさる。

女の子なんてね、恐くないんだよ。

守られることが当たり前の小娘共（いや、私も小娘なんだけど）

に、負けるつもりはない。

胸を張って言える。

身分を盾に迫るのは自分の価値を下げること。

自分が弱いと言っことを認めているのだと。

それを、このお嬢様方は知ろうともしない。

それは酷く悲しくて、可哀想なことだと思う。

見れば自分と同じか、それ以上年上か（キャサラとレティアを基



準として）。

私は口許をつり上げた。

「貴族、王族に生まれたから自分は選ばれている。そんな事は思わない方が良いでしょう。あなた方が此処に立って生きていられるのは、貴女方の祖先の方々が死にもものぐるいで勝ち取った地位。だから、貴女方は家名に誇りがあるのでしょうか？ 何の努力も外のことも知ろうともしない。それは、家名に泥を塗るのも同じではないでしょうか。女性だから家にいる。女性だから弱く質素で 糞食らえですね。そんな制度は私のいた世界では何十年も前に廃止されています。女性だからこそ、出来ることも数多くあるのだと思いますけれど」

な、長台詞だったわ。

私は不適に笑ってみせる。

それが気に障ったのだろう。

お嬢様方の目つきが釣りあがった。

しかし、それに負ける私ではない。

「な！ 貴女に何が分かるというのですの。大体、私達の何処が

「貴女様の立ち振る舞いからしても、貴女様が何をせずとも全てを手に入れてきたことなど一目瞭然。ですが、そう出来たのは貴女様の功績ではなく、祖先の功績……基、貴女様は何もしてやいない」

「そんなこと……」

「では、領民の為に何かしましたか？ 歴史書を借りたり、街の情勢を聞いたりもしましたが、地方によつては食べ物に困る子供もいるそうですね。その子供達に援助をしたことは？」

私の目は目の前のお嬢様を捕らえている。

既に網にかかったも同然。

こつちだつて伊達に社交界に出席していない。

ユニ フには毎年お小遣いの四分の一を寄付していた。

自分の着られなくなつた服は勿体なくて雑巾になるまで使つた。

それは小さな事だつた。

でも、はつきりと言える。

元々お嬢様であつても、私と貴女は違ふのだと。

お嬢様はこれ以上言つても言い返されると分かつているからか、

もしくは凶星からか、手が震えるほど扇を強く握りしめ、爛々と私を睨み付けた。

「この」

お嬢様が何かを言いかけた時だつた。

始めに感じたのは肌の違和感。

次に感じたのは空気の振動。

「これは」

私は目を見開いた。

## 26 愛し、愛されたい

「これは……」

私は思わず窓に近づく。

外はもう暗く、空には星が輝いていた。

お嬢様方は私の行動がよく分からなかったみたい。

「こちらを向け」だの「無礼だ」なんて言っているんだけど……どっちが無礼なんだか。

私は空から感じる魔力を見逃さない様に、必死に目で追っていた。

「まさか……」

直感に限りなく近い。

しかし、当たっているのだと確信出来る。

全ての物に魔力が宿っている レティアはそう教えてくれた。人は比較的魔力が繊細だから魔力を感じる事が出来るのだとも。今、私が感じているのは、この星上に在るものではない。

「オウカ。一度部屋に戻れ」

アズも感じた様で、私にそう告げたが首を振った。

懐かしく、何が起るのかわかる。

「……」

「ん？」

「付いてきて！」

私は裾をつまみ、会場では逸る気持ちを抑えて外に出てから走り

出した。

アズも慌てて付いてくる。

右に曲がり、手短な階段を上っていく。

窓から今の位置を確認しつつ、目的の場所へ真っ直ぐに向かった。

「オウカ！ どこに行くんだ!？」

私は止まらない。

風が笑っていた。

かがり火は踊っている。

精霊達の喜びが肌に突き刺さった。

ガラス張りの部屋に入り、私はアズを待つ。

「一体どうしたんだ」

「始まるよ」

私が飛び込んだのは展望台らしきところ。

聞いたら、星読みの占者がいたんだって。

もつとも、今はもう廃れたらしいけど。

始まりは一つの流れ星だった。

「流星群だよ」

それが合図だったかの様に、星々が流れ出す。

まるで、光る魚が夜空という海を泳いでいるみたいに。

隣に立つアズは信じられないものを見るみたいに、目を見開いた。

「りゅうせ……とはなんだ？」

「彗星や小惑星みたいな母天体から出た流星物質が群となって流れ

出す。 星の欠片が一斉に流れ出しているってとこかな」  
「オウカは見たことがあるのか」

私は目を細める。

見たことなんてないはずだ。

懐かしい。

愛しい記憶。

これは【私】の記憶？

私はアズの問いに答えなかった。

空から星が落ちてきそうなくらい綺麗で。

言葉で伝えるにはあまりにも私は拙くて。

「何故、泣く？」

アズに言われて気付く。

視界が歪んで。

カナシイ。

イトシイ。

キエナイデ。

ソバニイテ。

私の中で何かがそう叫んでいる。

アズは私の頬を優しく撫でた。

暖かくて、足りないものを見つけたみたいに満たされる。

「綺麗だ……」

アズはそう言って、唇を重ねた。  
素直に受け入れて、嫌じゃない。  
うん。ずっと、こうしたかったのかも知れない。

「好きだ。オウカ」

甘い蜜みたい。

優しさに包まれて、幸せで。

私も……

「あ、あ、あああ〜！」

悲鳴？に私はハツとする。

見れば扉のところにレティア、アグロ、レキがいて。

「せっかく良い雰囲気だったのに」

「いや、これでこそレティア」

男二人放置で、レティアは私に抱きついた。  
なんてお約束な。

アズが舌打ちしたのは聞かなかったことにしよう。

「こんな獣に襲われて、大丈夫!？」

「大丈夫だから。苦しいよレティア〜」

どうやら私達を探しに来てくれたみたいだ。  
うん。ありがとう。

「御二人共、会場にお戻りください。主役が消えてどうするんですか」

アグロの小言に、私達は微笑んだのだった。

小鳥の囀ずり。

木々のざわめき。

花が咲き乱れる庭園。

そこはどこかで見たことがある場所だった。

ん？　なんで此処にいるんだ？

確か夜会が終わって、空を堪能した後にととうとして。

何故知らないところに？

首を傾げていると、ガゼボの中から笑い声が聞こえた。

「こんにちは」

ガゼボから現れたのは綺麗な女の人だった。

銀色の長髪に藍色と緑色が混じった様な不思議な色。

白いドレスを着ていて、例えるなら女神様！

慈愛に満ちた微笑みを浮かべていた。

「じ、こんにちは！」

慌てて挨拶を返すと女の方は私の手を重ねてくる。

暖かい。

そう思うと同時に、これは夢だと理解した。  
夢であって夢ではない現実だと。

「初めまして？ 現世の私」

「……アマリリス」

私が名前を呼ぶと、正解だと言いたげに微笑んだ。  
なんで彼女がアマリリスだと分かったのか、自分自身分からない。  
そして、思い出す。

カナシイ。

イトシイ。

キエナイデ。

ソバニイテ。

あれは彼女が思ったことだ。

【誰か】に向けて叫んだ言葉なんだ。  
その結末は悲しいものだった。

「私の記憶に引きずられているみたいね。泣かないで。貴女は私であって、私ではないのだから」

私であって貴女ではないのだからこそ悲しい。  
何があったのかは知らない。

でも、彼女が此処にいる意味を、私は心のどこかで理解していた。

「なんの巡り合わせかしらね。同じ人を好きになるなんて」  
「同じ人？」



アマリリスは私の頬を撫でて、涙をすくいとる。  
優しく暖かい。  
日だまりの匂い。

「ガルーシャ……」

「ガルーシャ？」

私が言い返すと、アマリリスは目を伏せた。

「花の名を持たないただの王。そして、私が愛し護りたかった人」

花の名を持つこと。

それは、異世界と神話が深く結び付いているそうだ。

けれども、彼女は教えてくれなかった。

知るべきではないと顔を歪めて。

「なんで、好きになったんだろうね。愛しくて堪らない。一緒にいられないのに」

「それってどう言うこと？」

アマリリスは答えない。

ただ、きつく私を抱き締める。

「いつか知る。貴女が【アマリリス】の継承者であるかぎり、必ず」

夢は白み始め、終わりを告げる。

彼女は悲しげに微笑んでいて。

意味を聞く前に、消えていった。

愛してる。

だから、離れるの。

護りたかったから。

生きていて欲しいから。

消えないで。

悲しいの。

好きなの。

赦されるなら、もう一度。

愛し、愛されたい。

そう囁いて。

26 愛し、愛されたい（後書き）

アズの告白をさりげなくスルーしているオウカさん。  
次回は少し時が経ちます。

5月15日 手直し完了

## 27 忘れよう。この思いを。

夜会から二週間が経った。

遊んでた訳ではない。

ちゃんと勉強とかしていましたよ!?

魔法に関してだって、あの変な夢を見てからそこそこ使える様になっただし。

元々魔力が強いからか、基本魔法は大抵使える様だ。

「ガルーシャ……アマリスと恋をした王様」

私は歴史書とか色んな資料を引っ張り出して、ガルーシャという王様のことを調べた。

同じ人を好きになるなんて？

それは、どういう意味だろうか。

私には好きな人はいない。

アズは……うん、考えないでおこう。

でも、ガルーシャと言う人と似ているとなると、立場上とかもろもろでアズになる。

血も繋がってるしね。

それに、告白もされたし……。

って、違う違う!

アズは好きなんかじゃない。

目を、目を覚ますのよ桜華!

元の世界に帰る為に。

「……なにをしている?」

思わぬ声に、私は驚いて飛び退いた。  
部屋にはアズがいて。

キャサラはいつの間にか消えていて。  
ヤバイ。心拍数が上がってきた。

何この乙女思考。

気を、気をしっかり持つんだ！

そうだ。深呼吸しよう。

ヒッヒッフー ヒッヒッ……

って、これ違うわ！

「オウカ、大丈夫か？」

頭の心配されてる。

いつもの私なら、余計なお世話だとかかと落としでもしたいくらいだが。

「大丈夫に決まってるでしょうが！」

「そんな風には見えないが」

熱でもあるのかなんて、聞いてきて。

変な行動していた自覚があるけど、酷いわ。

「アズ、政務はどうしたの？」

私をソファに誘導させ、クシヤリと頭を撫でてくる。

この手は嫌いじゃない。

暖かくなるから。

「後宮の移動がほどなく終わるからな。明日に部屋に移ってもらう」

ことになった」

結構急だね。

確かに、アグロが前に行っていたのは来月だったから……ああ、今月か。

道理で侍女がせわしなく部屋の物を片づけている訳だ。

私は何もしなくて良いって言われたから、何もしてないけど。

この二週間は外で訓練したり、図書室にいたりだったから、あんまり深くは考えてなかったな。

「それくらいなら、侍女とかに伝えたら良かったのに」

「お前は……」

アズはうなり声を上げた。

私の躰を抱き寄せて、顎に手をかけてくる。

こういうスキンシップにはいい加減馴れました。

イエ、馴れるしかないですね。はい。

「俺が会いたかったんだ」

そうですか。とっとと離れて下さい。

適当にあしらうと、アズがほんのり傷付いた様な表情をするが気にしない。

気にしたら負けだと思う。

夜会で思いを伝えられてから、スキンシップ……もとい、アプローチが増えた。

積極的になった。と言えば良いだろう。

日に日にアズが焦りだしているのもわかってる。

私がある程度魔法を使える様になって、恐れている。

私が、元の世界に帰ることを。

「オウカ。外に出てみないか？」

外？

中庭のことだろうか。

「違う。お忍びで、城の外に行こう」

「いいの？ そんなこと……」

「今日の政務は終わらせてきた。オウカに、見て欲しい所があるんだ」

行った側から前々に伝えてあったのか、キャサラが町娘の様な衣装を持つてくる。

拒否権はないらしく、私は仕方なく服を着替えた。

城の外に出るのは初めてだ。

でも、何で急に？

私の手を引いてアズが既に連れて行ってくれた。

二人で馬に乗り、私の腰を支えてアズは乗った。

裏門からフードを被ってひっそりと外に出る。

城下に降りるのは初めてだが、楽しむ余裕はない。

少しだけスピード速く、私達は駆け抜ける。

「アグロの追っ手を振り切るぞ」

そう耳元で囁かれ、舌を噛むから喋らない様に言われた。

ちよっと待て。

息が、息が耳に当たる！

心臓の音、アズには聞こえてないかな。

「此処だ」

暫く馬を走ると、城下を抜け、森に入る。

その奥にある透明で綺麗な泉。

私は馬から下りると駆け寄った。

「綺麗！」

「ああ。人もあんまりこないしな」

この景色を見せる為に連れてきてくれたのか。

湖は限りなく透明で、魚たちが透けて見えた。

「でも、なんで此处に？」

「オウカが欲しいなんていって、何もしてやれてないからな」

綺麗な宝石や装飾品が欲しい訳でも、権力が欲しい訳でもない。

ただ、ひたすらに帰ることを求めている私の事を考えてくれる。

アズの手が頬に触れた。

好きだと言ってくれる手。

優しい手。

そして、何処か懐かしい。

アズの手は、震えていた。

「オウカ。好きだ。好きなんだ」

その手に応えることは出来ない。

応えてしまえば、帰れなくなる。



魔法の構築もあと少しで完成する。  
もう少して、私は帰れるのだ。  
だから、この手を掴むことは出来ない。  
大丈夫。側にいる。  
そんなことは言えない。

「ごめんね」

アズの手にかがこもる。

この手を取れたら、どんなに良いだろう。  
甘い誘惑。

好きだから、貴方を苦しめる。

だから、私は違う世界に行きます。

貴方の手の届かないところへ。

「オウカ？」

アズの呼びかけにハツとした。  
まただ。

頻繁にアマリリス声が聞こえる。

違う。これはアマリリスの記憶だ。

まどろんでしまう。

元の世界に帰ろうとすればするほど。

「何でもない。アズ。帰ろう？」

気付かないふりをしよう。

忘れよう。

この思いを。

アズへの気持ちも何もかも。

27 忘れよう。この思いを。(後書き)

PV20万アクセスを突破。ユニークも3万5000人を突破致しました。

いつも読んで下さっている皆様方、また、初めて読んで下さった方々に

多大なる感謝を致します。

これからも頑張りますのでご声援お願いします！

28 アマリリスという女(前書き)

伏線的な感じで

## 28 アマリリスという女

夜遅く。

バルコニーに出た女は薄く笑う。

「久しぶりね」

「……」

闇に浮かぶ弟に手を伸ばす。

アマリリスとして、18年振りの再会だった。

いや。それは体感的にであって、実際には数百年振りか。

「貴方の継承者は消滅したのね」

「助けられなかった」

苦々しくアマリリスの手を取りながら、リクは唇を噛んだ。

アマリリスは首を振る。

「私達は干渉することに制限がありすぎる。彼女の手助けだけでもやり過ぎなくらいよ」

「桜華は巻き込まれたただだよ。ねえ、桜華は運命の輪から外せないの？」

「仕方無いわ。彼女は私の……【アマリリス】の継承者なのだから」

「それなら【ヘリクリサム】の継承者はいないじゃないか」

「それが必然よ」

アマリリスはため息混じりに言った。

リクはアマリリスに抱きつく。

何も見たくないと呼んだ前のように。

「リク。貴方は【ヘリクリサム】なのだから、継承者が現れないのも消えるのも当然。そういう祝福でしょう」  
「言いでて妙だね」

リクは苦し気に顔を歪ませた。

まだアマリリス達が生きていた時代、アマリリス達の持つ力を入は【祝福】と呼んだ。

確かに元から持って生まれた訳ではない。

悲しみから生まれた力達。

自分達もその犠牲者の一人でしかないだろう。

こうして此処に居るのは、必然に他ならない。

ある者は子孫の為に。

ある者は愛しい人の為に。

ある者は故郷の為に。

リクはアマリリスの為に。

アマリリスは……

「私達は【祝福】が欲しかった訳じゃない。必要だっただけ」

「人は忘れていくけどね」

「仕方無いことよ。あれからあまりに時が経ちすぎた」

知る者が消えても、自分達は覚えている。

散らばった同胞達。

アマリリスは口元を吊り上げた。

「私、予感がするの」

「予感？」

リクの体が離れたと同時に、アマリリスは両手を広げ恍惚とした

表情を浮かべる。

「そう。桜華は【契約】を果たしてくれるって！」

リクは方眉を上げた。

【契約】の終了は己という存在の消滅を意味する。  
しかし、一番それを望んでいる。

永遠なんていない。

欲しかったのは【自由】。

それでも、最期迄、リクはアマリスの側にいるのだろう。

「最期迄、側にいるから」

リクがそう呟くと、アマリスは微笑んだ。

それが【永遠ヘリクリサムの記憶】としての役割。  
全ての結末を見届ける。

【アマリス】と共に在る為に選んだこと。

「君はまだ、あの男を忘れられない？」

リクが問うと、アマリスは目を伏せた。

人を信じないと決めた彼女を神殿から連れ出した人間。

彼女の表情を取り戻した男。

そして、彼女が【アマリス】としてではなく……として、扱った人。

「……忘れられる訳がない」

リクは軽く嫉妬する。

あの男　　ガルーシャには勝てる気がしない。  
それほど迄に認めていた。

最期迄、彼女を女として愛していたのだから。  
そう。まさしく今の桜華とアズと全く同じ。

もつとも、桜華は【アマリリス】の継承者であるなど分かっていないが。

「花の名を持たないただの王なの？」

「ええ」

彼女が心を開いたのはリク以外はガルーシャが最初で最後だ。  
アマリリスは己の体を抱き締めた。

「速く、桜華には覚醒してもらわなくてはいけない。私と同じになる前に」

肩が震えていた。

抱き締めたい。

しかし、許されないことだ。

リクは拳を強く握る。

「君が桜華へ真名を伝える為に、頑張るから」

「……ありがとう」

ただ望むのは解放。

彼女にしたら、ガルーシャとの日々なのだろう。



起きてみると、まだ夜中だった。

最近夢をみる。

起きる時は臆気だけど、アマリリスとリクが話していた。  
過去とも未来とも思えない夢。

ただ、悲しみと切望が胸に残っていて。

「花の名を持つ者……」

私は呟く。

それが全ての鍵になると感じた。

## 29 初めてのストリートライブ！

フ、フフン！

え、何でご機嫌なのかって？

昼間ちよつとキャサラのいない間を狙って脱……げふんげふん。服を作って。

魔法を使える様になった私は、本を読んでその種類を増やした。魔法って便利だね。

イメージだけで出来るなんて。

裁縫には自信がある。

これでも高校の時は家庭科5でしたから！

こちらに来る時に来ていた服をこっちの服に合う様に見繕って、帽子はさすがに無理だから、庭師の人のを拝借して。

何処から見ても、この国の少年にしか見えない。

そして、置き手紙。

これで準備は万端だね。

え、何の準備かって？

決まってるじゃない。

脱走するの。

「んー。気持ちいい！」

私は裏口の結界が緩いところを通って外に出た。

ちゃんと置き手紙はしたから大丈夫！

「ちよつと遊びに行きます。夕方には帰ってくるので、心配しないで下さい」って。

ん？ なんかおかしいかな。

ま、大丈夫でしょう。

キヤサラは朝食を下げていって、たぶん、手紙に気付くのはレテ  
イアが始めだと思う。

私の専属騎士ですから。

二人の悲鳴が聞こえてきそうだ。

ちなみに帰ったら暫くは監禁状態なのも考えられる。

なんとかか……なるでしょう。

一度で良いから、こうして抜け出してみたかったんだよね。

最近色々あり過ぎて、体も鈍っているし、調べたいこともある。

とりあえず、私の中では城下はロンドンと同じ治安だと考えて、  
大通りを歩くことにした。

賑やかに行き交う人々。

そしてお店の人達。

こちらの通過は持っていないので何も買えないが、目的の所まで  
はいけそうだ。

といつても、時間はたつぷりある。

楽しんだって罰は当たらないよね！

「あ、あのう……」

消え入りそうな声で、私に声をかける少女がいた。

赤いチェックのワンピース。

手には花がたくさん入った籠があつて。

どうやら、花売りの様だ。

7、8歳くらいの女の子。

「ごめんね。お金持ってないんだ」

私がそう言うと、女の子は目を潤ませる。

うっ！ 心臓が悪い。

なんだか私が苛めているみたいじゃん。

断じて違う。お金持ってないのは本当だもん！

固まっていると、微かに音楽が聞こえてきた。

どうやら吟遊詩人がいる様で、人だかりが出来ている。

「ちょっと来て」

女の子の手を引いて、そこまで歩いた。

裏路地が続く道の近くで、旅人らしい青年がリュートを引いている。

その声はとても良く響いて、うっとりするぐらい綺麗で。

話の内容はアマリリスの物語。

誰もが知っていて、でも、語り手によって微妙に違ってくる。

この青年はアマリリスの物語を悲恋で語っていた。

大抵は大団団で終わらせるのだから、少し珍しい。

女の子もうっとりとして聞いていた。

やがて物語が終わり、お金をもらった後、人だかりが消える。

女の子はそこでハツとして、私を見上げてきた。

私は、女の子をみて、にっこりと笑う。

「いいこと、思いついた」

そう言って青年に近づく。

青年は私に気付くと顔を上げた。

年は私と同じくらいだろう。

翡翠の瞳。焦げ茶の髪。

青年は私を見て、微かに目を細めた。

「ねえ、私にもやらせて」

何を言い出すのかと、青年は瞠目する。

にこにここと有無を言わせる気はない。

「あの女の子の為に、どうしても必要なの」

そう言って花売りの少女を見やる。

青年には私の意図が伝わった様だ。

微笑んでリユートを貸してくれた。

帽子を深く被り、青年が開けてくれた椅子に座る。

こつこつというの、初めてだからうまくいくか分からない。

でも、ドキドキする。

良い意味で、楽しくなりそう。

リユートの一つ一つの音を確かめる。

うん。何とかいけそう。

「始まりは たった一つの花」

語り部って、大抵はつきりと言っただけど、私は少し変えてみた。だって、普通じゃない方が、目を引きやすいもの。

「 少女は独り 孤独で

ただ 独りぼっち

夢見てた

愛おしい人と 共に 生きることがを

連れ出してくれたのは 王子様で

身分違いの恋

外に出て初めて知った

世界を包む 闇の気配

」

歌うのはアマリリスの物語。

そう。私は語っているんじゃない。

唄に変えたのだ。

替え歌は得意だったからね。

即席なら作れる。

私は大きくリユートをかき鳴らした。

人だかりを感じる。

でも、考えるのはアマリリスの想い。

知ってる。

私は、アマリリスと繋がりがある人間だって。

私が寝ている間に、アマリリスが私の体を使ってヘリクリサムと

話しているって。

まあ、何を話しているかなんて知らないけど。

だからなのかな。

最近、アマリリスの記憶を走馬燈の様に見る時がある。

そして、ダイレクトに伝わってくるアマリリスの想い。

それを、唄に込めて。

「 闇を切り裂き 空に吠えるよ

大切なもの  
奪わないで 側にいたい  
例え世界の全てが 敵に回ろうとも  
いたいの 側に ずっと……」

誰かが息を呑む声がした。  
そう。物語は悲恋に終わる。  
でも、これはただの悲恋の唄じゃない。

「花の名はアマリス  
生まれ変わり 時が経ち  
平和な世界で 貴方と  
結ばれたいの……」

唄が終わると、辺りは静まった。  
って、うわ。

私、勢いに乗って何してんだ!?  
羞恥に顔が赤くなる。

「あ、ありがとうございました」

そう頭を下げた。  
盛大な拍手を送られた。  
青年が金を集め、少女は花を売る。  
そして、皆ほくほくとして散らばっていった。

「ありがとう。お姉ちゃん！」  
「ううん。力になれて良かったよ」

少女を見送ると、青年が私にお金を渡してくれた。

銀貨が十枚。

この国では銅貨100枚で銀貨1枚。銀貨10枚で金貨1枚である。

「リユートも貸してもらったし、こんないっぱいもらえないよ!」「いいんだ。俺も報酬はもらっているしな。あんたの取り分だ」

青年はそう言って快活に笑って見せた。

お金はもらって困ることは無いのでもらっておくことにする。

「俺はキヨウ。あんたの名前は?」

「桜華」

キヨウは私の頬を撫でて、耳元で囁いた。

「またな。アマリリス」

「え?」

なんで?

私が放心状態から解放されると、そこにはキヨウの姿はなかった。



### 30 調査と言つ名の観光

さてさて。お金も手に入れたことですし、久々に洒落込みますか！  
……はい。無理です。すみません。嘘つきました。

私は昼食を食べながら、町中を歩く。

まるでロンドンというよりもゲームの中にいるみたい。

いや。ロンドンすら行ったこともないけどね。

行き交う人の服装も様々。

基本は女の子はやっぱりスカートみたい。

ん？ あの女の子にばれたって事は、少年には見えないって事かな。

胸は一応あるっちゃある。でも、言うほどでもないし。

ってか、この世界のお姉さん達の方がグラマーで、良い香げふんげふん。

やばい。最近変態思考に走っちゃった。

「あら、旅人さんかい？」

私が王都のことを聞くと、店のおばちゃんが親切にも教えてくれた。

もちろん、店の商品を買ったよ？

ギブアンドテイク。借りた物は返さなならん。これ、基本。

買ったのは唐揚げを串刺しにした様な物。

う。高カロリーだけど、気にしない！

「この王都は国中から物資が集まるから、自然と裕福さ。でも、裏路地は行っちゃ駄目だよ。危険なのは何処の国も一緒だからね」  
「ギルドみたいなのってありますか？」

やっぱり異世界ってありそう。  
いやいや。此処をゲームの中なんて思ってたませんよ。  
ただの好奇心です。本当です。

「ああ、あるね。旅人さんじゃなくて貴族か何かかい？」

「ま、まあ。そんなものです」

「ふうん。詮索はしないさ。ギルドにはS〜Fまでのランクがあつてね。何でも屋みたいなものだね。困ったことがあれば申請して、報酬を出しさえすれば誰かがやつてくれる。この大通りを下って右に見えてくるでかい茶色の建物だから何かあれば行くと良いさ」

この流れって、私が冒険者か何かになりそうな予感がする。

ゲームも好きだったけど、冒険者にはなりたくない。

そこまで強くないし。

いや、そうなる前に王宮に帰らなくては、搜索隊が出るだろうなあ。

なんたって、愛されてますから

……うわあああああ！

今、凄い鳥肌が立った。

待って。私何言った？

凄い気持ち悪いことを言った気がする。

「分かりました。ありがとうございます」

頭を下げて、私は歩き出す。

はい。そろそろ皆様は私が何故、此処にいるのか分かりますか？  
ただの観光ではありません！

た、確かに用事ついでにいっぱい食べ物食べて歩き回って、買い物して……とか、考えてたけど。

「此処が、アマリスの生きた世界」

ぽつりと呟いた。

見たかった。どうしても。

アマリスの生きた世界。

アマリスが守りたいと願った世界。

うーん。最近夢がアマリスのものだから、絆されてきているのかも。

いや、ただの妄想が夢に出てきただけかも知れないけど。

はい、其処！ やっぱ観光とか言わない。

これはちゃんとした調査なのよ。

確かに銀貨を2枚も使って食べすぎ……げふんげふん。

見回っているのだから大丈夫。

夕方には帰れそうだし。

\*\*\*\*\*

「こ、これは……」

「やられたな」

キャサラは顔を引きつらせ、アズは溜息を吐いた。

いつかはやると思っていた。

アズの呟きが聞こえ、相当煮えくりかえっている様だ（オウカピンチ！）

「搜索隊を……」

「いや、いい」

アズは微笑んだ。

淒く、良い笑顔で。

「陛下。何故？」

レティアの質問に、アズは口許をつり上げる。背筋が寒くなる様な悪寒を感じてレティアとキャサラは後ずさりした。

「たまには自由にするのも良いだろう？」

……魔王の囁きに聞こえたのは、二人だけではないだろう。

\*\*\*\*\*

「あ、あ、あの！」

「綺麗な肌ですね。そんなに顔を真っ赤に染めて……」

私の言葉に娘は倒れそうな勢いだ。

私はくすくすと笑い、手に持っていたグラスをテーブルに置くと、娘の顎をあげた。

「可愛らしいです。まだ、男を知らないのでしょうか？」

はい。一人落ちました。

私は旅人風衣装から黒のウエイター衣装に着替え、周りには女の子を侍らせていた。

周囲の女の子は私が男だと気付いていない。

男達から嫉妬の視線は受けるものの、そちらに行くとすぐにぐどかれ始めるので行きたくない。

ついに私にももて期到来か！？

そのままに。

……なんで「」になっているの？

### 31 お出かけ終了

私が歩いていると、一人の男にぶつかりました。  
いや。あつちからぶつかってきたんだけどね。

難癖を付けられているところに、格好いいお姉さんに助けてもらいました。

そのお姉さんはある食堂の女主人。

しかし、その食堂は馴染みの客数人しか来ていないらしい。

今にも倒れそうな辛気くさい食堂。

でも、その料理は絶品で。

助けてもらったお礼に何かしたいと思い、客引きとウエイトレスとして働こうとしたけど、ウエイターの服しかなく、私は髪の毛や化粧やらいじられて、いざやることになりました。

そして、その結果がこれ。

「オウカさん。あ〜ん」

「オウカ君。こっちも」

客からアイスもらってます。

しかも、可愛い女の子。

「ありがとうございます」

にっこり笑ってみせる。

すると女の子集団から、黄色い歓声を浴びせられた。

……何処のホステスだ。

そう。私は今、男装をしているのだ。

胸はさらしを巻いているし、顔立ちは化粧で誤魔化して青年っぽく。

此処まで見事に化けさせてくれた女主人は凄いと思う。

「オウカ君！ これを運んでおくれ」

女主人は景気よく私のこと君付けしてくれちゃってるし。

もて期到来。

もち、女性限定。

おかげで食堂はごった返しているのだから、恩返しにはなれたと思う。

「やあ。オウカさん、此処にいて下さいい」

甘ったるい声を出す女の子に、私は手を取った。

「俺も離れるのはとても心苦しいですが、また、巡り合わせがあれば」

「はいいい（ハート）」

うん。すっかり道に入ってます。

小説やそういう執事喫茶とかあるの知ってるし。

何より、文化祭で『男女逆転メイド&執事』貴方の為に尽くします。喫茶』やったから、出来る。

違うテーブルに注文を運んだり、まあ、そこら辺はバイトの経験とかもあるので、こなせないことも無かった。

ただ、予想外の人物が現れるまでは。

「……何をしている？」

「アズ……」

王様。王様来ちゃった。

普通の人が来ている様な簡素な服を着ていて、でも、威圧感たっぷりなのは何でだろう。

それは生来王様としての雰囲気なのか。

その後ろでは哑然としたキャサラや頬を染めた（何で！？）レティアの姿もある。

どこのモデル集団だ。

美形過ぎてまぶしいわ。

「んーと。アルバイト中？」

「そんなことをせずとも……」

「絡まれているところを此処の女将さんに助けてもらったお礼だよ」

絡まれたと言うところに多少眉を顰めたが、見ないふり見ないふり。

私は軽く一礼した。

「お客様。席へご案内します」

訳 楽しんでるんだから、邪魔をするな。

三人に席へと案内して接客をする。

王族なのにこんな所来て大丈夫なのか。とか。

なんでレキ（最近影薄いよね）いないの？ とか。

言いたいことたくさんあるけど、我慢我慢。

こんな所で王族だとばれたらどうなる事やら。

「オウカ。かつこいい……」

はい。レティアの言葉は聞かなかったことにしよう。



「ありがとうございます。またのご来店お待ちしております」

客足もなくなったのは、夕方に差し掛かった時間帯だった。

食材もなくなったところで店じまいをして、女主人は私の手を握る。

「今日はありがとう！ ねえ、このまま働く気ない？」

女主人の誘いに私は頭を振った。

「せつかくですけど、宮仕えですって」

嘘は言っていない。

女主人は明らかに残念がってはいたが、すぐに快活な笑みをくれた。

なんか、お母さんって感じかな。

「気が向いたら、また来ておくれ」

「勿論。その時はよろしくお願いしますね」

元気に送り出してくれた。

暫く歩いて、前方の影に気づく。

「待ってくれたの？」

「放っておくと、何をするか分からないからな」  
「人聞きの悪い」

キャサラ達の姿は無く、アズだけだった。

夕食の支度にも帰ったのだろう。

アズは私を見下ろして微笑んだ。

「楽しかったか」

「うん。とても」

いつの間にか手を繋いでいた。

それが愛しいと感じたのは、私だけの秘密。

3 1 お出かけ終了(後書き)

この後、オウカのお仕置きが行われたそうなの。

### 32 ちゃんと働いてますよ？

「陛下、オウカ様を抱かないのは何故ですか」

それは、アグロにとって当然の疑問だろう。

俺は溜め息と共にペンを置いた。

「あれが望まないからだ」

「そんなこと言って、逃げられたらどうしますか」

凶星だった。

実際、何度も帰りたと言われてる。

普通ならもっと喜んでるだろうに。

いや、オウカにそれは当てはまらないな。

もういないはずの弟の為に帰りたがって。

健気で、一生懸命で、自分には無頓着。

そんなところに惚れたんだが。

「……貴方でも、そんな顔をするんですね」

なんだ。その意外そうな顔は。

俺が睨み付けると、アグロは肩を竦めた。

「既成事実を作ってしまったえば、帰るに帰れなくなりますよ」

さらっと恐ろしいことを言わなかったか、こいつ。

しかも俺の心読んでやがるし。

「出来ればもうしている！」

だてに何度も求婚してない。

俺か？ 俺が悪いのか？

おかげでチキンハートになった気分だ。

「まあ、失礼ですがオウカ様相手ですから、仕方ありませんね」

本当に失礼だ。

オウカがいたら殴られたかもな。

いや、そこまでさすがにしないか。

「それよりも、レキから連絡は？」

「ありません」

「……そうか」

俺は背もたれに体を預ける。

レキがこの城を離れたのは、夜会の翌日だ。

レキは常に俺の側にいる。

影が薄い、空気が読めないなど、多々言われているが、本人が望んだことだった。

俺の手足となり、その身を捧げることがを。

近衛だが、側近でもある。

レキは気配を常に消すことで、咄嗟の時に動ける様になっているのだ。

二週間帰って来ないのは、些か問題がある。

「彼は殺しても死にませんから、心配は要りません」

「だろっつな」

あいつは殺しても死なない。

それは昔からだから心配などしようとする方が無駄だ。

「奴が、そう簡単に見つかるとは思わないからな」  
「そうですね」

俺は息を吐く。

あの男は、方向音痴だから、多少……いや、大分遅れても仕方ない。

アマリリスの子孫。

そしてこの国の第一皇子キョウ。

\*\*\*\*\*

「ぶえつくしよい！」

キョウは盛大にくしゃみをして、鼻をすすった。  
前方を歩くレキが振り向く。

「大丈夫ですか」

「いや、問題ない。粗方アズかアグロが悪口でも言っているんだろ」  
「う」

「否定はしません」

レキは苦笑した。

予定から一週間も過ぎてしまった。  
しかし、これくらいなら許容範囲だ。  
まさか王都に着いてから五回も撒かれるとは思ってなかったが。

「久しぶりに弟達と会えるのは、楽しみだなあ」

「その意気です。二度とはぐれないで下さい」

そこには哀願さえ、混じっていたそうな。

\*\*\*\*\*

日付の変わる頃、部屋に戻るとオウカが寝台に寝ていた。  
規則正しい呼吸は俺を安心させる。

「オウカ……」

俺はオウカの頬に触れる。

愛しい、何者にも代えがたい娘。

「愛してる。だから、ずっと……」

卑怯だと思いつつ、唇を合わせた。

なあ。夜会の日、なんて言う気だった？

俺のことを好きになってくれるか？

答えは返って来ない。

今はそれでも良いと唇をもう一度、より深く合わせた。

32 ちゃんと働いてますよ？(後書き)

御愛読ありがとうございます！



### 33 告げられた真実

……何でこんなことになっているんでしょ？

目前に座る銀髪の女。

青い落ち着いたドレスを着ていて。

そこに居るだけで、一枚の絵になる。

そんな不思議な女。<sup>ひと</sup>

私はアマリリスにお茶会へ誘われた。

「飲まないの？ 毒なんて入ってないわよ」

これは夢ですよ？

殺すなんて出来ないよね！？

「あら、夢だもの。だからこうして話が出るんでしょ？」

「ごもっともです！

うわ、目綺麗。輪郭も整ってるし、話通りの美女！

目の保養〜。

「ごどうもありがとうございます」

あれ。

なんか心読まれてる？

「夢だから。口で話して欲しいけどね」

「なんか、アマリリスってクールだよ」

「そうでもないわよ」

にっこり笑う彼女。  
なんか間違いなく美女だよね。  
羨ましい。

アマリリスはテーブルに肘をつき、組んだ手の上に顎を乗せた。

「オウカ、アズロウのことを好きだよね？」

「それ、は……」

その言葉をすぐ否定出来ない。

違う。好きじゃない。

これは疑似愛だ。

この世界で唯一私のことを好きだと言ってくれる人だから。

寂しいから、保護してくれるから。

これは、男女の好きじゃない。

「……………そう。今はそれでも良いわ」

そうアマリリスは微笑む。

見透かされた気がして、私は目を反らした。

それが何を意味するのか、気付かない振りをして。

アマリリスは溜め息を吐く。

「話を変えるけど、オウカは私の記憶を一部視たわね？」

私は素直に頷いた。

何度か視ている夢。

アマリリスの記憶だと思われるもの。

「返して貰うわ」

「え？」

「え？ じゃないわよ。私の記憶が勝手に流れたと思うけど、それは私の記憶であって、貴女の記憶じゃないでしょう？」

確かにそうか。

私は菓子を口に放り込む。

「それに、気付いているのか分からないけど、貴女は私の生まれ変わりだから」

それはなんとなく気付いてた。

だって、魔力の大きさ、アマリスの記憶、リクの介入、どれをとっても、それを示唆している様にしか見えない。気付かない方がおかしい。

「あら、馬鹿じゃなかったのね」

「馬鹿にすんな」

美女だけど、口が悪い。

私の口の悪さは前世からだったか。

残念！

「それなら話は速い。貴女に記憶を共有されると、困ったことになるの」

「困ったこと？」

アマリスは頷く。

まさか、私が私で無くなるのか？

それとも、チートになれる特典が！？

「本の読みすぎ。それは無いから安心して」

ええ〜

せつかく私の時代だと思ったのに。

いや、冗談だし。

そんな痛い子を見る様な目で見ないでくれる？

「記憶の共有は私のことを知る分には便利でしょうよ。でも、貴女が壊れる可能性が高い」

「どういうこと？」

アマリリスは息を吐く。

顔を歪めて。

ああ。知ってる。

これは痛みを知る人の顔だ。

「私は、貴女が産まれてから、ずっとそばにいた。だから、貴女は私の生まれ変わりだけど、私じゃない」

「へえ？ ま、アマリリスの記憶無くても……」

「だから……だから私は貴女が目を反らしてきた真実を知ってる」

どくん

「な、何を言ってる……」

「貴女はそうやって自分を守る。【アマリリス】の後継者として逃れるられない渦の中にいるのに」

アマリリスの言っている意味が分からない。

私の顔が自然と強張る。

机も、美しい景色も消え、闇の中、アマリリスと二人きり。

なんとも言えない恐怖が、胸を過る。

「私の真名は【アマリリス】ではないわ。愛しい人を失い、狂った私に異世界人が付けた偽りの名。虚栄心に囚われ、復讐を果たした私に残されたのは、【アマリリス】という名の残留思念。私は貴女の負を、この身に宿す」

義務的な口調。

先程の様子とは打って変わるアマリリスに、私は呆然とした。

「私が望むのはただひとつ」

「それは小さな願い」

「その願いの為に、ここにいます」

「受け入れなさい」

「理を」

アマリリスの声が反射する。

その姿も消えてゆき、私は手を伸ばした。

そして、私の意識は暗転した。

「其処は最近移ったばかりの、新しい寝室。

これは夢ではないらしい。

不意に涙を流していた。

何故、悲しいのか。

何故、虚無感があるのか。

何かを忘れて、ほっとしている自分。

ただひとつ分かることは 私は【アマリス】の継承者として、  
何かと決着をつけなければいけないと言ったことだった。

### 33 告げられた真実（後書き）

シリアスは如何でしたか？

コメデイで進みたいのですが、シリアスの方が得意なので、脱線しがちに。

読んでいただいて、ありがとうございます

### 34 あんたが、第一王子？

私がこの世界に来てから一ヶ月以上が経った。

なんか、短いような長いような。

連れ去られたり、流星群を見たり、城を抜け出したり、魔法を使ったり。

そう。なんか最近魔法の使い方が急に分かるようになった。

その理由は知らない。

そして、なんか今日は城中が慌しい。

「第一王子のキヨウ様が帰ってこられたのですよ」

キヤサラがそう教えてくれた。

ふうん。アズのお兄ちゃんか。

「自由奔放で、早々に王位継承を捨てて旅に出ていた人よ。キヨウが城を出て行った時は、よく絶縁されないものだと感じたわ」

紅茶を飲みながら、レティアはそういった。

うわ。ある意味すごい人なんだ。

小説とかだと、そういう人って女好きっていう設定がつきそうだけど。

私が聞くと、そういう噂は聞いたことが無い様だ。

「キヨウは不真面目そうですけど、根はしっかりしてるし。政治観念もそこら辺の王よりは賢王になれる資質があるし。何故、王位継承を放棄したのか、今でも謎って言われているわね」

ま、そのうち会うことがあるかな。



そのぐらいにしか思ってなかった。  
そう。その日の夜。  
出会うまでは。

「で。何で私のベッドで寝てるの？」

「いやあ、寝心地が良くて」

「ふざけんな。あんた自分のベッドがあるでしょう」

「あっははは。何なら、一緒に寝る？」

「いっぺん死ね」

まさか湯上りに私のベッドにいるとは思わなかった。

しかも、城下で会った旅人の青年が第一王子など。

あきれてものも言えない。

つてか、早く出て行け。

「キョウ様。夜分に女性の部屋を、しかも王妃の部屋を訪ねるなんてどういふつもりですか！」

キヤサラが気色ばむ。

キョウは意に介さぬといった態度で、私のベッドに寝転ぶ。

はあ。これが第一王子か。

誰だ。しっかりしてるなんていったやつ。

ああ、レティアか。明日、訂正しよう。

「彼女は本物の王妃ではないだろうか？」

その言葉に、私は眉を顰める。

何を、どこまで知っている？

そんな視線を、キョウはさらりとかわした。

「ま、そんなことはともかく。挨拶は必要だと思って」

「明日にしろ。明日に」

「思い立ったが吉日って言うだろ」

「非常識でしょ。TPOを！ 時と場合を考えろって……」

そこでハツとした。

こいつを此処にいさせる時間が長いだけ、アズが出てきたらどうなるだろう。

私が招き入れてたと思われかねないか。

いや。それは無い。

大丈夫。安心しろ、私。

奴の性格は多分アズも知っているだろうし。

動揺するな私。大丈夫だ！

「いや、思いつきり声に出てるけどね。それ」

「うるさい。貴方がいなかったら、考えなくても良かったことですよ」

睨み付けながら、私は後ずさる。

それにキヨウはにやりと笑い、危険を感じたキャサラが私の前に出ようとした。

刹那、広い胸に抱きしめられる。

「兄上。冗談も程々にして下さい」

転移魔法を使ったのか、アズは私を抱きしめていた。

別に驚く訳でも無く、キヨウは肩を竦める。

「はいはい。本当に挨拶だけのつもりだったから、帰るわ」

「城には居てください。まだやって頂くことが……」

「分かってる。まだオウカとちゃんと話して無いしな」  
「結構です」

「うわ。そんな邪険にしなくても……」

悲し気な背中を見送り、キャサラも退室する。

部屋にはアズと二人きりになって、私の額に唇が寄せられた。

「兄上がすまなかつたな」

「それよりも、もう仕事は終わったの？」

「ああ。終わった」

抱きしめられる心地良さに、私は目を細める。

アズは私をソファに誘い、他愛もない話をした。

アズが私の髪を梳く。

それが気持ち良くて、アズに身を預けた。

この穏やかさがずっと続けば良いのに。

35 あんた、人外だったの!?

小さな願い。

それは、

たった一人の側に居たかった。

それだけのはずだった。

\*\*\*\*\*

キョウが帰城してから、3日が経った。

初日以降、キョウが私の前に現れることはない。

どうやら、アズ達がそれを防いでいるらしい。

ま、もつともそうなるのは当然だろう。

私（一応王妃）の寝室に無断で上がり込んで、ベッドで寝ていたのだから。

自由だな。自由すぎるだろ！

……ごほん。そんなツツコミは抑えておいて。

警戒が強くなり、私に会うのにも必要な書類と多岐にわたる条件をクリアしなければならぬらしい。

これは、侍女達の話盗み聞きした物だ。

え、キャサラはどうしたって？

そんなのはね、魔法でどうにかなるのだよ。例えば、指定した相手に姿を隠す魔法とか。キャサラかなり焦っていたけど、私が部屋にいたって分かったと泣き疲れた。

うん。もう二度としません。

だから、その拳をどうにか治めて下さい！

「平和ねえ……」

「平和、ですね」

こうしてのんびりしてられるのも、アズの尽力のおかげだろう。アズは忙しそうにしているが、一日に一度は顔を見せてくれる様になった。

それがたまらなく嬉しい。

城の中で起こったことや、最近ご無沙汰なノエル君のこと。それから他愛もない話。

時々見せる笑顔にどきっとしてしまふ。

だからこそ。私は甘えてはいけない。

全ての真実を、知る権利がある。

「何の用？」

私は夜半にバルコニーへと出た。

木々の生い茂る隙間から、すらりと男の影がよぎる。

「いやあ、ガードが堅くて」

「自業自得。それで、私に用があるのよね？」

「その通り」

キヨウは恭しく私に頭を下げた。  
それは貴族としての礼。

最上級の相手に対する、最高礼だった。

『我が同胞。その最後の【継承者】。貴女を待ち続けていた』

それはこの国の言葉ではなかった。

けれども、私は理解する。

懐かしい。

そう思っただけ目を細めた。

キヨウの姿が変わる。

金色に輝く毛並み。蒼い空の様な澄んだ瞳。

四つ足の獅子の背には銀色の翼が生え、獣の額には紅の刻印があった。

凄い。さすがファンタジーって、感心している場合ではないよね。  
私は動揺を隠せなかった。

「貴方は、キヨウ……王子よね？」

『左様。我はウイキヨウ。アマリスと共に戦い、王家に生まれ変わる者。人にして、人に有らず。アマリスとの盟約にして、魂の輪廻からはずれ、【キヨウ】として幾度も生まれ変わってきた』

ちょっと、ちょっと待って！

私の頭がキャリアオーバーしてる。

「えっと、かなり省いてしまっけど、要は神話の時代にいた人？」

『そうなるな。アマリスは貴方の中で消滅しかけている。その前

に、解放しなければ……』

「ちょ、ちよっと待った！ どういう事？」

『何も知らぬのか……』

キヨウ（？）は目を細める。

まるで、私を見定める様に。

まるで、懐かしむ様に。

『何処から話そうか……そうだな。ガルーシャ陛下とアマリスの  
出会いから話そう』

私は周囲に人がいないか確かめ、結界を張る。

あくまで、人が近づいてこないようにするためのものだ。

バルコニーから降りてキヨウに近づく。

キヨウが地面に座ったので、はしたないとは分かっていたものの、  
私もその流儀にならった。

『あれはもう廃れてしまった神殿。その中に、アマリスは静かに  
いた』

おとぎ話でも言うかの様に。

ともすれば、さすが吟遊詩人だけはあるのか、歌う様に。

キヨウは語り出した。

35 あんた、人外だったの！？（後書き）

まさかの人外。いや、作者もまったくの想定外でした。

キャラが暴走してます。

もう、どうやってコントロールしましょうか（へへ、こ）ハア

……いや、話はちゃんと進んでいるので、放置しましょう。

（開き直りとも言つ）



36 昔話を聞かせて（前書き）

最近短いです

### 36 昔話を聞かせて

『我等は精霊と共にあり、この世界の一部であり、人ではない。そんな不思議な一族。人の感覚では精霊と合互い無いものらしい。アマリリスはその中でも異質な存在だった』

異質。

どこがそうなのかと言われると、まずはその長い銀髪だった。

銀髪は闇のものの象徴として捉えられていた。

一族はおびえ、アマリリスを幽閉することに決める。

アマリリスもそれを受諾した。

『幾年が経ち、その神殿に我と陛下は向かった。我はそのとき時期族長でもあった』

会ってすぐにガルーシャは恋に落ちる。

何度も求婚し、神殿に足を運んだ。

キヨウもガルーシャについていった。

もし、アマリリスがガルーシャに手を出すようなら、葬るつもりだった。

『アマリリスは己の力をよく理解していた。大きすぎる力は均衡を崩すと、よく言っておった』

そして更に2年。

ようやくアマリリスはガルーシャの手をとる。

泉で身を清め、人にしてはありすぎる魔力を封印した。

ガルーシャの妻になり、子供をもつけた。

『幸せそうだった。見ていて、こちらまで幸せになれた。もっとも、長くは続かなかったが……』

ガルーシャは数年後亡くなる。

それはアマリリスを絶望のふちに立たせた。

ガルーシャが死んだのは、アマリリスの力を危惧し、勢力をそぎ落とすため連合国の罠。

アマリリスは怒り狂い、封印をといて連合国に報復した。

歩いた後には血の道が出来、その姿は傾国の皇女を彷彿とさせる。

『我は止められなかった。痛々しすぎて、とめることなど出来なかった』

すべてが終わったとき、立っていたのはアマリリスだけだった。

もう、真名を読んでもくれるものもない。

ひとりとなったアマリリスは最後に願った。

その願いは、誰も知らない。

ただ、分かるのはアマリリスの思いだけ。

自分は生まれるべきではなかったと。

ずっと一人で生きていればよかったのだと。

今はただ、この世界から消えよう。

そして、再びこの世界に来れたのなら。

『そういうことだ。もう、残留思念になるまで魂は削れてしまったようだがな』

私は口元を押さえる。

何かを思い出しそうで、思い出せない。

アマリリスは何を願った？

アマリリスは私に何をしてほしい？

彼女は、アマリリスは私に……。

「アマリリスの真名は知っているの？」

『知らぬ。我らはアマリリスを【名無し】と呼んでいた』

知るのは、ガルーシャのみ。

確信めいた思いで、私はキヨウを見た。

「アマリリスの真名を探すわ。それが、私の仕事なのよね」  
『左様。それが呼ばれた本当の理由。時間は限られている』

私はうなづき、踵を返した。

魔法でバルコニーまで戻ると、そこにはキヨウの姿はない。

やるべきことをしよう。

私は強く心に誓った。

月が照らす。

名前を呼ばれるのを待ち続ける女。

その悲恋を、終わらせたい。

### 37 名前探し(前書き)

物語はラストに向けて進み始めます。

### 37 名前探し

アマリリスの名前、名前。

私はアマリリスの庭を歩きながら、考えていた。

そもそも何故、アマリリスなんて呼ばれたのだろう。

姿も色彩も連想できないのに。

何か意味が存在するのか。

「オウカ！」

呼ばれて顔を上げると、小柄な少年が駆けてきた。

あ、ノエル君。

久々過ぎて記憶から消え失せるところだったよ。

その後にリクがついてきた。

いつの間に仲良くなったんだ。

私はノエル君を抱き締める。

これよこれ！

この愛らしさ。

このふにふに感。

私が求めている物！

あ、駄目だ。

久々に変態思考が。

「オウカ？」

リクに話しかけられてはっとする。

「そう言えば、リクって真名持ってる？」

「そうだよ」

思った通りだ。

アマリリスに真名があるなら、ヘリクリサムにもあると思った。

「教えて（ハート）」

「嫌だ」

「なんでよ」

私はリクを睨み付ける。

リクは首を振り、肩を竦めた。

「真名を教えるってことは“求婚”を意味するんだ」

「きゅ……こん……？」

あ、あ、ああ……！

私は顔を真っ赤にした。

あれか！ 小説によくある、真名を教えると相手と契約したことになるのどつって！

「ま、オウカなら大歓迎なんだけど」

「歓迎しなくて良い！」

「オウカは僕の！」

さりげなく何を言っているの、ノエル君！

アワアワしていると、リクは吹き出した。

「冗談だよ。僕には心に決めた人がいるし。その様子じゃあ、ウイキヨウが余計なことを言った感じだな」

「ウイキヨウ？」

「キヨウの名前だよ。花言葉の不老不死。彼にぴったりだろう？」

確かに。

あの男はどこにいても、死ななさそうだ。

私は一人納得しながら、リクを見た。

「ねえ、アマリリスの真名を知らない？ リクが私を連れて来たのはその為でしょ」

「アイツ、喋り過ぎだろう！」

私がそこまで知ったとは思っていなかったらしい。

リクは地団駄を踏み鳴らした。

「……確かに、それもあるけど、俺は！」

「な、に、を……している？」

地を這う様な声。

思わず身震いする。

いつの間にか現れたアズは、私の腰を拐ってリクから引き離した。そこで遅いが気付く。

リクと話している間、あまりに距離が狭かった。

端から見ていたら、仲睦まじい恋人の様に。

あ、ノエル君忘れてるわ私。

私に抱きついていたノエル君は、危険を察知していたのか、少し離れた場所にいる。

おい。それはするいぞ。

「オウカ。誰とでも必要以上に近づくな！」

「ええ？ これぐらい普通……」

「オ、ウ、カ？」



はい。なんでもありません。  
怖い。怖いから顔を近付けしないで下さい！

アズはリクを睨み付けた。

「おい。約束が違う」

約束？

はて、なんのことだろう？

とりあえず、肘鉄を喰らわして、私はアズから離れる。

いやあ。此処に来てから、格闘スキルが上がった様な気がするわ。

「オウカ……いくらなんでも」

「アズ。貴方は少し頭を冷やしたら？ うざったさがパワーアップしてるよ」

「これぞ、尻に敷かれるっての？」

「オウカって強いんだね」

「逆らわない様にしような」

「うん！」

「そこ！ 子供に何を教えてんの」

ああ、もうカオス。

話が先に進めない。

誰かなんとかして！

頭を掻きむしりたい勢いで、私は頭を抱えた。

アズが何を思ったか、性懲りもなく、私を抱き寄せる。

「……何よ」

「いや、オウカにどうしたら惚れてもらえるかと思って」

「一生そんな日は来ないから、安心して」

クリーンヒット。

さすが私。痛いところを平気でほじくる。

「何度愛してると言えば……いや、無理か」

「さすがアズ。よく分かっているよね」

大の男を凹ませるって、気持ちが良いね！

爽やかに笑って見せると、アズは絶望したかの様に呆然とした。

「あ、僕、お勉強の時間だ！」

「そう言えば。よし、一緒に行つてあげる」

ノエル君とリクが歩き出した。

私も自室に戻ろうとすれば、アズは私をより抱き締め、移動魔法を唱えた。

気付いたら、アズの寝室に来ていた。

アズは私を抱き上げ、ベッドに倒れ込んだ。

ちよつと待て。

もしかしなくても、やばいかこれは。

「ア……」

「はあ」

名前を呼ぼうとしたら、溜め息を吐かれた。

……それ、失礼でしょ。

アズは私の隣にごろんと横たわり、私を抱き寄せる。

私は抱き枕じゃないぞ。

それにドレスがシワになる。

「少し、このままで……」

疲れきった声で懇願され、断ることが出来ない。

綺麗な整った顔。

すぐに寝息が聞こえた。

よほど疲れきっていたのだろうか。

そう言えば、こうして二人きりなのは本当に久しぶり。

「アズ……」

優しい王様。

私を好きだと言ってくれる愛しい人。

離れたくない。

側にいたい。

何もかも捨てられたら、どんなに良いか。

「へえ。アマリリスの【後継者】は貴女でしたか」

そんな声がして、慌てて辺りを見たが、何もなく。

幻聴か？

私は首を傾げたのだった。

38 朝、目覚める(前書き)

糖度高め。

抵抗の薄れていくオウカ。

### 38 朝、目覚める

誰かが私の首に剣を突き立てていた。  
泣きながら、私を睨み付ける。

「何で……あの人は、貴女ばかり！」

銀色の髪を揺らし、私は目を細めた。  
憎い。憎くて堪らない。  
だけど、心は冷えていた。

「だから、あの人を殺したの？ 愚かな」  
「黙れ！」

相手の剣が私を貫く。  
こんなものか。  
最強と言われても、例え【アマリリス】と呼ばれても。  
最期は呆気ない。

「ガルフエリーシャ……」

冷たい床。  
広がる血。

貴方と出逢わなければ良かったのかも知れない。  
だけど、こんなに愛しい。  
お願いだから、最期にもう一度だけ。

「私の真名を、呼んで……」

貴方しか知らない。  
私の真名を。

\*\*\*\*\*

朝日が眩しい。

キラキラと何かが反射している。

ああ。なんだ。アズの髪か。

昨日はそのままベッドで寝たんだ。

夕食もなくなつて、正直腹が減っている。

アズはぐっすりです、私を離さなかった。

アグロが一度来たが、これを見るなり溜め息を吐いて、レキと出ていった。

あ。レキ久しぶりだったのに。

もう影すらなくなつて「誰？」って思われてるよきつと。

「オウカ……」

「なあに？」

「愛してる」

「はいはい」

軽く受け流して、アズの腕から抜け出す。

そんな私へアズは名残惜しそうに手を伸ばした。

思わず振り向く私も私なただけ。

「来い。オウカ」

な、に。

この神神しさは。

何故か上半身裸だし。

あれ？

寝る前、ちゃんと服着ていたよね。

しかも私より寝たの随分先だったような。

……うん。気にしないでおこつ。

「オウカ」

アズが催促してくる。

どうしても行つちゃう私は馬鹿なんだろう。

アズの身体に（これ言つたら卑猥に聞こえるけど）慣れてきた。

こつ、スキンシップが多いとね。

私から近く様に仕向けていても気付かないふり。

「アズはアマリリスの真名を知らない？」

「いきなり何でだ」

そうか。

アズは知らないんだよね。

私はアズに今まであったことを話した。

キョウの正体については知っていたみたい。

アマリリスの真名については何も知らないみたいだけど。

「……そう言えば、アマリリスが暮らしていた神殿が国の端にあつたな」

「え、今でもあるかな」

「あるだろう。あそこは精霊達が護る土地だから」

アズは何かを思い付いた様に微笑む。

うわ、近くで見るとやっぱアズって美形だよな。

「遠乗りをしよう。神殿に行きたいんだろ？」

「いいの!？」

「もちろんだ。妃の望みを叶えるのは当然だからな」

「でも、政務は……」

「大丈夫だ。アグロがいる」

うわあ。

アグロごめんなさい。

だけど、願ったり叶ったりだ。

この際アグロには頑張ってもらおう。

私は嬉しさのあまり、アズに抱き付いた。

アズはもちろん抵抗せずに受け止める。

その蠢く手は邪魔だけどね!

「ありがとう」

「……今日はこのままこうしていようか」

「馬鹿」

アズが緩やかに笑む。

まるで神様に愛された様な綺麗で人を惹き付ける。

私はアズの頬に手を伸ばした。

「どうした」

「……ううん。何でもない」

消えてしまうのかと。

そんな不安にかられる。

綺麗過ぎて、泡の様に消えてしまう。

そんな儂げな美しさ。

それはきつと、アズの内面から引き出されるものなのだろう。



「起きたらオウカが傍にるのが、こんなに嬉しいとはな」

アズはそう言って、私を抱き締める。

私は、それに答えない。

ただ、静かに聞いていた。

39 アマリリスの神殿（前書き）

すいません。

やっぱりまだ続круらしいです。

### 39 アマリリスの神殿

私は一週間馬車に乗った。  
国の端にあるのは本当の様だ。

「疲れていないか」

「大丈夫」

時々アズが声をかけてくれる。

正直、座りっぱなしで尻が痛い。

道路がコンクリートで固められている訳でもないから、馬車が揺れる。

でも、座席はこの世界では良い方なのだろう。  
触り心地が良いし、ついうとうととしてしまう。

「オウカ」

呼ばれて私はハツとした。

ヤバイ。どうやら寝ていた様だ。

馬車から出る際に、アズにエスコートされる。

こういうことをなんとなしにやってみせるところを見ても、アズって様になるよね。

「どうした」

「な、なんでもない」

こら、私。しっかりして！

こんなところで乙女演じている暇はないんだから。  
到着したところは、鬱蒼と茂る森だった。

「ここからは歩きだ」

「え、兵士とかは……」

「近くの村で待機してもらおう。神殿近くであるこの森には結界があるから、アマリリスの血を引くものしか入れない」

「私は……」

「オウカは、大丈夫だ」

アズは甘く微笑む。

それは何かを確信していて。

バレたか。

私の背に冷や汗が流れる。

アズには私が【継承者】であることを教えていない。

キヨウの正体。

それからアマリリスとガルーシャの出会い。

話したのはそれだけだ。

私がアマリリスの生まれ変わりだと言うことも知らないはずで。

「レキ。レティアをしっかりと護れ」

「私はこんな影の薄い奴に護られている程弱くはない！」

「おい……」

「ははっ。それもそうだな」

「アズ！」

アズは笑いながら私の肩を抱いた。

微かに震えてしまったのは、気付かれただろうか。

アズは私の髪を撫で、優しく頬に唇をおとした。

思考が吹き飛ぶのは仕方無いだろう。

「大丈夫だ」

何に對しての大丈夫かなんて聞けなかった。  
目線だけで問う。

アズは何を何処まで知っていて、私を自由にしているのか。  
私はまだ子供だ。

いくらこの世界では成人していても、考えが甘過ぎる。  
だから、アズの真意も見出だせない。  
少し悔しくて、私は押し黙った。

森に入って暫くすると、空気が変わった。  
神聖で澄んだ空気。

『ただいま』

無意識に私は呟いていた。  
懐かしくて、虚無の世界。  
寂しいとさえ感じた。

『お帰り』

『お帰りなさい』

『姫様！』

『ひい様、お帰り』

沢山聞こえる【声】達。

それは精霊と呼ばれる神殿の守護者。  
眼には見えなくても、存在を感じられた。  
暫く進むと、白い柱があった。

幾つも柱の残骸があり、長い年月を経ていることを物語っていた。

「これが、アマリリスが力を封印した湖だ」

柱の中心には湖がある。  
綺麗で、そのままでも飲めそう。  
光に反射して、私とアズを映した。

『アマリリス……来たよ』

これは一人言。

宣言するかの様に私は呟く。

何かを得られる。

そんな直感があった。

「オウカ……」

アズは私を抱き締める。

強く、痛いくらいに。

まるで何かを失うことを恐れているかの様に。

「アズ？」

「俺が、何も知らないと思うなよ」

アズの眼には鋭い光が宿っていた。

あ、と思った。

アズは分かっている。

誰にも教えられない中で、自分で答えを見つけたのだ。

アズの腕から逃れ様としたが、びくともしない。

それどころか、拘束は更に強まった。

「オウカがアマリリスの、俺がガルーシャ王の生まれ変わりだと言  
うことは知っていた」

「え……」

私がアマリリスの生まれ変わりだとは分かっていた。  
でも、アズがガルーシャの生まれ変わり……？

「う、嘘」

「嘘じゃない」

私は拳を握る。

私は知らない。

アズが……ガルーシャだなんて。

なんの巡り合わせかしらね。同じ人を好きになるなんて。  
花の名を持たないただの王。そして、私が愛し護りたかった人。

アマリリスの言葉を唐突に思い出す。

あれは、こういう事？

肌が泡立つ。

嫌な予感が唐突にした。

「オウカっ!!」

アズが私を抱いて飛び退け様とする。

直後に何かに引っ張られる感覚。

その先は 湖。

「アズ！」

アズは逃がさなければ。

そんな事を思っても、どうにも出来なかった。

二人一緒に湖へ落ちる。

「姫様！」

「助けなきゃ」

「ひい様、大変」

「意識を保って！」

精霊達の叫びを遠くに聞きながら、私の意識はブラックアウトした。



## 40 トリップ&amp;P・トリップ

誰かが呼んでいる。  
でも、頭痛いし、瞼が重い。  
もう少し寝かせて。

「おい……き……」

あと10分。

10分で良いから、寝かせて下さい。

「おい。いつまで寝てる気だ！」

「うっひゃほい!!」

耳元で怒鳴られて、私は声を上げる。

決して喜んでる訳でも、鳴き声でもありません。  
むしろ気にしないで下さい。

私の顔を上げて驚く。

これは夢の中なのだろうか。

思わず目前の美女を食い入るよう見つめた。

「どうした。頭でも打ったか」

銀色の長髪に藍色の瞳。

その色を持つ人を、私は一人しか知らない。

口調も違うし、態度もでかい。

けれど、その身に纏う気高く純粋な空気は変わらない。

「アム……リリース？」

「ほお。私を知っているのか。まあ、神殿にいた時と違って、目立つからな」

「わ、私分からないの？」

アマリリスの言葉は、私を知らない様だった。

そんなはずはない。

この間、会っているはずだ。

「分からないも、初対面だろう」

アマリリスはそう言いながら、私に近いた。

そして、髪の毛を掬い上げる。

髪の毛は、アマリリスと同じ、銀色だった。

「私と同じ魔力量。ただ者ではないが、隙が有りすぎる。お前は何者だ？」

どこか楽し気な雰囲気を漂わせていた。

湖には魔力でもあつたのだろうか。

アマリリスの記憶を消すとかか。

違う。それには違和感が有りすぎる。

手短にある鏡を覗くと、アマリリスによく似た色彩を持つ私がい

た。

どこに行つた。私の髪と目よ！

「質問には答えるものだ」

後ろから叩かれた。

こいつ、こんなに暴力的だったか？

いや、もっとお淑やかで優しいはずだ。

何が起こった？

「私はアマリリスの生まれ変わりだって、アマリリスが言ったんじゃない。無理矢理こっちの世界に連れてきて、拳げ句私の真名を探させて」

思わず上げた声に、アマリリスは眼を見開いた。まるで、信じられないものでも見るみたいに。信じられないのは私の方だから！

「それなら、魔力量にも理解出来るが……そうか。私は死ねたのか。そして、来世に全てを委ねたのか」

「アマリリス？」

アマリリスの言う意味が分からなくて、私は首を傾げる。アマリリスは痛まそうに微笑み、私の肩を掴んだ。

「ひとつ、確実なことを教えてやろう」

憐れんでいるかの様に。しかし、笑いを含ませて。

「世界を越えるどころか、お前は時を越えたらしい」「は？」「

時を越えた？

いやいや。まさかそんな。

私はそんな嘘には騙されないし、子供でもない。どこかの映画じゃあるまいし。

「私が生まれ変わりに嘘を吐いて、なんの徳がある？」

アマリリスと会った時から、嫌な予感はずいていた。  
身体が震える。

嫌。嫌だ。

また、振り出しになるのか。

また、独りになるのか。

震える身体。

締め付けられる様な痛みが、私を嘲笑う。

「ア、ズ……嫌。助けて。アズ……アズ！」

叫びだす直前。

乾いた音が部屋に響いた。

「心を落ち着かせる。魔力が暴走するぞ」

私の頬を叩いたアマリリスはそう叱責する。

呆然としながら、私は泣くのを堪えた。

アズはどうなったんだろう。

あの湖に落ちただけなのか。

こっちには来ていないか。

側にいないだけで不安になってしまう。

「アズ……と言う奴と一緒にだったのか」

私が頷くと、アマリリスは私を抱き締めた。

ふんわり優しい魔力が私を包む。

「探してやる。帰り方も、アズって奴も」

アマリリスさん。男らし過ぎますよ。  
私はみっともなくアマリリスの胸の中で泣いた。

#### 40 トリップ&amp;amp;amp;トリップ(後書き)

当初もうラストに入っている予定だったのに！  
過去にトリップは考えてませんでした……  
はい、そうなんです。  
キャラ暴走中。

#### 4 1 料理長補佐になりました

「オウカ！ 今日の夕飯はどうする」

「そうだねえ……よし、グラタン作るう」

「ぐらたん……？」

「まあまあ。そこにあるピーマンモドキと人参モドキ刻んでよ。ドルカ」

この時代に（もう、世界とは言えないなあ）来て、一週間が経った。

アマリリスが私の為に用意してくれた役割は料理長補佐。

来てすぐに素っ気ないこの時代の料理に激怒し、調理室で腕をふるった。

その料理をアマリリスが絶賛した為に、料理長自ら、私を補佐に指名してくれた。

料理長の名はドルカ。

20代位の若い（私が言うのも可笑しいが）男で、赤い短髪に茶色の瞳を持っている。

若い、その腕は確かだ。

私の細かい指示も忠実に再現してくれる。

え、お嬢様の私が何で料理が出来るかって？

そんなもん、花嫁修業やら基本常識やらで叩き込まれたに決まっている。

思い返せば苦い日々。

今、役に立つなんて。

人生なにがあるか分からない。

「オウカの料理はいつもうまいな。アマリリス様なんて、オウカの料理以外食べないなんて言うてたらしいぞ」

「ちょっと。あんたが料理長なんだから、もっとシャキツとしなよ」  
ドルカに怒りつつ、野菜スープの味をみる。  
うん。美味しく出来た。

アズは一向に見付からなかった。  
アマリリスが探ってくれているが、もしかしたら王都にはいないのかも知れない。  
そうならば、探す手立てなどない。  
私は無意識に溜め息を吐いた。

「悩み事か」

「そんなところ」

「俺で良ければ相談に……」  
「結構です」

こんな会話が日常となってしまうた。  
アズは大丈夫だろうか。  
会いたい。  
だから、つい溜め息が出てしまう。

「そう言えば、オウカは【花選び】に参加するのか」  
「何それ」

私が首を傾げると、ドルカは絶句し、呆れた視線を寄越した。  
仕方ないと思う。  
元の時代にはそんなの無かったんだから。  
ドルカは焦る様に教えてくれた。

曰く、その日は舞踏会がある。



曰く、城の者なら誰でも参加出来るので、当番が当たっていない限り出られる。

曰く、気に入った者の腕に自分の身体の一部と同じ色の布を交換しあえば、結ばれると言うこと。  
ぶっちやけ、出会いの場と言うことだ。

「へえ。いつ？」

「3日後だ」

「料理が忙しくなるね」

「そうだな……って違う！」

ドルカは机を叩きつけた。

私は鍋から器にスープを入れながら、意識だけドルカに向ける。

「お、オウカは出ないのか」

「出るも何も、料理長補佐ならそんな時間は……」

「オウカは毎日働いているだろう！一日くらい休めばいいじゃないか」

ピクリと私は動きを止める。

ゆっくりと器を机に置くと、ドルカを睨んだ。

「冗談も大概にしな。あんたは料理長なんだから、今の現状を把握して物を言いなよ」

私の言葉にドルカはぐつと詰まった。

ドルカの言葉は冗談ではない。

最近アマリリスは私の作る料理以外口にしなくなった。

だから栄養を考えるのも、献立を作るのも私。

アマリリスの食事には一切のことを任されていた。

「それに……」

私は目を伏せる。

髪を触れば銀色の糸が見えた。

バンドナで隠してはいるが、目も髪も色が全く違う私をアズが分かるはずがない。

動いている方がまだ気楽。

何も考えなくて良いから。

そして夜が一番嫌い。

どんなに待っても、私の隣には誰もいないから。

「ほら、速く手を動かす！」

私はそう笑いかけた。

一人では寝られなくなってしまった。

寂しい。辛い。

そう言いたくても、今は抱き締めてくれるアズはいない。

「会いたい。会いたいよ。アズ……」

否定していた。

アズを好きだって言うことを。

今更気付くなんて。

#### 4 1 料理長補佐になりました（後書き）

明日は久々のオウカ変態です。  
お楽しみに！

## 42 姉が出来ました

「今日もオウカの料理美味しかった！」

「ありがとう」

私はアマリス親子に笑いかけた。

キョウに聞いた通り、アマリスは一児の母だった。

見た目は20位なのに、実年齢は28らしい。

詐欺だろう。

私と見た目変わらないってどうよ。

さりげなく落ち込むわ。

「ほら、リアリスも笑ってる」

アマリスの子供、ミントは確かに私に微笑んでいた。

あの、浚って良いですか？

だって、この可愛さは犯罪でしょ！

多分、生まれて1ヶ月頃。

ふにゃつとした頬。

ピンクの唇。

アマリスそっくりな、藍色の中に緑色がある神秘的な瞳。

手の小ささとか、足の短さとか。

可愛い。可愛い過ぎる！

あ、やべ。鼻血が。

え、変態？

何それ美味しいの？

私は全世界の叫びを代弁しているに過ぎないし！

「オ、オウカ……大丈夫か」

「らいびょうぶ！」

鼻血を押さえて言うことではないけどね。  
ちよつとアマリリスは引いていた。

アマリリスもかなり可愛い。

白を基調としながら銀の刺繍で鳶が描かれたドレスを着ており、  
身体にフィットしているからか、アマリリスの線の細さが際立ち上  
品に出来ていた。

私には無理な衣装だ。

今度着せ替えたりして遊びたいな。

不穏な空気を感じ取ってか、アマリリスは更に後退する。

その時、ノックがされ、誰かが入ってきた。

「あ………」

私は思わず声を上げる。

「……何をしている？」

アズかと思った。

それぐらい、良く似ていたから。

金色混じりの茶髪。

空みたいに綺麗な青い瞳。

アズと色は微妙に違うけど、その雰囲気と態度。

何より姿が良く似ていた。

私はハツとして、深々と最上級礼をとる。

ここまで似ているのなら、この男が誰かなど、すぐに分かる。

「初めまして。私はアマリリスの妹、オウカと申します」

一応、王妃だったし、これくらいキャサラにミツチリやらされたから出来る。

ガルーシャはアマリリスを見た。

「アマリリス、お前に妹なんていたのか」

「え、ああ。いたよ？」

挙動不審になるなそこ！

この設定はあんたが考えたんだろ。

「ア、マ、リ、リ、ス？」

「い、生き別れなんだ！ 母様達が私みたいにならない様になって、生まれてすぐに山に住む夫婦に……」

「本当に？」

「うっ……」

いやいや、そこで詰まるなよ。

ガルーシャは私の隣を通り過ぎ、アマリリスに詰め寄った。

うわ。なんかデジャブ。

私がアズに追い詰められているみたい。

さすが私の前世。

仕方ない。

助け船を出すか。

「本当です。陛下。私と姉様の魔力量と質を見ていただければ一目瞭然でしょう」

うわ、怖い。

睨み付けられた。

同じ顔なのに、こんな冷たい表情が出来るんだ。

アズにそう見られたと錯覚して、私は思わず凍り付いた。

「……確かに、同じだな。姉妹でも似すぎなくらい」

ガルーシャの言葉に、アマリリスはびくりと揺れる。

それ、モロバレ過ぎだろ！

確かにガルーシャにはバレても良いかな。

そっちの方が、アズを探し易くなるし。

でも、アズに負けたみたいで悔しい！

「あら、まさか私が精霊などと言う訳じゃありませんよね？」

「アマリリスが作った、と言っても通る。それぐらい似すぎて不自然だ」

そんな馬鹿でかい魔力が二つとあって堪るか。

ガルーシャがそう呟いた。

険悪な空気が私とガルーシャの間で流れ出す。

途端に、ミントが火を吹くように泣き出した。

「ミント？」

「ご飯か。下か？」

夫婦揃って慌てだす。

ガルーシャはアマリリスの側でミントを泣き止まそうとしていた。

アマリリスは時間が経つにつれ、ミントが何故泣いているのか分かった様だ。

「オウカ」

アマリリスは私に近寄ってくる。

そのまま、アマリリスはミントを私に渡した。  
やっぱりミント可愛い！

何この生き物。

だ、駄目だ。

また鼻血が出そう。

「おい！　なんか危険な雰囲気だぞっ」

「オウカ……」

ガルーシャは更に慌てて、アマリリスは呆れる。

可愛い過ぎるんだもん！

ミントは私を見上げて、きよとんとしていた。

いいやあああああああ！

可愛い！

鼻っ、鼻血が。

「オウカ！」

アマリリスの声でハツとした。

私は改めてミントを見下ろす。

まるで何かを待っているかの様に、ミントは私をじっとみていた。

「え……と」

頬を引き吊らせていると、ミントは笑って、私に手を伸ばした。

まるで、何かを分かっているかの様に。

「ガルーシャ。ミントはオウカが敵ではないって言うんだから、見逃せ」



あの、アマリスさん。

命令ですよ。それ。

ガルーシャは私とミントを見つつ、何かを考えこむ。

「……良いだろう。こいつはアマリスに一任する」

なんか、ムカツクな。

私は胸の中でガルーシャをフルボッコしながら、表面上出さずに  
事なきを得た。

## 42 姉が出来ました(後書き)

やっと書けました。

コメデイっぽいやつ。

……頑張っていきたいです

### 43 アズに、会いたいよ

この日は朝から大変だった。

花選びで出すメニューの仕込み、当番の分担。

それから、細々とした物品チェックなど。

ドルカは勿論、私は休む暇なんて無い。

髪を一つに束ね、化粧もしてない。

久々にズボンを履いて、走り回る。

昼食も食べたか覚えてない。

でも、仕事に充実感を持っていた。

働くって良いよね。

生き生きしてくる。

4時位だろうか。

ドルカが私を呼んだ。

「何？」

「ん、ちよつと来い」

なんだよ。

こっちはまだやることがあるんだ。

仕様も無かったら、シバキ倒すけどね。

連れていかれたのは、アマリスの部屋の隣。

お先にどうぞと言わんばかりに押し入れられた。

ゆっくり閉められる扉。

目に入ったのは、アマリスと数人の侍女。

しまった。罨か！

引き返そうとしたが扉には鍵がかかっている。

なんでやねん！

「綺麗にしてもらえ」

ミントを抱いたまま、にこやかにアマリリスは言った。

あれよあれよと言う間に、服を剥ぎ取られ、ドレスを着せられ、化粧され、髪を結い上げられた。

あつという間だった。

侍女の手際の良さと行動には負けました。

「似合うな。さすが私の妹」

あんたの生まれ変わりだけどね！

思わず睨み付けてしまう。

侍女達は自分たちの仕事に満足した様に、部屋を出ていった。

アマリリスと二人（あ、ミントを入れて三人か）になり、私はうなだれた。

323

「アマリリス。私仕事があるんだけど」

「……労働生活を謳歌し過ぎだろう」

「うるさい。アズが見つかるまで此処にいるしかないから、仕方ないでしょ」

生まれは一般庶民なんだから、贅沢は好きではない。

働くのは元々好きだし。

アマリリスは苦笑した。

「今日位ゆつくり休め。お前は私の妹と言う事になっているのに」

「……私は」

「アズとやらが来る可能性もあるだろう」

そう言われてしまえば、何も言えない。  
私は視線を落とした。

「私、この時代に来るまで、黒い髪と目だったんだよ？ アズが私だと分かる訳がないよ」

恐らく、アマリリスに合わせて、私の色が変わったんだと思う。  
アマリリスとは違って、世界において、私の存在はアマリリスと同じなのだろう。  
私は拳を握った。

「会いたいか？」

好きだ。

そう自覚してから、気持ちが悪くなった。  
でも同時に苦しい。

「あ、会いたい……っ。アズに、会いたいよっ」

涙は流さない。

初めて、恋をした。

この感情に、私はまだ追い付けない。  
アマリリスは大きく息を吐く。

「……オウカは私と同じ、強がりだな」

そう言いながら、私の拳に手を伸ばした。

「私は両親が亡くなってから、ただ、呆然と過ごした。両親を守るはずの力のせいで、人々から中傷を受け、両親は自ら死ぬことを選

んだ」

何を話すんだと、私は息を飲む。

アマリリスにそんな事があつたなんて、知らなかった。

アマリリスは終わった事だと、静かに笑う。

「強く生きないと、駄目になりそうだったんだよ。ガルーシャと会った時、私は虚栄心にまみれた、汚い人間だった」

自分を実力以上に見せないと、すぐに足元を掬われる気がした。

アマリリスはそう言う。

それはとても寂しいことだと思った。

「私は魔法とは別に、拒絶の力がある」

アマリリスは嘔み碎いて、説明してくれた。

ある時には人を守る盾となり。

ある時には一切を拒絶し。

またある時には吹き飛ばす。

一族の中でも、一番力が強かった。

否、強すぎた。

「たまに、そう言う者が生まれるらしい。一族に限らず、世界の者全て同様に。私の一族にそう言う者が生まれることが多いから、私は幽閉だけで済んだ」

魔法ではないその力を持つ者は真名とは別に花の名が与えられる。

何故、異世界の花の名なのか、誰が決めるのか。

誰も知らない。

なのに、誰もがその子供の名を分かっってしまう。

まるで、神様が決めたかの様にして。

「友人のヘリクリサムは、世界を渡る能力。アネモネは能力の封印  
って具合に能力もバラバラ。でもね」

アマリリスは儂げに笑う。

全てを知っているかの様に。

「私達は必要に迫られて、力を望み、神様は力を与えた。それは分  
かってしまう」

近い揺りかごにミントを入れて、アマリリスは私と額を合わせた。

「望みは力になる。純粹であればあるほど。願え。強く、強く。き  
つとアズと会えるはずだ」

まるで母親の様に、アマリリスはそう言って見せた。

#### 44 花選び、始まります

きらきらだったり、淡い色の清楚だったり、はたまた露出度の高いドレスなど。

まるで異世界に来てるみたいって、実際に来ているだけどさ。花選びの会場では、貴族庶民関係なく、城につとめている者が集っていた。

綺麗なお姉さん達。もしくは、女の子。

この城につとめている人達は貴族に限らず、実力のある人達ばかりだから、体術とかもすっかりと出来て、しかもスタイルが良い。ま、いつ何時何が起こるか分からないもんね。

でもさ、でもさ。

私はドルカの隣で目を輝かせていた。

「うう。リオさんあんな露出激しいの着てる。あ、キャサリンはピシクのフリル！ 可愛い」

「オウカ……」

隣でドルカが額を押さえていた。

え、どうしたの？

頭が痛いのか？

それなら大変！ 速く医務室に行かないと。

「そうじゃなくて。……もう、いいや」

ドルカは項垂れる。

一体どうしたんだろう。

せっかくいつもは見られない格好いいドルカなのに。



「ドルカって料理長だから、筋肉もあって格好良く見えるよね」

料理長はデブってのが頭の中では定番だった。でも、実際そう言う訳にはいかないのよ！常に窯の近くで温度調節したりとか、出来上がった四人前料理を運んだりとか。

時には50人用のご飯の入ったバツカンとかを持たなくてはいけなくなったり。

ぽよんぽよんではやってられない。

筋肉がなけりゃあ、ただのデブ。

むしろ厨房に入るなって感じ。

パティシエさんとか、腱鞘炎になる人も多たって聞くし。

本当に、尊敬します。

「そつ、それでも……オウカだって、綺麗だ」  
「ありがとう」

照れくさくなってしまう。

顔、ちよつと赤くなつてないかな。

あれ、何かドルカがポケットをしきりに気にしてる。

もしかして、お菓子でも入っているのかな。

だったら欲しいかも。

「オ、オウカ！」

「オウカ。楽しんでるか？」

声をかけてきたのはアマリス。

ドルカが何かを言いかけてたけど……何で萎んでいるの？

私はアマリスに笑いかける。

「はい。皆、楽しそうでごちまで楽しくなります」  
「それは良かった。紹介したい者達がいるのだが」

アマリリスの意図を感じ取ったのかのように、ドルカは一礼した。

「私は一度厨房の方を見てきますので、お気になさらず。オウカはこのまま、此処にいればいい」  
「ありがとうございます。お願いします」

ドルカの背を見送り、私はアマリリスに向き直る。

ここは私室ではないから、一応敬語。  
姉妹だと公表もしてないし。

アズが見つつかれば、すぐにでもこの時代から消えるからね。  
余計な種を植え付ける必要はない。

アマリリスは私を見ながら、にやにやしていた。

「お前も罪な奴だな」  
「どついう事？」

私は首を傾げるが、アマリリスは応えない。  
忍び笑いをしながら、私に藍色の布を渡した。  
ただし、限りなく黒に近く、一見ただけでは黒に見える布だった。

「お前の瞳の色だ。特別に作らせた」  
「でも、私は……」  
「アズとやらが見つつかれば、渡せばいいだろう」

そう言って強引に渡してくる。  
仕方なくもらうと、ドレスの肩に結んだ。

私のドレス自体はこの布の色と一緒にだから、別に目立つことはない。

私はアマリリスに連れられ、玉座の近くにまで進んだ。

そこにはガルーシャ、貴族らしい娘と何処か見たことのある青年がいた。

「オウカ。この二人が私の友人であるアネモネとヘリクリサムだ」

え、あのリクの大人バージョン！？

私はしげしげとリクを見つめた。

うわ、背が高い！

しかも、その蒼い目がまん丸だったのにりりしくなってるし。

髪をオールバックにしている、いかにも紳士って感じで。

いくつ？ 一体幾つなの！？

「あの、何か……」

「あ、申し訳ありません。友人にあまりにも似ていたので……」

むしろあんた本人だけだな！

私は目でアマリリスにアイコンタクトをとる。

どうやら、アマリリスも分かった様だ。

「申し遅れました。私は桜華と申します」

私は一応淑女の礼をとる。

すると、リクの隣にいる娘が同じように礼をとった。

「私はアネモネ・ヴィオラント・ブルムングと申します。よろしく  
お願いします。オウカ様」

ん？

ブルムングって、何処かで聞いたことあるかの様な……。

アネモネは私と同じくらいか少し上くらいの年だった。

見事なウエーブを作り上げている栗毛の長髪。

森を表すかの様な綺麗な緑色で、優しげな瞳。

ちよつと待て。

どっかであったことあるぞ。

「彼女は本が大好きでな。いつも本に埋もれているのを、今回リクと二人で引つ張り出してきたんだ」

「アマリリス様！」

アネモネは耳まで赤らめて、抗議する。

本……本……本！？

私は思い出して、悲鳴を上げそうになる口を思わず塞いだ。

「どうした？」

「う……ううん！ 何でもない！！」

高速回転で、私は首を振る。

アマリリスはよく分からないと言った顔で、首を傾げた。

さて、皆さん。

アネモネが誰か分かるでしょうか。

いえ、正確には、誰のご先祖かです！

きつとお忘れになった事とは思いません。

彼女 カーネリア・コステイ・ブルムンクを。

本が大好きで、部屋には本の山。

結構前に会ったつきりだけど、後宮に残っていた姫の一人。

今は薬師長として、城に貢献してくれています。

まさか、こんな所で繋がっていたなんてね。

目から鱗だ。

「オウカ。具合でも……」

「大丈夫っ。大丈夫だから……でも、私人混み苦手ですから、部屋に下がらせて頂きます」

アマリリスが兵の誰かを付けるとか大げさなことを言っていたけど、丁重にお断りする。

少々は魔力が使えるのだ。

体術も出来るし、そうそう危険な目に遭っても大丈夫だろう。

きつちりと庭など死角の多いところには行かないようにと注意を受けて、私はその場を後にした。

#### 45 なんて、私じゃないの？

私は人垣を抜けて、会場を後にした。

城の中にある大きなホール。

いつもは王様の謁見とかに使われている。

庭には噴水があつて綺麗だし、廊下は吹き抜け。

思わず元の世界にはない満天の星空を見てしまう。

会場を出て、空を見上げる。

そこでようやく一息付けた。

あとは部屋に戻るだけ。

「あら、アマリリス？」

そう声をかけられ、思わず振り向いた先　私は、目を見開いた。

其処には20代半ばの男女がいた。

ボンキュッボンってかんじで、躰のラインに良く沿ったドレス。

身長は私よりも高く、見下ろされている。

香水の匂いが鼻につく。

一瞬、レティアかと思った。

でも、何よりも驚いたのは……。

「アズ……？」

誰にも聞こえない、擦れた声で問い掛ける。

レティアもどきが腕を絡めていたのは、間違えるはずもない、アズ  
の姿だった。

アズは私を冷たく見据える。

それは、今まで私に向けたことのない視線だった。

「あら、貴女アマリスではないの？」

女の声にハツとして、私は慌てて一礼する。  
頭を深々と下げ、二人の姿を見ない様にした。

「恐れ多い……私は、オウカと申します」

「そう。似ているから見間違えたわ」

冷笑を浮かべる女。

初めて会った時のレティアの様だ。

恐らく、レティアの先祖……なのだろう。

「ロウ。行きましょう」

「そうだな」

私がアマリスでは無いと分かったからか、女はそう促した。

ロウ。

多分、アズロウのロウを名乗っているんだ。

私はすぐ分かったのに。

アズが私を見る目は冷たい。

分からないの？

私は、此処だよ。

そう念じても、通じる訳がない。

まるで、アズは私を忘れてしまったのかの様に、私に興味がない様に女に付いていく。

止めて。

どす黒い感情が私を支配する。

一瞬で私は分かったのに。

この髪か、この瞳か。

アズは私に分からない。

いくら、アズを知っていると云っても、多分、信じてもらおう事なんて出来ない。

途端に、元の自分ではないことに腹立たしくなる。

なんで、私じゃないの？

アズの隣にいるのが、アズに笑いかけるのが。

貴方が私に言ったのに。

ずっと、側にいて欲しいと。

俺のものだと。

「アズ……！」

私は顔を上げ、アズを見る。

けれども、其処に彼の姿はもう無い。

情けなくて、もう、私の事など忘れてしまったのだと。

目の前が真っ暗になった気がした。

ただ、アズから貰ったネックレスを握りしめる。

何も見たくはない。

気付いたら、走り出していた。

一人になりたかった。

どこか誰も居ない場所へ。

誰も来ない場所へ。

馴れた様に木々を通り抜け、開いた一角に飛び込む。



そこは、色とりどりの花が咲き乱れ、ガゼボがある。  
中央には像がないが、紛れもなく、アマリリスの庭だった。

「どうして……」

頬に涙が流れ落ちた。

悲しい。

寂しい。

愛しい。

そばにいて。

いつか思った思い。

その時はアマリリスに引きずられただけだと思ったけど。

私は関係ないなんて思っていたけど。

苦しい。

私はオウカだと、アズに伝えたい。

でも、拒絶されるのが恐くて。

『なら、僕らと同じになれば良い』

聞こえるのは精霊の声。

囁きながら、私を誘う。

『苦しみも全て無くなる』

『幸せな夢に浸って』

『何も苦しまなくて良い』

ゆらゆらと闇が私に迫り、足首を捕まれた。

これはなんだ？

本当に精霊なのか？

逃げようとして、転んでしまっ。

闇が、私の体を覆い始めた。

感覚が奪われて行く。

「ア、ズ……」

助けて。

来てくれるはずのない人を、求めてしまっ。

来てくれるはずなのに？

涙が溢れる。

意識が消えて行くなか、ただ、思った。

愛してる

46 オウカに似た女(前書き)

ここからアズのターン

## 4 6 オウカに似た女

「ロウ？」

呼ばれて、俺は女を見た。

レティアによく似た女 カナン。

この時代に来た俺を保護してくれたのは、レティアの祖国カスト口だった。

「さっきのアマリリスにの子……」

「なんだ、気付いていたのか」

俺は肩を竦める。

オウカを、間違う筈など無かった。

この世界に来て半年。

俺はカナンとガルーシャの手を借りて、オウカを探した。

帰還方法については、リクが協力してくれる。

まさか、俺にのガルーシャに逢えるとは思っていなかったが。

時間はかかったものの、俺がガルーシャ王の子孫であることは、ガルーシャが納得してくれている。

問題は、いつまで経っても、オウカは見つからなかったことだ。

何処にいるのか？

会いたい。そして、抱き締めたい。

何度そう思ったことが。

だが、実際に会ったオウカは、髪も目も以前魔力を最大まで引き出した時の様にならなっていた。

意識はしっかりとしているが、本当にオウカとしての意識なのか。俺は眼を細めた。

「あの子、可哀想に」

カナンの言葉に、俺は眉をひそめた。

カナンは俺を見て、肩を竦める。

ちなみにこいつと俺の間には何も無い。

今回もただの付き添いだ。

「あの子、貴方を見てかなりショックを受けたみたいね。今頃、きつと泣いているわ」

「ショック？」

言葉の意味が分からない。俺が首を傾げると、カナンは呆れた

様に見上げてくる。

「貴方、彼女を見る時の顔がいつも通りだったわよ」

言われて俺はハツとした。

大抵、俺はオウカや内に入れた者以外には疎外的なところがあるのは自覚している。

こちらに来てから、それが標準になっていた。

オウカに向ける気もなかったし、向けた事もなかった。

だから、ショックを受けたのか。

「カナン！ 来ていたのか」

喜んだ声に、俺は振り向く。

そこにいた女に、息を飲んだ。

銀の長髪を綺麗に編み込み、たおやかな藍と緑の瞳。

魔力共にオウカにそっくりだった。

女は俺を見て、一礼した。

「私はアマリリス。貴殿は……」  
「アマリリス、この人は私の友人の口ウ。【闇】の調査で遠路遙々、会いに来てくれたの」

アマリリス。

こいつが、オウカの前世。

立っているだけで伝わる存在感。

何より、強い意思の籠った瞳。

オウカを彷彿とさせる何かがあった。

「そうか。私は王妃でありながら、この国の結界を作っている。何かあれば言ってくれ」

アマリリスの特殊な力 【祝福】については、以前から知っていた。

歴代王位継承者には、国の裏歴史が伝えられる。

まさか、その時代にいることになるとは思わなかったが。

「闇の進具合は？」

【闇】。

俺の時代にはお伽噺だったが、この時代に来てよく分かった。

魔力に反応し、寄生虫の様に生物に取り付き、心を喰らう。

【闇】に取り付かれた者は、円形に【闇】の結界を張り、【闇】に精神世界で選択を迫られる。

失ったものを入る夢に取り付かれるか、現実を見据えるか。

「今のところ精神医を派遣し、現状把握をしている。私の力は結界

だから、一度入ってしまうと浄化することが出来ない」  
「まだ、ましな方が」

世界の現状は酷いものだ。

幾つかの国が滅んだと聞いている。

一見長閑かでも、急に【闇】に取り付かれるのだから。

「何か具体的な方法は？」

俺の時代にはなくなっているということは、恐らくアマリリスが何かしたはずだ。

今のところ、対抗出来るのはアマリリスだけなのだから。

アマリリスは儚げに笑い、胸元に両手を添えた。

「私は、もうじき死ぬ」

「アマリリス！」

カナンの非難をアマリリスは目線だけで抑えた。

「病か、殺されるか……分からない。だが、遅くとも私は5年以内に死ぬ。その時、私の力を最大まで放出するつもりだ。それで何百年かは大丈夫なはずだ」

少なくとも、この大陸は。

俺は納得した。

だから、俺の時代は安全だった。

しかし、いつまで続くか分からない。

アマリリスとて、完全に【闇】を消し去ることは出来ないのだ。

アマリリスは何かに気付いた様に、俺を見上げてくる。

「お前……」

その時、莫大な魔力が地面を揺らした。



## 47 運命にさえ、奪わせやしない

愛してる

そんな声が、聞こえた気がした。

「な、何よこの魔力は！」

揺れはすぐに治まったが、魔力の圧力がひしひしと伝わってきた。余りの強さに、カナンは慄いている。

圧倒的に凌駕する力。

この魔力を俺は一度味わっていた。

「これは……！」

俺は周りの事など気にする余裕もなく、走り出した。

カナンが俺を呼ぶ。

その声すら気に止めない。

こちらの時代に来てからしか俺を知らないカナンは、さぞかし驚いているだろう。

俺の心を騒がす唯一の存在。

それが、オウカ。

俺がたどった道は、よく知っている場所だった。

オウカが何度も足を運び、泣いていた場所。

何度も俺の腕の中で、泣かせてしまった場所。

アマリリスの庭。

「オウカ！」

俺は呼ぶ。

愛しい者の名を。

アマリリスの庭は、瘴気に包まれていた。

その中央　俺の時代にはアマリリスの像があった場所に黒い円形状の結界が張ってあり、その結界は広がりを見せていた。

そうだ。オウカは根底にある感情を持つ。

【闇】の好きな哀しみを。

失念していた。

オウカには常に気を配っていなければならなかったのに。

哀しみを、苦しみをあまり表に出さないオウカ。

強くもないのに一人で戦うオウカ。

闇の中で苦しそうに瞼を閉じるオウカは、今にでも消えてしまいたい  
そつで。

走り出そうとした俺を、アマリリスが止めた。

「死ぬ気か！　ああなれば、もう、手遅れだ。ここは城の【闇】を  
閉じこめて結界を張っていたのに……くそっ」

「手遅れ？　オウカは、まだ生きているだろう」

「近づけば、ロウ殿も飲み込まれるぞ！」

アマリリスの言葉に嘘はない。

真剣に、俺の身を案じていた。

けれども、この国の未来より、俺自身よりも、大切なものがある。  
留まる訳にはいかない。

「それで良い」

「……なに？」

眉を顰めたアマリリスを、俺は嘲笑した。  
アマリリス。

あんななら、分かるだろう。

俺の気持ち。

何よりも、耐え難いものを。

「オウカは俺の命だ。誰にも　運命にさえ、奪わせやしない」

アマリリスは一瞬目を細め、手の力を抜いた。

一歩後ろに下がり、瞼を閉じる。

すると、アマリリスを中心に、風が吹いた。

編み込んでいた髪がほどけ、銀色が宙を舞う。

強い意志を持つ瞳が、俺を見返した。

「……行け。私の子孫よ。お前が【闇】に呑まれるまでは、【闇】の現状を維持してやる」

不敵に微笑んだ顔は、何処かアマリリスの肖像画を彷彿とさせる。  
俺も笑い返した。

「感謝する」

走り出し、【闇】の中へと走り込む。

その中はとても暗く、躰にオウカの魔力が圧しかかった。

手足が鉛の様に重い。

一瞬でも気を抜けば、意識が持って行かれそう。

俺は拳を握り、爪が皮膚を裂いて血を滲ませる痛みで自我を保つ。

オウカに辿り着くまで長かった。  
この半年、沢山の屍を見てきた。

【闇】に犯された者は、狂気にまみれてしまう。  
そうなれば、殺すことでしか救うことが出来ない。  
何人の命を奪っただろう。

己を守る為に。オウカを探す為に。

夢では何度もオウカが狂気に犯される夢を見た。

俺に救いを求めて助けられない俺がいた。

オウカが死ぬ夢。

悪夢以外の何者でもなく、俺は眠ることが恐かった。

本当にオウカが死んでいたら？

本当にオウカが【闇】にとらわれていたら？

考えるだけでも恐かった。

だから、こんなところで失う訳にはいかない。

オウカが笑っていられる様に。

オウカが幸せになる為に。

俺は、命を賭けよう。

オウカの近くは一段と魔力の圧力が酷かった。

俺はオウカを抱こうとするが、魔力が俺を拒絶する。

「オウカ……俺だ。約束しただろう。側にいて欲しいと。お前は、俺の物だと」

俺は躰が傷付くのも構わずに、オウカを抱き寄せた。

腕が、脚が、血をふく。

そんな痛み、オウカを失うことに比べたら。

「消えるな……愛してる。愛しているんだ」

俺は一層強く抱き締め、オウカの唇を己のそれで塞いだ。

47 運命にさえ、奪わせやしない(後書き)

暑い……死にそう) - - #  
(

## 48 元の世界の現実（前書き）

虐待表現があります。

苦手な方はバックをオススメします。

## 48 元の世界の現実

良く馴染んだ部屋の中。

私は、立っていた。

髪の毛も銀色から黒色に戻っていて。

周囲を見渡す。

完璧と言って良いくらい片づけられた部屋。

埃一つさえないリビング。

大きなテレビに、4人は座れるソファ。

落ち着いた色合いのカーペット。

小さい頃、零と二人で書いて怒られた落書きのある壁。

母が好きだった観葉植物。

机に置かれた父の新聞。

そこは、私の家　鳥籠だった。

「桜華！」

リビングに入って来た人影に、私は振り向く。

両親が、廊下からリビングに続く扉の所に立っていた。

思わず躰が震える。

つい最近の様に行われていた暴力を、躰は忘れていない様だ。

「一体何処にいったんだ!!」

そう言って二人は近づいてくる。

思わず目を堅く閉じた。

この後大抵待っているのは、永遠にも続く絶望と痛み。

それを思い出して、躰の震えが止められなかった。

.....。



.....。  
.....？

いつまで経っても来ないそれに、私は目を開ける。  
其処には、私を抱き締める二人の姿があった。  
暖かい。

そう、感じてしまうほど、二人の顔は優しくかった。

「今まで、痛かっただろう。ごめん。ごめんな」  
「やり直したいの。もう一度、四人で」

望んでいた。

私が一番望んでいたこと。

それは、両親が幼い頃の様な優しい両親に戻ってくれる事だった。  
会社が倒産しても、二人は明るかった。

その笑顔が、優しさが消えたのは私が小学校上がってまもなくのこと。

家に帰ると零の悲鳴、鳴き声。

そして、零を壁にぶつける音。

家に帰るたびに見る悪夢。

私が零を守ると、両親は私にも容赦のない体裁を加えた。

私も、零も堪えた。

両親がいつか、元に戻ってくれるのを夢見て。

「お姉ちゃん」

零が、私の服を引っ張った。  
笑ってる。

失ったもの。

大切だったもの。

それが、今。

側にある。

でも、でもね。

なにか、違和感があるの。

「 本当に、零？」

私の中で、何かが引つかかった。  
認めたくない、何か。

でも、それが私の自我を保たせていた。

零はいつもの明るい笑顔で笑いながら、私の手を握る。

「 そうだよ。覚えてないの？ 僕が死んだ日のこと」

死ん………だ？

私は状況が飲み込めなくて、零を直視する。

零はそのまま、私に説明してくれた。

「 そう。父さんと母さんが僕を事故死に見せかけてね。一度、婚約で会社を建て直したでしょ？ でも、相手も相当な暴力者でね。正気に戻った二人がお姉ちゃんを安全な所へ避難させようとした矢先に、衝突事故 意味、分かる？」

それは。

それは………！

私は認めたくなくて。

零の言っている事が嘘だと思う。

でも、なんで零は少年のままなのか。

本当なら、もう少し成長していても良いのではないのか。

いや、この夢自体が幻ではないだろうか。  
そんなことを考えた私を否定する様に、母が口を開く。

「此処は死者と会える場所。それが【闇】と呼ばれる世界。自然の摂理を、次元をゆがめて迄生み出された悲しき世界。私達全員が、死んでいるのよ」

死んでいる？

そんなはずはない。

だって……だって、私は生きているもの。

アズと触れあつて、沢山の人と出会った。

それは、確かにある記憶。

あれ自体が幻だったと言うの？

「それは違う。正確には、桜華以外が死んでいるんだ。桜華は事故の直前、光に包まれた。異世界に飛ばされたと知ったのは、死んでここに来てからだ」

ヘリクリサムの力。

彼は、私だけを救ったのだ。

そして、アズのいる世界に送った。

「もう一度、四人で暮らそう。今度こそ、幸せに」

私は家族を見る。

皆、笑っていた。

私の望んでいた言葉。

幸せになれる？

今度こそ？

私は瞼を閉じて想像する。

また、あの優しい空間に戻るのなら。

また、あの頃に戻るのなら。

何の為に元の世界に戻る為の呪文を作ったか。

これは、夢？ ううん。違う。

本当に皆が死んだのなら、元の世界に戻る必要はない。

ここで、幸せになればいい。

私が、一番望んでいたことだから。

「私は……」

## 48 元の世界の現実（後書き）

実は言うほど悪役でもない両親。  
人間、何で狂うか分かりません。

## 49 今を精一杯に

「私は……」

私が、選ぶのは。

言おうとした時、私は手を握った。

もう一度だけ、家族を見る。

オウカ！

切羽詰まった声が、闇の中に響く。

消えるな……。愛してる。愛しているんだ。

切なげに告白する声。

両親はその声を聞くと、私から離れた。

そして、零の躰を引き寄せる。

「……ごめんね」

私の答えに、特に驚くべき様子もなく、両親は引き止めなかった。

両親も、零も笑っていた。

作り物でもない、彼等が本物であると確信出来る世界。

この【闇】の世界は、残酷で悲しく 暖かい世界。

私は、泣いていた。

悲しくて、嬉しくて。

側にいたい。

でも、私もアズを愛しているの。

大好きなの。  
やっと、気付いたの。

「笑いなさい。お前は、そこらの花とは違う。艶やかな華の様に舞う桜なのだから」

父が、そう言った。

包容力のある人だった。

常に前向きで、狂ってしまうまで、私にこの笑みをくれた。

「お姉ちゃん。僕、お姉ちゃんの弟で良かったよ」

零が、微笑んだ。

ゴメンね。

いつも庇っていた。

でも、何もしてあげられなかった弟。

最後まで、私を好きでいてくれるんだね。

「行きなさい。貴女の選んだ、共に生きてくれる人のもとへ」

母が、私の背中を押してくれる。

儂い人だった。

綺麗で、花言葉の本を私と零にくれた人。

優しく、見送ってくれる。

「ありがとう……大好き」

桜が舞い始める。

それが、私の【祝福】だと直感で分かる。  
そうか。

だから、私は微笑む。

この名をくれた両親に。

私に生きる意味を持たせてくれた弟に。

幸せになるよ

\*\*\*\*\*

一瞬、風が吹いた気がした。

此処はまだ【闇】の内部だ。

肌でそう感じた私は【祝福】を発動させる。

桜の花びらが、何処からともなく舞い始めた。

それが、【闇】の内部を浄化し始める。

桜は浄化の力を持つ木。

桜に魅せられ、狂う者もいると聞くが、年限を重ねた桜は神聖な樹であり、浄化をともしている。

私に与えられた【祝福】は【浄化】。

私に桜華と言う名前が付けられたのも、偶然では無いのかも知れない。

「オウカ……？」

震える様な呼びかけに、私はうつすらと目を開ける。

其処には、アズが顔をゆがめていた。

大丈夫だよ。

そう言う意味を込めて、私は微笑む。



「ア、ズ……」

私の呼びかけに頬を綻ばせ、アズは私にキスをする。  
強く抱き締めた腕。

私を引き止めてくれたこの人。

私の、愛する人。

「アズが呼んでくれたから……戻って来たよ」

それ以上、言葉なんていらなかった。

浄化された所から命が芽吹いてゆく。

黒に包まれた世界は、月の光を浴びながら、一面に花を咲かせていた。

「さすがは【後継者】だな」

アズに抱き上げられ、声のした方を見れば、アマリリスとガル―  
シヤがいた。

ガル―シヤの様子からして、全てを分かっている様だった。

アマリリスは額に汗を浮かべつつ、微笑んでいる。

途中吹いた風は、彼女のものだ。

恐らく【闇】を止める為に結界を張ってくれたのだろう。

私はアズを目線だけ促して、降ろしてもらおう。

初めて【祝福】を使ったからか、躰はふらつき、アズに支えて貰  
った。

「身分を偽ったことを、お詫び致します。 もっとも、気付かれ  
ている様でしたけど」

「ああ。似すぎている癖に、精霊ではない。俺はアズロウに協力し  
てお前を捜していたからな。直感で分かったから、カナンに協力し

てもらい、アズロウを連れてきて貰った」

カナンと呼ばれた女性は、レティアの祖先だった。  
先程、アズと一緒にいた女性。

彼女は私にほほえみかける。

「私の子孫と仲良くして下さっている様で。御礼申します  
いいえ！ いつもレティアには助けて貰ってばかりで」

礼儀正しい。

いや、レティアがそうじゃないとは言っていない。

なんて言うか、こう……そう。

鮮麗された美しさって言うの？

レティアと確かに似てはいるものの、雰囲気は全然ちが……

「それにしても、可愛い子。私の国にお持ち帰りしたい」

……はい。この人は、やっぱりレティアの祖先です。

女好きは祖先からだったか。

アズが慌てて私を抱き締め、カナンを威嚇し始める。

いや、大丈夫。

変な世界に連れて行かれることはないから。

「生まれ変わりでも、【祝福】は違うのだな」

アマリリスは感慨深げにそう言った。

神様から与えられる、魔力とは違う【祝福】。

それは決められた定めの中で手に入れた物なのかも知れない。  
けれど、多分私の力は……。

「この力は、アマリリスが願ったから私に与えられたんだと思う」

私はアマリリスにそう言った。

アマリリスは私を見て、一瞬驚いた表情をして、微笑んだ。

「そうだな。私はその力がずっと欲しかった。誰もを救える力を」

苦しげな、笑顔。

でも、私を信頼していると目が語っている。

「アネモネに、私の真名を封印して貰っている。ガルシーシャ以外、私の真名を知るものはいない。オウカ。私の真名は【虚栄】に基づいて名付けられているらしいが 分かるか？」

アマリリスの花言葉。

【虚栄心】。

それを揶揄する言葉なら多く知っている。

けれど、アマリリスは前に言った。

私は、虚栄心にまみれた、汚い人間だった。

虚栄心の強い女。

英語なら、知っている。

「a vain woman……貴女の名は【ヴァイン】」

ふわりと風が吹く。

銀色の長髪がたなびき、白い清楚なドレスを着たもう一人のアマリリスが現れる。

躰は透けており、今のアマリリスよりも優しげで包容力のある雰

困気を醸し出していた。

「オウカ。理を受け入れてくれて、ありがとう」

今までの様子を、どうやら見ていたらしい。

確かに、この時代のアマリリスには私が家族と会っていたなんて知らないもんね。

アマリリスは振り向き、この時代の自分に一礼する。

「一つ。その喋り方は治した方が良いわ」

「余計なお世話だ」

この時代のアマリリスが頬を膨らませる。

なんか、ドツペルゲンガーが3人いるような感じだ。

アマリリスは次いで、ガルーシャを見た。

頬を綻ばせ、悲しげに、でも熱を持った眼でガルーシャに微笑みかける。

「ガルフエリーシャ。ずっと、ずっと……愛してる」

それだけを言っつて、アマリリスは消えてゆく。

風が吹き、アマリリスの躰は無数の花びらをなっつて消えた。

誰もがただ、それを見つめる。

その儚さに、美しさに。

「……自分の亡霊に説教されるとは思わなかつたな」

アマリリスは溜息を吐きながら、私達を見た。

「これから、どうするつもりだ」

「ヘリクリサムに元の時代に返して貰うつもりだ。それから、この時代であった犠牲を出さない様に【闇】に対しての対策を」

「私の力を使つて、浄化を世界にばらまく」

私の言葉に、アマリリスは目を細める。

アマリリスは命を使つて、力を最大に広げたんだと思う。

それは【祝福】を持った私には容易に想像出来た。

「私は死なない。アズと一緒に生きたいから。私が言いたいのは、世界に桜を植えるつて事」

「桜？」

「そう。私の世界にあった華。私の名前の元にもなった桜を、世界中に植えるの。私の【祝福】の源は桜だから。うまくいけば【闇】は浄化出来ると思う」

簡単ではないだろう。

何年もかけなければ出来ない計画だ。

でも、アズと一緒にだから。

この賢王が共に歩んでくれるのなら、きっと出来る。  
ううん。

私の時代に出来なくても、私の子供、そして子孫の時代にはきつと。

この世界に桜はない。

それに、桜に力を出させようとしたら、私の力も必要になるかも知れない。

だから、この仕事は私の仕事。

「そうか。なら、未来に託そう。私達も、今を精一杯に」

今を精一杯に。

それが、運命へと繋がるから。

私がアズの手を握ると、アズもそつと握り返してくれる。  
大丈夫。

この人がいるなら、何処にでも行ける。

何でも、出来る。

誰もが、未来で笑っていられる様に。

## 50 花より華の様に舞う桜

一陣の風が吹いた。

私はラグから身を起こす。

目を細め、窓を開けた。

広がるは桜が咲き誇る庭。

舞う花びらを眺めながら、私は笑みをこぼす。

私達が戻って来てから、7年が経っていた。

「ははうええ！ りりいがいじめるう」

部屋の中に飛び込んで来た我が子を、私は迎え入れる。

次いで、金髪の美少女が扉を蹴破って入って来た。

「あ、スイレン！ あんた男でしょうっ」

美少女はくりくりした目を鋭くして、我が子スイレンを睨み付ける。

可愛いんだけどね。

母親似の気の強さとか。

スイレンは気の弱い子だから、手加減してくれると助かるんだけど。

「だって、りりいがあ」

「スイレン。剣ぐらい持てなくて、一国の王太子なんて笑えないわよ！」

「れきおじさんよりこわいつ」

まあ、母親似で、剣の才能は有りすぎて困るが。

私は笑いながら、しがみつくとスイレンの頭を撫でた。  
子供特有のパウダーの香りは好きだ。

「今日はアマリリスの庭を散歩しよう。今日の勉強は終わったでしょ？」

私の言葉に、二人は目を輝かせて頷く。

側に仕えるキャサラに確認を取ると、不安気にはなっているものの、許可してくれた。

「余り御無理は為さらないで下さいますよう」

口煩くなったのは、私が二番目の子供を宿してからだ。

いや、それまでも煩く言っていたんだけどね。

夏には会える二番目の愛しい我が子を撫でながら、私は転ばない様に気を付ける。

アグロを射止めたレティアは、今レキと国境近くまで任務に向いている。

レキとキャサラはいつくつついてくれるのか、見物だ。

「ははうえー！」

私はアマリリスの庭を駆け回る子供たちを見て、目を細めた。

桜に囲まれたアマリリスの庭。

世界中に桜を植える政策が進んでいる。

しかし、気候が合わないところもある為、カーネリアを筆頭に品種改良を繰り返しながら。

着実に、アマリリスが、皆が望んだことが、形になり始めているのだ。



「オウカ」

愛しい人が、私の名を呼ぶ。

私は振り向き、アズに抱きついた。

いつまでも皆が笑っていられる様に。

それが、私の仕事。

ねえ、アマリリス。

私は、幸せだよ。

## 50 花より華の様に舞う桜（後書き）

これにて完結。

え、無理やりすぎ？

……まあ、ハッピーエンドなんで、大目に見てやって下さい。

伏線幾つか回収してないですけどね。

すいません。

本当にすいません。

読んで頂き、ありがとうございました。

また、違う作品で出会えることを祈ってます。

## 1 そして、始まる物語

俺の名はスイレン。

いや、本当はもつと長い名前のはずなんだけど。面倒だから、それで良い。

母親は王妃のオウカ（洒落か？）

父親はこの国の王であるアズロウ。

「兄様。はい。ガナツフのジュース」

妹はサラ。

最近、いたずらが多くなつてつて、妹よ。

ガナツフは激辛じゃあなかったか？

「スイレン！ 剣の相手して」

母さんの専属騎士、レティアさんの娘リリイ。

親子揃って気が強い。

しかも、レティアさんは一国の王女？

おい。誰か責任者を呼べ！

「いや、うん。ごめんな」

俺の心の同志で、リリイの双子の兄ギルバード。通称ギル。

こいつだけだ！

俺の悩みを分かってくれるのは！！

「スウ？」

俺が執務室で死んだふりをしていると、母さんが入って来た。  
40歳前後とは思えないくらい若くて、実は20歳後半だとたま  
に思ってしまう。

ってことは、俺はいつ生まれた!?

「スウ。大丈夫?」

俺をスウと呼ぶのは母さんだけだ。

俺はのっそり起き上がる。

「大丈夫だよ。母さん」

「アズが呼んでるよ」

立ち上がり、歩き出す。

そして、始まる物語。



1 そして、始まる物語（後書き）

番外編。

オウカの息子こと、スイレン君の物語。

始まり始まり〜（ノゝ\*）

## 2 日常はハードだ

小さい頃から夢を見る。

誰かの手を握っている夢。

その人は綺麗な緑色の目で。

いつも苦しそうで。

泣いてばかりで。

手を、差し伸べたかった。

\*\*\*\*\*

「朝よ。スイレン！」

そんな安眠妨害な大声に、俺は寒気を覚えてベッドから転げ落ちた。

同時に重量がありそうな棒が、俺の寝ていた場所に振り下ろされる。

「それは死ぬだろう。暴……」

「スイレン。レディに向かって、暴力女とか怪力とか言わないわよね？」

「誰がレディだ！」

って、何で誰もこいつの侵入を止めないんだ！？

扉の方を見れば、見張りの兵士達が震え上がっている。  
お前等男たる！

ある意味男より強いリリイに、俺は溜め息しか出ない。

「で。まだ起床には早すぎるが、なんだ」

まだ日が昇るまで時間がある。

まあ、何を言うかなど、分かりきったことだが。

リリイは胸を張り、棒の先端を俺に向けた。

「朝の鍛練に決まっているでしょう！ 自分の身一つ護れなくてどうするっての？」

いや、そうだがな。

一応レディを名乗るなら、鍛練はいらなと思います。

男義溢れるリリイにまたしても溜め息が零れた。

リリイは可愛い。

いや、むしろ綺麗と言うか。

さらさらの金髪を一つに束ね、簡易な男物を着けていても気品が漂っている。

多分、幼馴染みと言うことを抜いても、それなりの格好さえすれば誰しもが振り向くだろう。

でも、何も中身までレティアさんに似なくても良いと思う。

おかげで純粋な勝負なら、俺と互角だ。

これでは男のプライドが……。

「よし、行くか」

体力で負けて、俺は本気で執務を減らそうかと考えた。



\*\*\*\*\*

「兄様。兄様」

愛らしい声を上げて、最愛の妹を机越しに見る。

父さんと同じ髪の色は、光に反射して輝いていた。

母さんが本気で怒った時に見た、限りなく黒に近い俺と同じ藍色の瞳。

俺の髪は母さん似だけど、サラはよく二人の遺伝子を受け継いだと思う。

サラはニコニコしながら、俺にある花を渡してきた。

「アマリーのところでもらったから、あげる」

アマリーとはアマリリスの庭のことだ。

あの場所は一年中桜が咲き誇り、様々な命が芽吹く。

しかし！

手渡されたのは明るい水色の花。

花びらに模様があり、不思議な雰囲気を漂わせた。

いやいやいやいや！

これは睡眠薬の原花だぞ。

アマリリスの庭でも滅多に見られない。

花びら一枚食べただけで3日は眠る。

死ねと？

五枚も食べたなら死ぬんじゃないだろうか！？

「あ、ありがとう……」

それでも妹からの贈り物だ。

受けとる以外の選択肢は、俺にない。

用量適用を守って、正しく使わして貰おう。

「スイレン」

「ギルが、大量の書類を持って部屋に入ってきた。  
な、に……これは。」

「この間の夜会の報告書だ」

「たかが夜会の報告書が、何でここまで多くなる！  
頭を抱えても、何かが変わる訳でもない。  
18になると、色々あるんですよ。」

「頑張つて。兄様！」

サラの声が、むなしく俺の胸に響いた。

### 3 夢現の世界で

夢を見る。

彼女は俺を泣きながら見上げた。

綺麗な緑色の瞳が歪む。

「何で……何で、あの子ばかりがっ」

親友の亡骸の前で、彼女は泣き崩れた。

その死は必然だった。

避けられないもの。

それを悔やんでいた。

「何で、私には力がないの？ 誰かを護れる強さが」

誰かを護れる様になりたい彼女。

俺は呆然と見ることにしか出来なくて。

彼女は、親友の胸に手をおき、【力】を開放した。

それは親友との約束。

しかし、そうしたくはなかった。

これで親友の魂は縛られる。

【後継者】が現れるまで。

何も出来ない。

それは、俺のほうだ。

彼女に、何もしてやることが出来ない。

\*\*\*\*\*

「スイレン」

俺の頬を誰かが撫でた。  
目を開ければ、リリイが微笑んでいる。  
優しげに。

それはいつものリリイではなくて、彼女を髣髴とさせた。

「大丈夫よ」

リリイはつむぐ。

全てを分かっているかのように。

ああ。そうだ。

リリイも、【花】の名をもつ者。

母さんがたまに俺達を見て、悲しげになるのも。  
それがあつてのこと。

「もう、昔のこと。私達はここで生きているわ」

泣きたくて。

愛しくて。

俺はリリイの手を握る。

「皆、幸せに。オウカ様の願いでしょう」

知っているのはリリイだけ。

俺が前世の記憶があることを。

俺が自分の力不足で大切なものを失ったことを。

彼女が好きなことを。

俺の、初恋だったことを。

「助け、られなかったんだ」

「そうね」

「母さんとも前世で会ってて……アマリリスが死ぬことだって分かってたのに」

「ええ」

「彼女を、アネモネを救えなかった」

「……」

リリイの手にこめる力を強くする。

すると、リリイも握り返してきた。

同じ【純粹】だからか。

リリイは俺の感情に聡い。

俺が自分の心を殺さずに入れたのも、リリイがいたから。

「アネモネが泣いている夢を見るんだ」

「大丈夫」

リリイはそういつて微笑んだ。

俺の悲しみを唯一共有してくれるリリイ。

いつもは少々強引だが、こういうときはアネモネがいるみたいだ。

「私達は【純粹】をもつ者。救えなかったのは、私達二人の業よ。

スイレンだけじゃない」

「でも、俺は」

「アネモネも、生まれ変わる。きっと、分かるときがくるわ」

眠りましょう。

リリイはそういつて俺の臉を撫でた。

俺は夢現の世界に吸い込まれてゆく。

ああ、リリイ。

ごめん。これは、俺の

【ヘリクリサム】の、業なんだ。

### 3 夢現の世界で（後書き）

お待たせいたしました！

複線（むしろ正解）書きまくりの今話でした。

全て回収できるのか！？

亀更新でも、よろしくお願いします……

#### 4 おめでた？

「子供が出来ちゃった（はーと）」

ちよつと待て。母さん。

俺を見上げてくる姿はまるで40とは思えないくらい若く、可愛い。

こんなことを言えば、マザコンの気を心配されるが、断じて違う。腰まで伸びたさらさらストレートは結んでおらず、小柄なのに俺を産んでからでかくなったらしい豊満な胸。

くりくりした黒い瞳が俺を映し、嬉しそうに頬を緩ませる。

その姿は、幼い頃に母さんが描いた『ウサギ』の様だ。

本当に40かこの人！？

「へ、へえ」

「今、4ヶ月なんだって」

「……ふうん」

「スウは、嬉しくないの？」

しゅんつとしている様が、何とも可愛い!!

レティアさんが国に連れて帰りたいたいと言つのも頷ける。

「父さんは知ってる？」

「……ううん」

母さんは首を振った。

その気持ちは分からないでも無い。

父さんが母さんを溺愛しているのは、端から見ても分かりやすい。サラが出来た時は俺まで面会謝絶にされた。



少し運動して体力をつけないと出産に望めないとわれて、渋々庭への外出は許可していたが。

この世界で母さんくらいの年になると、高齢出産で母子共に死ぬ確立が高い。

父さんが言い出しそうなことぐらい想像がついた。

それは余りに愛しているが為に。

父さんは母さんが消えたらきつと狂ってしまうから。

「でも、産みたいんですよ」

「……うん」

母さんは膨らみ始めてもいない腹を愛し気に撫でた。

本当は俺だつて止めたい。

だけど、母さんが望むなら叶えてやりたい。

そう思うと、前世の様な【渡り】の力がないことが歯痒くなる。

母さんの世界なら、安全に産めただろうから。

「スウ。私は、スウが産まれてくれて嬉しいよ？」

俺はハツとして母さんを見る。

その目は、何もかも見透かしている気がした。

母さんは俺を抱き寄せて、背を撫でてくる。

気持ち良い感触に、俺は瞼を閉じた。

「スウが産まれた時、とても嬉しかった。やっと、やっとあの  
「オウカ」

母さんを包む様に、父さんの腕が母さんを捕らえる。

待て。親父よ。

息子にまで嫉妬剥き出しで睨んでこないでくれ。

母さんは少々我に返った様で、父さんを見上げついている。するといつもの様に、穏やかな笑みを浮かべた。

「父さん、母さん妊娠したんだって」  
「スウ！」

先手を打って俺が父さんに報告する。

このままだと母さん報告しないだろうし。

父さんは……まあ、驚くだろうね。

瞠目して固まった。

「本当か……？」

「え、あ、はい……」

父さんは予想通りに眉を寄せ、母さんを見下ろす。

父さんは王としての威厳も風格も持ちあわせているからか、立っているだけで威圧感がある。

母さんは可哀想なくらい青褪めていた。

「何カ月目だ」

「よ、4ヶ月」

母さんは恐る恐る答える。

父さんは俯いて、その表情は見えない。

その拳は震え始めた。

「あ、アズ。私は……」

「レティア……」

母さんを遮り、父さんはレティアさんと呼ぶ。

俺と母さんを放置。

入って来たレティアさんに、父さんは指示を飛ばした。

「オウカの警護を増やせ。それからオウカの行動範囲の制限を医者  
と相談するから、スケジュールの調整を。オウカの仕事は今から振  
り分ける様にアグロに伝える。それから」

「アズ！ 私、産んで良いの？」

母さんの問いかけに、父さんは微笑む。

その顔を見て、俺は理解した。

新たに宿った命。

それを産もうとするのは、母さんが父さんを愛しているから。

「当たり前だ。名前はどうしたい。もう決まっているか」

父さんの反応に、母さんは戸惑いを隠せない。

俺は微笑ましく思いながら、部屋を出ようとする。

それを母さんが止めた。

「スウ。私は貴方が好きだから産んだの」

そう言えば、ヘリクリサムは母さんの『弟』として生まれたこと  
もあつたな。

俺は恐くて振り返れない。

俺がヘリクリサムだと、知られているのか。

母さんは今までヘリクリサムとして、俺を見ていたのか。  
知るのが怖い気がした。

「俺も好きだよ。母さん」

俺はそう言って、部屋から退出した。

#### 4 おめでた？（後書き）

お待たせしました！

時間はかかりますが、ゆっくり付き合ってくださいませ

## 5 拒絶

それは突然。

俺の視界が塗りつぶされる。

奴を俺は知っている。

何よりも俺に近くて、何よりも俺と同じ【闇】。

「やあ、スイレン」

\*\*\*\*\*

俺は城から出てツイファールと言う街に来ていた。

鉱山で生活し、また、山の掟を守る者達。

しかし、つい最近この近くで【綻び】が生じたらしい。

母さんの政策は浸透しつつあると言っても、国境近くのこの街にはまだされていなかった。

この鉱山で取れるのは魔力を含むとされる蒼い宝石ブルラズ。

母さんの政策は一部欠陥が生じていた。

それは魔力の無効化。

蒼いだけでブルラズとは判断されない。

だから魔力を無効化する桜があつては、その石がブルラズなのかどうか分からないのだ。

俺とリリイ。

それから護衛に数人の騎士と此処へ調査をしに来た訳だ。

【綻び】が生じていれば、【闇】が広がる可能性が高い。

そうなれば【闇】に囚われる者が出てくるのだ。

【綻び】を【修復】するのは何も母さんの【浄化】だけではない。

俺やリリイの【純粹】もその作業に適しているのだ。

母さんと俺達の力の違いなんて、説明するのが難しいけど。

似ている様で違う。

例えるなら俺達が白いキャンパスで、母さんは白い絵の具と言ったところか。

上に違う色で塗り潰されたら、白い絵の具で塗り替える。

それが【浄化】。

俺達は……。

「スイレン、着いたわよ」

俺はハツとして顔を上げる。

そこには気遣わしげなリリイの姿があった。

首を振り、リリイに微笑みかける。

「そつだな。始めるか」

【綻び】を治せる者は限られている。

ただの魔法使い達にそれを担うことなどできない。

精々結界を張って食い止めるぐらいが上々と言ったところか。

俺は手をかざす。

同時に風が頬を撫でた。

その風が、俺の心を落ち着かせる。

【我が名はスイレン。純粹の力を統べし者】

【我が名はリリイ。スイレンと同じく純粹を統べし者】

言の葉を紡ぐ。

言の葉を紡ぐことによって集中力が高まるからだ。

力は具現化し、ダイヤモンドダストの様な光が現れる。

後ろから息を吐くような気配がした。

そつだな。

確かに、綺麗だもんな。

【綻び】は本当にあつたかの様に消滅する。

この力は諸刃の剣。

母さんは元の色に戻すと言う作業なら、俺達はキャンパス自体を入れ替える。

ダイヤモンドダストの様な光は、破った紙くずと同じなのだ。

「スイレン、大丈夫？」

「リレイこそ。力加減は間違いないな」

「当たり前よ」

大き過ぎる力は負担にしかない。

二人で力を使わなければ、命を縮めるかも知れない。

過去最強の力。

その時、異変は起きた。

スイレン

誰かが俺を呼ぶ。

それに振り返った瞬間、俺は目を見開き、動けなくなった。

風が吹く。

紫の光と共に。

そこには奴がいた。

「お前は……！」

声が出ない。

溢れる闇。

消滅した。

そのはずなのに。



リリイも目を見開く。  
下には魔方阵。  
しかも、後ろの騎士までも広がる広範囲。

「どっ……いっ……」

「喋らない方がよいよ。何。君を悪い様にはしない」  
「スイレン！」

俺の前で、リリイは剣を抜く。  
この魔力放出が分からない訳ではないはずなのに。  
奴はリリイに微笑みかけた。

「変わらないね。君は」

奴の眼光が増す。  
同時にリリイは崩れた。  
駆け寄ろうにも、声さえ出ない。  
糞っ。忌々しい。  
奴は俺の前で笑った。  
嫌な予感。

「悪い様にはしない。僕は、約束を果たしに来ただけだから」

だから、その体。借りるよ？

俺の意識はそれ以上保つことはない。  
奴は【ヘリクリサム】。

俺の前世であり、【闇】の一部。

最後に浮かんだのはあの人の顔ではなく、目の前で崩れた娘の苦痛に歪んだ顔だった。



## 5 拒絶（後書き）

まだ読んで頂いていて、ありがとうございます！  
ぼちぼち携帯で投稿始めようかと思えます。

## 6 永き刻を生きた者

ふと、私は顔を上げた。

懐かしい気配が近づいてくる気がする。

風が吹き、【闇】の訪れを予期させた。

今、【闇】に触れる訳にはいかない。

そっと、己の腹を撫でる。

いや、大丈夫ね。

この子は、きっと。

「オウカ」

呼ばれた名前。

独りでに窓が開き、黒い風が吹いた。

現れるのは、スイレンの体を使った、誰か。

私は、彼を知っている。

「リク……?」

【ヘリクリサム】

私の弟であり、アマリリスの友人であった男。

現れた彼の腕の中には、リレイが眠っていた。

まだスイレンとリレイの帰還報告は受けていない。

だけど、目の前にはリクがいると言うことは、闇を伝ってスイレンに入り込んだのか。

リクはベッドの上にリレイを寝かせると、私を抱き締めた。

妊娠しているのを知っているのか、その抱擁は優しい。

私もリクの背中に手を回して、子供をあやすように緩く叩いた。

「約束の、お別れを、言いに」  
「だから、スイレンの体を借りたのね」

無断で借りたら、アネモネに怒られるよ？

私がそう訴えると、リクは苦笑してリリイに視線を移した。

その瞳はとても優しく、愛おしい。

それで、薄々感じていた予感が確信に変わった。

「生まれ変わっても、アネモネはアネモネだ」

「あら。リクだってそうじゃない」

リクの頬を手で包んで、私は微笑んだ。

不器用な男。

彼の周りで誰しもが死んでいった。

親も、友人も、親友も、そして恋人も。

一人残された男は妄執となって世界に留まった。

生まれ変わっても、現世と前世の人格が別れてしまうほどに。

どんなに辛かっただろう。

どんなに悲しかっただろう。

それは、私には計りきれない感情だった。

だから、抱き締める。

その人格がスイレンの中に溶けてしまう前に。

「大好きだよ。アマリス。いや、桜華姉さん」

「私も、大好きよ。ヘリクリサム。いえ、零ちゃん」

零ちゃんって、女の子じゃないんだから。

リクはそう笑ってリリイを見る。

細めた目の先、彼は、きっとその思いすらすり減らしてこの世界に留まっていたに違いない。

大切な友人の為に。  
親友の為に。

そして、恋人が生まれて変わってくるその時まで。

「健やかに」

リクは倒れて私が支えても問題ないように、ベッドに腰掛けた。  
リクの意味が溶けてゆく。

つなぎ止めようとした自身の腕を、私は押さえつけた。  
漸く、リクは眠れるのだ。

果てしない刻の中を、時空の狭間を旅していた彼が。

「愛してる。 アネモネ」

その言葉を最後に、リクは消滅した。  
出る涙を止められなくて。

でも、彼が漸く眠れることに安堵して。

私は声を押し殺す。

暖かいぬくもりが私を抱き締めてくれる。

それが誰か見なくても分かるようになったのは、いつからか。  
そうだ。

私が生まれ変わって、こちらに来たのも。

大好きな人に巡り会えたのも。

前を向けるようになったのも。

始まりは、ヘリクリサムだった。

「ありがとう。ありがとう……」

アズの腕の中で語りかける。

瞼の裏。

「遅い」なんて起こったアネモネ。

それに驚く彼。

花畑の中。

アネモネが差し出した手を握る、ヘリクリサムの姿が見えた気がした。

## 6 永き刻を生きた者（後書き）

大分お久し振りです。

これでヘリクリサムに関してはすっかりしましたでしょうか。

何としてでも幸せに逝って欲しかったので、こういう結果になりました。

続きはスイレン君です。

t o b e c o n t i n u e d ! !



## 7 初恋の行方

暖かいぬくもりが頬に触れて、俺は瞼を開けた。  
真っ先に見えたのは、何処かの庭だった。  
優しく、俺に微笑みかける女性を見て、思わず息を飲む。

「アネモネ……？」

栗色の長髪に、優しげな緑色の瞳。  
頬に触れる手のぬくもりは暖かい。  
ああ、これは夢なのか？

「こうして話すのは初めましてね、スイレン。ここは【闇】の中。  
人の真相心理を読んで、馴染み深い場所へ姿を変える場所よ」

ふんわりとアネモネは微笑んだ。  
それは、記憶に違わないもので。  
懐かしくて、愛しくて、泣きたくなった。

「アネモネ……」

「泣かないで。スイレン」

抱き締められ、甘い香りが鼻腔を擦った。  
駄目だ。

この記憶は、この想いは、ヘリクリサムのものなのに。  
離し難く、縋り付いてしまう。  
アネモネも分かっているのか、俺の背を優しく撫でた。

「スイレン。私は、ずっと貴方を見ていた。生まれてからずっと、

リクの生まれ変わりである貴方を」

俺が顔を上げると、アネモネは母さんみたいな、全てを包む様な笑みを浮かべていた。

流れた涙を掬い取り、頬にキスをくれる。

それは、親愛の証。

だが、親が子を想う様な愛の形だった。

「貴方が本当に好きだったのは、私ではないはずよ。ただ、あの子は私の生まれ変わりだから。貴方はリクの記憶に引き摺られて、そう勘違いしただけ」

優しく、残酷に。

彼女は俺の想いを否定した。

分かっていたんだ。

だけど、素直になれなくて、見てない振りをした。

それでも。

「俺は、確かに貴女が好きだった。今さらだけど、ね。だから、俺の想いを、否定しないで」

「スイレン……」

縋ってしまう。

初恋は叶わないって言うけれど、本当にそうだと思う。

俺の想いは本物だった。

それは、ヘリクリサムと俺にしか分からないことだ。

だけど、アネモネに否定されるのは辛い。

「ありがとう。私を好きになってくれて」

もしかしたら、羨ましかったのかもな。  
生まれ変わったって、忘れない二人を。  
そして、憧れたのだ。

「ああ、好きだったよ」

ゆっくり、俺とアネモネは離れた。

「スイレン！」

聞こえたのは、世界で一番大切にしたい女の子の声。  
振り向けば、リリイが俺に向かって走っていた。  
涙を浮かべ、抱き付いてくる。  
大丈夫だから。  
俺のリリイ。泣かないで。

「じゃあね」

「幸せにな」

ヘリクリサムがアネモネの手をとっていた。  
二人に声をかけられ、頷く。  
二人は幸せそうに微笑んで、歩いて消えて行く。

さようなら。

俺の親愛なる人達。

「良かった……。スイレンが消えなくて」

腕の中にいるリリイ。

ああ、アネモネ。

今更どうしてくれる。

「……スイレん？」

こてんと愛らしく、リリイは首を傾げた。  
自覚すれば早い。

俺はリリイを抱き寄せ、微笑んだ。

「好きだよ。リリイ」

「な、は、なあ!？」

可愛い。

思わず頬が緩む。

リリイが混乱している間に、頬にキスすれば、リリイは顔を真っ赤に染め上げる。

耳まで真っ赤にしているのが愛しくて、耳に唇を寄せた。

「愛してる」

逃げようとするリリイを抱き締めて拘束した。

どうせ此処は現実じゃないから、大胆なこと出来る。

意識が正常化する前に深く口付けた。

獰猛に、今までの分を取り戻す様に。

やがて抵抗がなくなってきた、柔らかな草の上でリリイと横になる。

そのまま、押し倒して、優しく貪った。

ねえ、アネモネ。

貴女のせいで気付いてしまったんだ。

貴女より、リリイがどれくらい愛しいか。愛しているか。

せつかく今まで無意識に抑えていたのに、台無しだ。

でもこういうところが、父さんに似て、ヘリクリサムの生まれ変わりなんだと感ずる。

総じて、俺も男だったってこと。

気付いたからには、リリイ。

覚悟しろよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2886r/>

---

花よりも華の様に舞う桜

2011年12月18日09時42分発行